

第九章 軍備縮少案ノ討議

一三四 明治三十二年六月 山本海軍大臣ヨリ
青木外務大臣宛

ラムシップ製造制限ニ関スル我海軍側意見通達ノ件

将来ラムシップ (Ram ship) ヲ製造セサル

コトニ関スル約定ニ付意見

列国一致ナレハ「ラムシップ」ヲ未来ニ於テ製造セサルコトニ同意スヘシ実施期日ヲ定ムルノ必要アラハ成ルヘク早キ方ヲ可トス然レトモ現ニ製造中ノモノニ就テハ變更スルヲ許サス

明治三十二年六月

海軍大臣 山本権兵衛 (印)

註 本書ハ海軍大臣官房機密第一〇五号附屬書ナリ

一三五 明治三十二年六月九日 阪本海軍大佐ヨリ
山本海軍大臣宛

軍備縮少軍器制限ニ関スル討議ノ件 (一)

一、今ヨリ三年若ハ五年ヲ期シテ加盟国ハ左ノ制限ヲ守ルヘシ

一、速射砲ハ二十三珊ノ口径ヲ越ヘサルヘシ

一、非速射砲ハ四十三珊ノ口径ヲ越ヘサルヘシ

一、砲長並ニ初速ハ現在ノモノヨリ以上ニ登セサルヘシ

一、擲弾法モ同シク現在ノ方法ヨリ異ナリタル法ヲ用ヒサルヘシ

一、退脚力ヲ利用シテ裝弾法トナスノ裝置ヲ用ヒサルヘシ

ニ (automatic loading)

各国委員共ニ斯ル複雑ナル提按ハ逆モ協定ニ到着スルノ困難ナルヲ論ス爰ニ於テ仏國委員ハ左ノ空漠トシテ捕捉スル処ナク協定シ易キ新按ヲ提起ス而シテ露委員モ亦タ原案ヲ放棄シテ直ニ之ニ賛動ス

仏國委員按

一、加盟国ハ何年何月以後何カ年ヲ期シ現存ノ砲種ニ對シテ (現存トハ各国ヲ通シテノ謂ナリ露ノ提按ノ精神モ亦然リシナリ) 前裝砲ヨリ後裝砲ニ改選シタル如キ急劇ナル改選ヲ加ヘサルコトヲ約ス且現存ノ口径ヨリ以上ニ増加セサルヘシ (現存トハ同シク各国ヲ通シテノ謂ナリ故

号外第一号

平和會議ニ関スル報告 (第一部委員會經過)

明治三十二年六月十九日

海牙府 海軍大佐 阪本俊篤

海軍大臣 山本権兵衛殿

本週ヲ以テ第一部委員會ノ概略ヲ終了シ候間其經過ノ概況ヲ報告仕候尙毎会ノ順序ヲ追フテノ細報ハ前回ノ報告ヨリ号ノ順ヲ追テ報告可仕候也

第一部委員會ノ結果 (海軍部) ハ陸軍部ニ同シク一言之ヲ蓋ヘハ遂ニ無結果ニ終了セリト云フヲ得ヘシ但シ第一議題ナル重要ナル減兵問題ニ議及致サス候得其他ノ問題ノ結果ニ鑑ミテ其同シク無結果ニ終了スヘキハ火ヲ階ルヨリ明ナルモノニ有之候

此ヨリ露國提案第二ヨリ第四議題ニ係ル委員會ノ概況ヲ述フヘシ

第二問題ニ関シテハ露國ヨリ当初先ツ左ノ案ヲ提起ス

ニ現世界存在ノ最大口径ヲ以テ其最上限トナスノ謂ナリ)

如斯空漠タル無害無毒ノ按ハ贊同ヲ与フルモ專ニ害ナキヲ以テ小官ハ年限ニシテ余リ久キニ彌ルコト無ク且各国ニシテ同意スル処タラハ我ニ於テ贊同ヲ与フルモ妨ナキ旨ヲ以テス然レトモ獨及米國委員ハ口径ニ制限ヲ設ケントスレハ勢ヒ甲飯ノ厚即抵抗力モ制限セサル可ラス云々ノ論ヲ楯ニ之ヲ排斥シ (伊) ハ理屈ナシニ直ニ不同意ヲ唱ヘ (土) 國ハ已レノ砲類ノ他國ニ比シテ劣等ニ在ルコトヲ顧慮シ (土) 國ハ未タ多分ノ前裝砲ヲ有スルヲ以テ之ヲ改選セントスレハ將來ニ向テ本案ノ為メニ拘束セラルヘントノ掛念ヲ以テ土國委員ノ竊カニ小官ニ彼ノ苦心ヲ語りタルコトアリ此時小官ハ彼老大帝國ノ末路此苦心ノアルコトヲ憐レミ且本按ノ精神ハ斯ル拘束力ヲ有スルモノニ非ル可キヲ懇諭センカ彼未タ釈然タルモノアラサリキ) 議長ヨリ本按ノ拘束力ニ関シテ懇々解説スル処アリシニ拘ラス尙贊同スルコトヲ躊躇スルニ至レリ

斯クシテ仏國委員按ハ各國贊不贊有耶無耶ノ間ニ葬リ去ラレタルニ又モヤ近時ニ至テ露委員ヨリ同様問題ニ関シテ新案ノ提起セラル、ニ至レリ

露国第二新按

加盟国ハ或年限間ヲ期シテ左ノ制限ヲ守ルコトヲ約スヘシ

第一、如何ナル砲種ヲ問ハス其口径ハ十七吋即四百三十一・七ミリメートル (17 inches=431.7mm) ヲ超過セサル可シ

第二、砲長ハ四十五口径ヲ以テ其最大限界ト定ム

第三、弾丸ノ初速ハ三千ヒート即九百十四メートルヲ超過セサルヘシ

第四、甲鉄ノ最大抵抗力ハ最近「クルップ」式ノ模範ニ依リ三百五十五「ミリメートル」ト之ヲ定ム

且日本案ノ年限間ハ五カ年ヨリ多カラサルヘシ

又曰各国政府ニシテ露国ノ提按ノ諸点(口径、砲長、初速、甲鉄、年限)ニ於テ不同意ナルニ於テハ各国政府ニ於テ賛同ヲ与ヘラレ得ヘキ條件ヲ示サレタシ云々

本按ノ委員会議ニ上ルヤ英仏独米伊委員皆其複雑ニシテ協定シ難キ所以ヲ論シテ尽ク之ヲ排斥ス(前回会議ノ当初ニ於テ既ニ露国委員ヨリ提起セルト同様ナル案ニ於テ既ニ其行レ難キヲ議決シテ之ヲ排斥シタルニ拘ラス再ヒ同様ナル本按ヲ提起シテ之ヲ議ニ上セタルモノハ甚タ厚顔ノ仕様ニシテ而カモ議長モ亦之ヲ認許シテ委員ノ賛同ヲ求メタルノ

此際議長ノ所置ハ甚タ各委員ヲ蔑如セル失当ノ処置ト云サル可ラス如何トナレハ議長ハ各委員ノ意見(尽ク反対)ニ満足スル能ハスシテ強テ本国政府ノ意見ヲ確メシムルト云フノ一段ニ議事ヲ持行キタレハナリ小官其後英委員ノ (Admiral Fisher) ニ遭ヒ此事ニ話及セシニ氏ノ曰ク然リ或委員ノ一人ノ如キ大ニ議長ノ処置ニ憤慨シテ予ニ向テ宜シク抗弁ヲ提起スヘキコトヲ勸告シ来リタルモノアレド予ハ当時議長ノ苦心ヲ察シテ敢テ此事ヲ為サハル可キヲ以テ対ヘタリ且日本按ノ如キ速モ行ハルヘシトモ思ハレサレハ別ニ本国政府ノ意向ヲ聞ク迄モナシ再ヒ本問題ニ就テ会議アラハ本国政府ノ意見ナリトテ直ニ本案ノ不賛成ヲ唱フル決心ナリ云々其他伊国米國ノ意向ヲ探ルニ尽ク賛成ヲ与ヘサルヘキ模様ナリ

如斯本按ハ一種変体ノ来歴ヲ有シ且一種ノ政略上政府ノ意向ヲ確ムヘシ(一寸逃レノ為)トノ一段ニ遭遇シ居ルモノナレハ特ニ本按ニ対シテ稟議スルノ必要アルヲ認メス且此地ニ於テハ如斯情実ノ纏綿ヨリ産出セルモノタルノ事情ヲ詳悉セラレサルノ貴地ニ向テ唐突ナル問題ヲ稟議シ却テ兩地ノ間ニ誤迷ヲ紛起シ為メニ議事ノ進捗ニ障害ヲ生スル如キ事アルヲ虞レタルニ付凡ソ賛同ヲ与フルモ事々害ナキ充

真意甚タ解シ難キモノアリ是レ或ル一種ノ事情ヨリ余議ナク再ヒ之ヲ提起シタルナラン)

本按ハ今度再ヒ委員会ニ於テ満場ノ異議ニ遭ヒタレハ此儘ニテハ直ニ案頭ニ於テ敗死セシムルニ終ルト見テ取ルヤ議長ハ満場委員ノ不同意ナルニ係ラス更ニ議場ニ向テ本案ノ成立ノ大切ナル所以ヲ喋々シ更ニ委員ニ向テ本国政府ノ意見ヲ確メンコトヲ希望スルノ旨ヲ以テ一寸逃レニ本案ノ余命ヲ繋カンコトヲ努メタリ(前記露案ノ且曰以後ノ年限並ニ各国政府ノ所見ヲ承知シタシ云々ハ此時露委員ヨリ發言ス)

各委員共ニ議長ノ手前ニ対シ且ハ議長ノ苦心ヲ思ヒ遭リ流石ニ議長ノ請求ヲ否ム能ハサレハ各其本按ノ複雑ニシテ容易ニ研究ヲ終ルヘクモアラス或ハ本開期中ニ研究ヲ了シ返答ヲ得サルコトヲ恐ル、ナド皆其困難ヲ訴ヘ米國ノ「マハシ」大佐ノ如キ本按ヲ考究スルニハ小クモ六カ月以上ヲ要スヘシナド苦情ヲ唱ヘタリ斯テ本問題ハ本會議ノ最終マテ其儘中止ノ姿ニナシ置キ追テ各委員ニ於テ本国政府ノ意見ヲ知り得タル後ニ於テ議定スヘシトノ一段ニ議長ノ無理押シ付ニテ落着シ僅カニ委員会ノ按頭ニ即死ノ運命ヲ免ル、コトヲ得セシメタリ

分ノ余裕アルモノハ一々稟議ヲ待タスシテ返答ヲ与ヘテ妨ケ無之モノト心得即チ本按ニ対シテハ左ノ答辭ヲ与ヘ候決心ニ有之候(他ノ同様ノ問題ニ対スルモ前記ノ心得ニ依ル)

回答按ノ概要

一、本邦政府ハ露政府提按ノ儘ニテハ賛成難仕候即本邦政府ノ意見ヲ徴セラル、トセハ

- (1) 口径ト初速ハ原按ニテ可ナリ
- (2) 砲長ハ五十口径迄増進ヲ可トス
- (3) 甲鉄ハ稍々制限ニ過レハ五百ミリメートル迄増進ヲ可トス
- (4) 年限ハ三ヶ年ヲ以テ適度ト考フ

(交譲ノ場合ニハ五ヶ年ヲ期スルモ事ニ害ナキノ見込ナリ)

以上ノ加盟ニ関シテハ各国全会一致ニ待ツ可キハ勿論ノコトニ有之候

以上ハ本邦政府ヨリ回答トシテ提出スヘキノ要領ニ可有之尙本件ニ関シテハ仏國駐在陸軍砲兵大佐有坂氏(氏ハ兼テ陸軍大臣ヨリ會議上技術上ノ問題ニ関シテハ上原工兵大佐ノ顧問ニ応スヘキ旨内命有之由)並ニ在英国松永

少將ニ於テ在英造兵監督官諸氏ノ意見ヲ徵セラレタルモ
ノ等ニ抛リ之ヲ參酌シテ本回答按ヲ決定ス

尙本按ハ到底成立ノ見込無之如何トナレハ各国共ニ（自己
ノ所見ヲ提ケテ交譲セント欲スルモノト雖）必ス全会一致
ヲ以テ條件トナス可シ然ルニ（英ノ如キ（伊ノ如キ必ス其所見
ヲ提出スル迄モナク先ツ本案ヲ排斥シ去ル可レハ遂ニ全会
一致ノコトハ望ムヘクモアラス即チ会々本案ノ如キハ委員
会案頭ノ即死ヲ免レテ僅ニ今日ノ余喘ヲ保ツモノタルニ過
キサルヘシ

附記英ノ委員余ニ告テ曰其後議長ヨリ本按ニ関シ如何ニ
シテカ交譲ノ法ナカル可キヤト相談ヲ受タレトモ予ハ遂
ニ其如何トモ為ス能ハサルヲ以テ之ニ對ヘタリト以テ英
ノ持スル強硬ナル意向ヲ察スルニ足ル

如斯シテ其第二議題ノ前項新火器云々ハ一ノ効果ヲ見スシ
テ各国贊不贊ノ間ニ埋没シ去ルニ至ルヘシ

次ニ其末項ノ新爆裂藥ニ至テハ之ニ関シテ露委員ヨリ左ノ
新按ヲ提起セリ

一 加盟國ハ將來ニ向テ殊更ニ敵ヲ窺息（殆ント敵ヲ毒死
セシムルト同意味）セシムルヲ目的トスル処ノ爆裂藥ヲ
使用スルコトヲ禁スルコトヲ約ス

第三問題ハ陸軍部ニ屬スルモノトシテ議論ニ上ラスシテ息
ム

第四問題ノ海底水雷艇ニ関シテハ

各国共ニ列國ニシテ同意ナレハ異論ナシト云ヘルモノ多
キヲ占ム其内不同意國ヲ挙レハ

仏國和蘭國瑞典國ニシテ米國ハ即答ヲ欲セス

如斯シテ本問題モ全会一致ヲ得サレハ遂ニ成立ノ見込アル
コトナシ

衝角ニ関スル件

本問題程異論ノ少ナキモノナシ蓋シ各国共ニ本問題ニハ重
キヲ置カス皆齊シク各國ニシテ同意ナレハ我ニ於テ異議ナ
シト云フニ過キス諸問題中独リ成立ノ見込アルモノナレハ
彙ニ電報ヲ以テ即チ本條約實施ヲ開始シテ製造若クハ計画
ニ故障ヲ及ボサ、ルヘキ年月日ノ訓令ヲ仰キ候次第ニ有之
候

目下製造中若クハ計画中ニ在ルヘキ軍艦ハ勿論本問題ニ所
謂約東外タルヘキハ議場ニ於テ明晰ナル説明有之候間掛念
無之候

尙本問題ハ露政府ニ於テ直面目ニ提起シタルモノニ無之模
様ニテ機會アラハ本問題ヲ撤回セント欲スルノ気色相見ヘ
申候

斯ル名按ニハ誰トテ意義ヲ唱フルモノアルヘキト思ノ外強
抗ナル抗弁ハ北米合衆國ノ委員有名ナル「マハン」大佐ノ
口ヲ籍テ突出セリ

氏ノ抗弁ノ要ニ曰蓋シ人ノ之ヲ禁セント欲スルモノハ其使
用ノ野蠻的ナルヲ以テノ故ナラン然リ今日ヲ以テスル時ハ
或ハ野蠻ヲ以テ之ヲ目シ得ヘシ然レトモ諸君知ラスヤ中古
ニ於テハ既ニ火器ヲ以テ慘酷野蠻ノ兇器ト謂ヘリ然ルヲ況
ンヤ其後破裂榴彈オヤ最終ニ水雷オヤ皆其当初ニ於テハ
慘酷ナリ野蠻ナリト目セラル、兇器モ遂ニ人ノ慣用スル処
ト為リ終ルニ非スヤ知ラス今日野蠻ヲ以テ目セラル、ノ兇
器モ遂ニ明日ノ採用スル処トナリ了スルナキヲ保センヤ
云々

議論トシテハ兎モ角モ交譲ヲ旨トスルノ會議ニ於テ斯ル理
窟ノ陳述ハ幾多ノ委員ヲ感服セシムルニ効アリシヤ然モ本
問題ノ如キモ全会一致ニ待タサル可ラストセハ氏一人ノ抗
弁ハ会々本問題ノ成敗ヲ繫クモノニシテ氏ノ議論モ亦榮ア
ルモノト謂フヘシ

兎モ角ニ一票ノコトニテ本問題モ亦運命甚タ覺束ナキモノ
ニ有之候

其後ノ委員會ニ於テ噓馬國委員ヨリ衝角ヲ廢スルコトニ反
對スル旨ノ發言アリタレハ露委員ハ之ヲ利用シテ全会一致
ニ見込ナケレハ本問題ヲ撤回スヘシト申出タリ然レトモ總
会迄ハ此儘ニテ置ヘシトノ議ニテ息ミタリ以テ本問題ノ成
立スヘキヤ否ヤハ甚タ漠然タルモノタルヲ知ルヘシ

別ニ露國委員ヨリ平時ニ於テ衝角ノ危險ヲ豫防スルカ為メ
ニ物ヲ以テ平常衝角ヲ包被スルコトヲ約束センコトヲ發議
セシカ半分ハ嘲弄的ニ各委員ヨリソワ如何ナル名案アリヤ
御計画アラハ伺ヒ度ナト遂ニ委員會ノ問題外ナリトテ之ヲ
排斥シ終リヌ

又露委員ヨリ戰時海軍ニ於テ外國武官ノ戰況視察員ヲ許容
セントスルノ約ヲ為サンコトヲ委員會ニ建議セシモ如斯件
ハ其際各國間ニ於テ随意ノ懸合トセハ事足りナン何ソ必シ
モ特ニ締約ヲ為スノ要アランヤトテ是亦タ無造作ニ排斥シ
去レリ

以上ハ当初ヨリ今日迄第一委員會ノ概況ニ有之ヲ以テ將
來ノコトモ略々察セラルヘキモノ有之候

右謹テ報告仕候也

一三六 明治三十二年六月二十五日 阪本海軍大佐ヨリ
山本海軍大臣宛

軍備縮少軍器制限ニ関スル討議ノ件(一)

号外第二号

平和會議ニ関スル報告(第一委員会経過)

明治三十二年六月廿五日

海牙府 海軍大佐 阪本 俊 篤

海軍大臣 山本権兵衛殿

前回ノ報告(号外第一号)ニ第一委員会ニ於テ既ニ露国政府回章ノ第二議題ヨリ第四議題迄ノ審査ヲ了シ略々其結果ヲ得タル事ニ就テ報告仕置候処本週ハ右審査ノ結果ヲ報告委員(埃国海軍少佐ソルチック伯 Comte de Solhi)ヨリ第一部委員總會(六月二十二日ヨリ同二十三日ニ渉ル)エ報告シ即チ委員總會ニ於テ最終ノ決議ヲ致候其結果ハ左ノ如シ

露国回章ノ第二議題ノ前項兵器ニ関スル件

右ハ号外第一号第六頁ニ露国第二新按トシテ示ス如ク海軍委員会ニ於テハ議長ノ骨折ニ依リ僅ニ案頭ノ即滅丈ケヲ免レ各委員ヨリ政府ノ訓令ヲ待テ各通告スル処アルヘシトノ一段落ニテ今日迄余喘ヲ保チ居リタルモノニシテ我カ全權

候尙本問題ハ海岸砲台ノコトニモ適用セラルヘキ筈按者ノ精神ニ有之候
因ニ記ス本按ニ所謂甲敏ノ抵抗力ニ制限ヲ定メント欲セ

ハ各物質(鋼、堅鉄等)ニ応シテ其抵抗力ノ係數ノ比

較表ヲ製リ加盟國ハ齊シク該表ニ從テ甲敏ノ抵抗力ヲ制限スルノ齊等ノ方法ニ依ラサル可ラサル事ト思考仕候

次ニ露国回章第二議題ノ末項

新爆裂薬ノ使用ヲ禁止スルノ件

本按ハ前回ノ報告(号外第一号)ニモ略々委員会ノ景況申述候通り加盟國ハ殊更ニ毒瓦斯ヲ以テ害敵ノ目的ト為ス処ハ爆裂薬ノ使用ヲ禁止スルコトヲ約スト云ヘル夢ノ如キ制限按ニ対シテ今回委員總會ニ於テモ米國委員ヲ除クノ外ハ誰トテ之ニ異議アルヘキ皆異口同音ニ全会一致ナラハ異議ナシト明言セリ

議長ハ米國委員一人ノ為メニ全会一致ヲ欠キ為メニ本按ノ如キ無毒無害ノモノサヘ其成立ノ危キヲ焦慮シ頻リニ米國委員タル「マハン」大佐ニ向テ其反省ヲ促シ露國ノ海軍部委員モ起テ頻リニ「マハン」大佐ノ論拠ニ駁撃ヲ試ミタレトモ大佐ハ海軍分科会ニ於ケル自己ノ論拠ヲ堅ク執テ動かス更ニ論鋒ヲ進メテ曰諸君ハ毒煙ヲ以テ敵ヲ窒息死ニ至ラ

ヨリノ回答按ノ要領ハ号外第一号ノ第十二頁ニ掲記仕置候通りニ有之候処(通告ハ未タ見合セ置タリ)今回委員總會ニ於テ和蘭國ノ全權「カルナベック」氏(海軍部委員ノ議長ナリ)ヨリ和國全權ノ資格ヲ以テ且ツハ海軍委員會ニ議長タリシ經驗ニ依ルト云ヘルノ理由ヲ以テ頻リニ本按ハ本會議間ニ議了決定スルノ不得策ナル所以ヲ説キ如此鄭重ナル考究ヲ要スル案ハ宜シク各國政府ヲシテ研究ニ必要ナル時日ヲ假スコトヲ必要トス若シ強テ早計ニ意見ヲ徵スルカ如キ会々各政府ヨリ不同意即チ否認ノ回答ヲ招クノ恐レアルモノナレハ此際宜シク本問題ヲ議了スルコトヲ延期シ之ヲ將來ノ會議ニ讓ルヘシトノ議ヲ提起シテ全会一致ヲ以テ延期ヲ可決セリ是レ他ナシ氏ハ議長トシテ略々委員會ノ意向ヲ熟知シ且ツハ其後ノ形勢ニ顧ミルモ此際之ヲ議了センニハ只空シク委員總會按頭ニ廢棄ノ運命ニ接スルハ即チ目前ニ在ルヲ以テ寧ロ之ヲ延期シテ余命ヲ永遠ニ保タシメントスルノ姑息策タルニ過キス各委員モ亦強テ追窮スルコトヲ欲セス即之ニ向テ緩和的ノ否決ヲ与ヘタルト同時ニ一方議按ノ体面ヲシテ保存ヲ得セシメタルニ満足スヘキモノナリ

即チ本問題ハ考究問題トシテ將來ニ繼續スヘキモノナレハ宜シク其筋ノ考究ニ附セラレンコトヲ希望スルモノニ有之シムルヲ慘酷ナリ野蠻ナリト思惟セラルレトモ特ニ知ラスヤ一発ノ魚形水雷ハ一艦ノ乗員ヲ拳テ之ヲ水中ニ窒息死ニ至ラシムルニ非スヤ一ハ毒煙ヲ以テスルト一ハ水ヲ以テスルト其死ニ至ラシムルノ所以ハ一也且一破裂彈ノ一挙ニ五十人ヲ殺スト一魚形水雷ノ一発ニ五百人ヲ殺スト孰レカ慘毒ノ多キヤ是レ予ノ諸君カ独リ毒煙彈ヲ禁シテ而シテ魚形水雷ノ使用ヲ禁セサルノ理由ニ釈然タル能ハサル所以ニシテ又タ予カ本按ノ禁制ノ理由アルヲ認メサル所以ナリ云々

大佐ノ論鋒ハ更ニ分科会ニ於ケル時ヨリモ歩武ヲ進メタリト雖惜哉其論鋒ハ稍々三百代言的ノ口調ニ流レテ却テ分科会ニ於テ兵ハ兇器也今日野蠻ヲ以テ目セラル、モノ焉ノ明日ノ採用ニ終了スルヲ知ランヤ云々(号外第一号十六頁参照)抗弁ノ方遙カニ雄渾簡潔ニシテ論鋒トシテハ却テ力アリシニ若カサリシナリ

大佐ノ論拠ハ識者ヲ待タスシテ其理由アルヲ知ル所謂尤モナル説タルヲ知ル然モ委員會ハ今ヤ堂々學識一世ニ傑出セル「マハン」大佐ヲ見スシテ執拗ニシテ大局ヲ通觀セサル好弁家ヲ見ントスルノ想ヲ為サシム蓋シ大佐ノ為メニ惜ムヘシトナス且大佐ハ相応ニ仏語ヲ解シ委員中ニハ幾多仏語

ヲ使フモノ大佐ニ劣ルモノ有リト雖他ニ対スルノ礼儀ヲ
憚リテ努メテ仏語ヲ使用スルノ慣例ナルニ係ラス大佐ハ無
頓着ニモ得メトシテ自國ノ言語ヲ以テ議論ヲ上下シ時ニ幾
多ノ議員ヲシテ茫然自失セシメ議長ノ依頼ニ依テ和蘭國ノ
全權ノ如キ屢々議場ニ向テ通訳官タルノ役目ノ勞ヲ取ルニ
至レリ且大佐ノ議場ニ於テ無遠慮ニ自國ノ言語ヲ弄セルノ
一事ハ暗々裡ニ各委員ノ不平トスルノ兆ハ既ニ前日「ゼネ
ーブ」赤十字委員会ニ於テ委員間ニ發表セラレ獨國ノ委員
「ゾルン」(Zorn)博士並伊國ノ全權「コント・ド・ニグ
ラ」(Comte de Nigra)ノ如キ各起テ自國ノ言語ヲ弄シ却
テ議場ノ喝采ヲ博セルカ如キ蓋シ大佐カ國際會議ノ慣例ニ
一種ノ異例ノ俑ヲ作リタルノ抗議ヲ意味スルモノタルニ過
キス尤モ是迄ハ委員会ノ範圍タルヲ以テ自國語ヲ使用スル
ヲ寛假セリト雖其正式ノ本會議(總會)ニ於テハ仏語ノ外
他ノ言語ヲ寛假スルコト莫ルヘキハ勿論トナス
斯テ本按モ米國一票ノ反對ノ為メニ全會一致ヲ欠クニ至ル
ヘキヲ以テ其廢棄ニ屬スヘキハ論ヲ待タス
次ニ露國回章ノ第三議題野戰ニ爆裂彈ノ使用ヲ制限スルコ
ト並ニ空中ヨリ爆裂彈ヲ投下スルコトヲ禁スル件ハ專ラ陸

禁止ヲ否トスルモノ

北米合衆國、噠馬、西班牙、法蘭西、葡萄牙、瑞典、
和蘭、土耳其、

可否ヲ明言セサルモノ (Abstention)

露西亜、セルビヤ、瑞西、

是迄海軍委員分科會ニ於ケル各國委員ノ意見ト今日委員總
會ニ於ケル意見ノ變遷ハ之ヲ対照スルニ頗ル面白キモノア
リ左表ノ如シ

海軍委員分科
會ニ於テ

委員總會ニ於
テ

禁止ヲ可トスル
モノ

白耳義、希、波、
暹、ブルガリヤ

全會一致ヲ條件
トシテ禁止ヲ可
トスルモノ

日、英、獨、
(露)、伊、(噠)、
(瑞典)

日、英、獨、(X)、
伊、(X)、(X)、
ローマニヤ

禁止ヲ否トスル
モノ

仏、(澳)、和、土

仏、(X)、和、土、
葡、瑞典、西、
米、噠馬

可否ヲ明言セサ
ルモノ

(米)、(暹)

露、セルビヤ、
瑞西

()ヲ施シタルモノハ變遷セル國名ヲ示ス

右變遷ニ就テ特ニ注目スヘキハ露國ノ言動トナス曩キニ海
軍分科會ニ於テ各委員ノ意見ヲ徵スル際ニモ露ノ委員ハ今

軍部ニ屬スルモノトシテ海軍部ニ於テハ議題トナラスシテ
息ム

因ニ記ス陸軍部ニ於テ本問題ノ決議ハ

野戰ニ爆裂彈ヲ制限スルノ案ハ成立セス只空中ヨリ爆裂
彈ヲ投下スルノ件ハ將來五ヶ年間ヲ限りテ其使用ヲ禁ス
ヘント云ルノ案ハ全會一致ヲ以テ成立セリ

第二ヨリ第四議題中全會一致ヲ以テ成立セルモノ唯此案
ノミナリ此按トテモ若無年限ニ將來ヲ禁ストセハ必ス仏
國委員ノ承諾スル処トナラサリシナラン是レ同國ノ如キ

軍用輕氣球ノ發達セル國ニ在テハ斯ル害敵法ヲ將來無年
限ニ約束スル如キハ自國ノ為メニ利スル所以ニアラサル
可ケレハナリ

尙陸軍部ニ屬スル委員會ノ細報ハ上原工兵大佐ヨリ直ニ
其筋ニ致セル報告ニ依ラレンコトヲ希望仕候

第四議題ノ前項海底水雷艇ノ使用禁止ノ件
委員總會決議ノ結果左ノ如シ

禁止ヲ可トスルモノ

白耳義、希臘、波留斯、暹羅、ブルガリヤ
全會一致ヲ條件トシテ禁止ヲ可トスルモノ

日本、獨逸、澳多利、伊多利、英吉利、ローマニヤ

茲ニ可否ヲ明言セスト (Abstentionノ意) 申出テタルニ

英ノ委員 (Admiral Fisher) ハ際カサス切リ込シテ曰ク

此ハ露國委員ノ御辭バトモ覺ヘス奇怪ナルコトヲ承ルモノ
カナ本禁止按ハ貴國ヨリノ御提按ニ非サヤト一坐相顧ミテ
微笑ヲ漏シタルニ議長ノ執成シニテ露國トテモ全會一致ナ
レハ異議ナシトノ事ナルヘシトテ其場ハ濟ミタレトモ(議
事録ニモ斯ク掲記セリ) 今日總會ニ於テハ尙更ニ中立棄權
(Abstentionノ適當ナル訳語ヲ發見セサレハ暫ク中立棄權
ト訳ス以下之ニ倣フ)ノ仲間ニ立チシモノハ其使用ヲ禁ス
ルニ反對ナル意向アルコト察スヘシ尙海底水雷艇ノ製造ニ
成効セル仏國ノ如キ米國ノ如キハ人皆善ク之ヲ知ルト雖ト

モ其他ノ國ニ於テハ未タ多ク之ヲ聞カス夫ノ仏米ノ禁止ニ
反對スルハ真ニ其意ヲ諒スルモノアリト雖トモ獨リ露國ノ

此按ニ對シテ遲疑逡巡ノ体度アルモノ此間幾微ノ存スルモ
ノナシトセンヤ露國ニ海底水雷艇製造ノ計画アルコトヲ耳

ニスルヤ久シ而モ未タ果シテ確然タルヤ否ヲ知ラス曩ニ野
元中佐ノ露國ヨリ此地ニ出張ノ際之カ取調ヲ依托シタルモ

未タ確答ヲ得ス其後六月五日附ノ同氏ノ來信ニ依ルモ未タ
此事アルヲ確メ得サリシカ今此言動ニ察スルモ將來同國ニ

此種ノ武器ノ使用計画アリヤノ疑ヲシテ益々之ヲ高メシメ
ントスルモノアリ

斯クテ第四議題ノ前項海底水雷艇ノ問題モ多数ノ反対者ノ
為メニ廃棄スル処トナリ終ヌ

次テ同議題ノ末項

將來製造軍艦ニ衝角ノ附着ヲ禁止スルノ件

本按ハ前回ノ報告(号外第一号)ニ於テ委員分科会ノ景況
ノ部ニ申述候通り諸問題中尤モ反对者尠ナキ按ニシテ或ハ
全会一致ヲ以テ成立スヘキノ望ミ有之候処其後噓馬國ノ反
対意見ノ提出有之シモ僅カニ一カ國ノ反对ニ過キス候処今
般委員総会ヲ開クニ迫ンテ更ニ多数ノ反对國ヲ生シ為メニ
本按モ遂ニ廢棄セラル、ニ至リ候今之ヲ海底水雷艇ノ例ニ
倣ヒ分科会ト總會ニ於テ各国意見ノ變遷ヲ対照セハ

海軍分科会ニ於ケル意見

委員総会ニ於
ケル意見

禁止ヲ可トスル
モノ

仏、希、暹、ブ
ルガリヤ

全会一致ヲ以テ
條件トシテ禁止
ヲ可トスルモノ

日、英、米、伊、
波、和、ローマ
ニヤ

禁止ヲ否トスル
モノ

噓馬
獨、澳、噠、西、
葡、瑞典、土

第四議題

海底水雷艇

否決

衝角

否決

以上ハ各国共ニ全会一致ヲ以テ條件トスヘケレハ本會議ニ
於テモ必ス否決ニ屬スヘキハ論ヲ竣タス即チ海軍部ニ屬ス
ル第二ヨリ第四議題ニ至ルモノハ尺ク

無結果ニ終ルヘキモノトス

因ニ記ス陸軍部ニ於ケルモ五カ年間空中ヨリ投彈ヲ禁止
スルノ案ノ外ハ凡テ無結果タルヘキモノトス

露國委員ヨリ分科会ニ提出セラレタル戦時視察員ノ件

ト平時ニ衝角ヲ包被スルノ件ハ委員総会ニ於テモ總テ

分科会ニ於ケルト同様ニ否認スル処トナレリ

斯テ第一部委員会ハ海陸軍部共ニ殆ント其全部ノ否決ヲ以
テ五週日作業ノ結果トナレリ京童語テ曰各国ノ委員ハ三種
ノ作業ヲ為シツ、アリ曰ク一種ハ破壊ノ作業ニ屬シ他ノ二
種ハ建成的作業ニ屬スト蓋シ一種ナルモノハ第一部委員会
ヲ指シ他ノ二種トハ第二委員会ノ「ゼ子ブ」條約ノ件ト
「ブルッセル」宣言ニ係ル戦律ノ改正ノ件ニ屬ス右二種ハ
委員ノ建成的作業トシテ最モ有効ナル成績ヲ告ケ「ゼ子
ブ」條約(海戦ニ適用スルノ條項十カ條ヨリ成ル)ノ如キ

中立棄權

露、△澳、△瑞 露、白、セルビ
典

△澳及ヒ瑞典ハ稍々否トスルノ口調ニ傾クモノナリ其
他發言セサリシモノハ分科会ニ於テ禁止ヲ可トスル仲
間ニ屬スルモノナリ

露國委員ハ分科会ノ當時ヨリ本問題ノ如キハ単ニ各國ノ意
見ヲ承知セント欲スルノ意ニ基キテ掲載セラレタルモノニ
シテ露國ニ於テ初メヨリ一定ノ意見アルモノニ非ストテ其
後モ期会アラハ本題ヲ撤回センコトヲ希望シ居リシカ果然
總會ニ於テハ中立棄權ノ仲間ニ立ツニ至リシハ海底水雷艇
ノ問題ト同シク仁愛主義ヲ標榜シ發言者タルノ体面ニ懸ケ
テ甚ク失当ナル言動トシテ目スヘキモノニシテ世間亦自ラ
物議ノ目的タルヲ免レサルニ至ラン

即チ露國回章ノ第二議題ヨリ第四議題ニ至ル迄ノ委員分科
会ヨリ委員総会ニ至ル迄ノ議定ノ結果ヲ括約スレハ左ノ如
シ

第二議題

兵器ノ件(大砲、甲鉞)

延期

爆裂薬ノ件

否決

第三議題 陸軍部ニ屬ス

既ニ委員総会ノ認定ヲ経テ本會議中成効物ノ先登第一ノ榮
誉ニ屬スルモノトス而シテ「ブルッセル」宣言ノ戦律改正
モ今ヤ委員ノ読会ヲ終テ起草委員ノ手ニ在リ脱稿近キニ在
ラントス右兩種ハ真ニ本會議ニ於ケル有効ナル遺物トシテ
後世ニ伝フヘキモノトナス

今ヤ第一部委員会ハ凡テ問題ヲ議決シ終リ剩ス処ノモノハ
彼ノ難題中ノ難題ト目セラレタル露國回章ノ第一議題タル
軍備縮少議題ノミ而シテ去二十三日ヲ以テ左ノ題答ヲ以テ
提起セラル

海軍ニ関スル按

Proposition formulées par la Représentant de la
Marine Impériale Russe.

Accepter le principe de fixer pour un terme de 3 ans
le montant des budgets de la Marine avec l'engage-
ment de ne pas en augmenter le total pendant cette
période triennale et l'obligation de faire connaître à
l'avance pour dite période:

1° Le total des tonnes des Vaisseaux de guerre
qu'on se propose de Construire, sans préciser les type
mêmes des bâtiments.

2° Le nombre des officiers et des équipages de la
Marine.

3°. Dépense pour les travaux des ports tel que forts, bassins et arsenaux.....&c.

意 訳

一、各国政府ハ原則トシテ左ノ事ヲ承諾ス
一、三カ年間ニ渉ル海軍ノ総豫算ヲ前定シ且其年期間ニ於テ其総額ヨリ以上ニ増加セサルヘキコトヲ約束シ且同年期間ニ於ケル左記ノ事件(三カ條)ヲ前以テ告知スル義務ヲ有ス

第一條 艦型ノ如何ニ係ラス製造セントスル処ノ軍艦ノ総噸数

第二條 士官並ニ下士卒ノ総数

第三條 港湾ノ建築ニ要スル費用即砲台、船渠、造船(兵)廠ノ類

本按ハ未タ討議ニ登ラサレハ原按ノ細密ノ趣旨ヲ詳悉シ能ハスト雖トモ其豫算ヲ定メ噸数ヲ定メ人数ヲ定ムルハ各国政府ノ自由ノ行動ニ屬シ而シテ其拘束上ノ義務トシテハ豫算総額ノ以上ニ越ヘサル可キヲ約シ且列記ノ事項ヲ告知スルノ義務アリト云フニ過キス一見平々坦々白湯ヲ吞ムカ如キ思ヒアラシム而モ政府ハ如此事項ヲ約束シ得ルヤ否ト云ヘル原則上ノ問題ハ必ス各国共ニ国法上ノ解釈ニ立入ラサル可ラサルヲ以テ種々ノ難問ハ是ヨリ紛起スヘク從テ原按

和(機密)第一四号

八月〇日接受

本会議第一委員会ノ調査事項タル軍備緊縮問題ハ露国政府ガ今回ノ會議ヲ開設シタル根本ノ趣旨ニ有之且其結果ハ列國ニ及ホス影響至大ナルト同時ニ其ノ議事ノ進行ニ於テ困難アル可キカ故ニ列国政府並ニ輿論ハ等シク本部ノ議事ニ注目致居候既送報告書中既ニ御閱了相成候如ク開會後數日ヲ經テ五月二十日ノ總會ニ於テ議長スタール男ガ議事一般ノ注意トシテ為シタル演說中ニハ仲裁裁判事項ニ関シテハ特ニ注意周到ニ説明スル処有之候得共兵備緊縮ノ事項ニ関シテハ其說示著シク淡泊ニ有之且其後數句ノ時日ヲ經過スルモ未タ一定ノ案件此部会ニ提出セラレズ從而世論ハ暗ニ露国政府ガ本問題ニ對シ適切ノ解釈提案ヲ有スル哉ヲ疑フニ至リ候

然ルニ其後六月廿三日ニ至リ露国陸軍委員デリンスキー大佐ハ別紙第一号案件ヲ提出シ又同国海軍委員シエーヌ大佐ハ別紙第二号ノ案件ヲ提出スルニ至リ候

陸軍ニ関スル案件ハ

第一、母国(殖民地ニ對シ母国ト云フ)内ノ平時陸軍常備兵員ヲ向フ五カ年間増加セザル列国協定ヲ締結スル事

第二、右ノ協定ヲ結フニ至ラハ可成各国共ニ其殖民地駐屯

ハ如何ナル題容ニ変化スヘキヤ測リ難キヲ以テ其按ノ決定ヲ待テ林全權ヨリ本邦政府へ請訓ノ稟義ト相成可申ニ付本問題ハ茲ニ暫ク擱筆スルコトニ仕候
右謹テ報告仕候也

一三七 明治三十三年六月三日 在蘭林公使ヨリ
青木外務大臣宛(電報)

露国回章中ノ軍備不擴張案否決ノ旨通知ノ件

六月三十日發
七月一日着

青木外務大臣 在海牙府 林全權公使

第六一号

露国回章中第一ノ提案(現在ノ海陸軍々備ヲ擴張セサルコトヲ規定スルコト)ハ六月三十日第一部委員会ニ於テ全然否決セラレタリ

一三八 明治三十三年七月三日 在蘭林公使ヨリ
青木外務大臣宛

軍備縮少案廢棄ニ関シ通知ノ件

附屬書 六月廿六日第一委員会議事録

軍備縮少討議經過

ノモノヲ除キ平時陸軍常備兵ノ員數ヲ一定スル事

第三、同年期間實際ノ陸軍豫算額ヲ高メサルコト

將又海軍ニ関スル案件ハ

三年間海軍豫算額ヲ高メサル事及同期間豫メ左ノ事項ヲ告知スル約束ヲ以テ三年間ノ海軍豫算額ヲ一定スル事ヲ合意スル事

其一、製造中ニ在ル軍艦ノ噸数

但シ船艦ノ種類ヲ詳示スル事ヲ要セズ

其二、海軍士官及水兵ノ員数

其三、砲臺、造船所、武庫等ノ如キ軍港專業ノ費額

ト云フニ有之候、查スルニ右兩議案ハ単ニ軍事局部ノ觀察ニ於テ不備ナルノミナラス、方今列國ノ政体上ニ基ク觀察ニ於テモ亦考量頗ル淺薄ト評セサルヲ得ス、露国政府カ本問題ニ関シ当初ヨリ一定ノ考案ナク時期迫ルニ從ヒ無拠即席ノ提案ヲ編出シタルモノナル可シトノ推測ハ甚ク實際ニ近ク被存候就中陸軍ニ関スル案件中母国ノ兵備ノミヲ制限シテ殖民地ノ兵備ヲ制外ニ置キタルハ其真意ノ存スル処ハ兎モ角帝國ノ如キ四圍皆歐強國ノ殖民地ナル國柄ニ於テ到底異議無キ能ハサル点ニ有之候仍而本委員ハ該議案ノ成立セントスルニ於テ而ハ反駁抗議ヲ提スルト同時ニ帝國

政府ノ訓令ヲ仰カント存居候処幸ニ後述ノ如ク討議未タ熟セサルニ早クモ全廢ノ態ニ相成候

該兩議案ハ六月廿四日ノ議題ニ上リ候処陸軍議案ニ対シテハ独逸陸軍委員シユワルツホツフ大佐ハ有力ナル反對説ヲ述ベ海軍議案ニ対シテハ英国海軍委員フッシャー副提督ヲ始メ仏国委員等代議政体国ニ於テハ斯ル列国協定ニ一致スルニ困難アル旨ヲ論拠トシテ本案反對説ヲ唱ヘ決局兩案ヲ審査委員ニ附托スル事ト相成候

越而六月三十日ノ第一委員会ニ於テ陸軍事項ニ関スル審査委員ハ其審査ノ結果ヲ報告致候其要旨ハ

第一、五年ノ期間タリトモ平時常備兵ノ員數ヲ一定スルコトハ同時ニ他ノ国防ノ諸原因ヲ制限セサル以上ハ頗ル困難ナリトス

第二、国防ノ他ノ原因ハ各国異様ノ見解ヲ以テ而制制スルカ故ニ今之ヲ列国協定ニ依リ規定セントスルハ等シク至難ナリトス

是故ニ委員会ハ遺憾ナガラ露国政府ノ提案ヲ受理スルヲ得ズ、而シテ委員会多数ノ意見ハ列国政府各自ニ於テ而本問題ニ関シ猶詳密ノ研究ヲ遂ケン事ヲ望ムト云フニアリ、

ジョアー氏ハ本委員会ノ決議案ヲ左ノ如ク提議シタリ

委員会ハ現今実ニ世界ノ重負タル陸軍費用ヲ制限セン事ハ人類ノ有形の無形の幸福ニ取リテ大ニ熱望ス可キ事ト信ス

蓋シ仏国全權ノ真意ハ露国政府ノ提案ヲシテ死シテ余榮アラシメ延テ露国政府ノ會議開設ノ初念ヲ空カラシメザラントスルニ出候從而本動議ハ滿場一致ヲ以テ而容レラレ候將又海軍事項ニ関スル審査委員会ノ結果モ亦同日ノ議場ニ報告セラレ候処是亦同様露国委員ノ提案ヲ採用シ能ハサル趣意ニ有之候依而仏国委員ノ提出ニ係ル前頭ノ決議案ハ等シク海軍案件ニモ適用スル事ニ決議セラレ候要スルニ露国政府ノ軍備緊縮ノ議案ニ対シテハ異論百出シテ到底適當ノ解釈望ミ難ク終ニ最モ婉曲ノ言辞ヲ附シテ否認セラル、ニ至リ候仍而即日第六一號電報ヲ以テ其趣及報告置候得共猶本報告及別紙附屬書類ニ就キ詳細御承知相成度此段申進候 敬具

明治三十二年七月三日

在海牙府列国平和會議

帝國委員男爵 林 董(印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

右審査委員会ノ報告ハ同委員会ニ於テ而露国委員ヲ除ク外滿場一致ニ依リ採用セラレタルモノニ御座候

是ニ於テ議長白国全權ベールナート氏ハ審査ノ結果既ニ此ノ如キニ於テ而到底本議案ノ成立困難ナル可キヲ宣言シ更ニ露国委員シリンスキー大佐ニ向ヒ意見ヲ尋ネ候処同委員ハ時宜未タ本議案ノ通過ヲ許サ、ルニ於テ而ハ遺憾ナカラ之ヲ各国政府他日ノ研究ニ委スルノ外無キ旨ヲ答ヘ候仍而議長ハ更ニ右審査委員ノ報告ニ対シテハ滿場別ニ異論無キモノト認ムルヲ以テ而本報告ハ之ヲ朗読ニ止メテ票決ヲ与ヘサル事ニス可シト宣言致候処別ニ異論無ク議長ノ宣告ヲ是認致候、查スルニ議長カ該宣告ヲ下シ候本意ハ此報告ニ対シ可否ヲ表スルトキハ露国政府ニ対スル好意上各国委員ニ於テ躊躇スル処無キ能ハズ加之滿場一致ヲ以テ而此報告ヲ可決スルニ至ラバ露国政府ノ体面ニモ関ス可シトノ用心ニ出タルモノト被信候

次ニ瑞典国委員ビールト男ハ其主義ニ於テハ深く露国政府ノ提案ヲ嘆賞スルモ只実行上ノ困難ハ現今ノ時勢ニ於テ而遺憾ナガラ其採用ヲ許サ、ルカ故ニ希クハ各国政府ハ退而各自ニ本問題ノ解釈ヲ研究シ露皇陛下至徳ノ聖見ヲシテ最近ノ好機ニ貫徹セン事ヲ望ム旨ヲ述ヘ嗣而仏国全權ブル

(附屬書)

六月二十六日第一委員会議事録

軍備縮少討議經過

Confidential.

Conférence Internationale

De

La Paix.

Première Commission.

Séance du 26 juin 1899.

Présidence de Son Exc. M. Beaumart.

Le procès-verbal de la séance du 23 juin est lu et approuvé sans rectifications.

Le Président demande à M. M. GILINSKY et SCHÉINE s'ils désirent développer de plus près les propositions qu'ils ont formulées à la dernière séance et dont le texte imprimé a été distribué aux membres de la Commission.

Le Colonel Gilinsky prend la parole en ces termes :

« Après la séance du vendredi 23 juin, on m'a adressé plusieurs questions concernant les propositions russes que j'ai eu l'honneur de soumettre à la discussion de

la première Commission et je demande à présent la permission de donner quelques explications.

« On m'a fait observer que les deux premières propositions traitent la même question : pourquoi donc la partager en deux parties ? Il y a pourtant une différence entre ces deux propositions ; c'est-à-dire que la seconde est la suite de la première. La première traite la question en général : la question de principe. La Russie vous propose d'établir une entente stipulant la non-augmentation du chiffre actuel des effectifs de paix entretenus dans les métropoles. Si nous arrivons à une pareille entente, c'est alors que paraît la seconde proposition, la question des chiffres. Chaque pays devra déclarer, si nous le trouvons nécessaire, le total en chiffres ronds ou en chiffres précis,—c'est encore selon notre décision—de ses troupes entretenues en temps de paix. Il est à définir s'il est question du nombre des soldats seulement sans compter les officiers et les sous-officiers. Notre proposition vise seulement le nombre total des soldats.

Il faudra déclarer ensuite le nombre total des recrues pour chaque année qui ne pourra pas être dépassé pendant la durée de l'entente. Enfin il faudra fixer ces territoires éloignés dans les mêmes conditions que le centre du pays et de s'interdire la possibilité d'augmenter ces troupes en cas de nécessité ; par conséquent ces territoires doivent être considérés comme des colonies.

« Le troisième point vise le budget ordinaire, c'est-à-dire le budget nécessaire pour l'entretien des troupes existantes ; la fabrication des armes et les constructions qui ne sortent pas de l'ordinaire. Mais quand il s'agit du changement complet de canons ou de fusils ainsi que de la reconstruction des places fortes exigée par l'effet du nouveau canon de siège, la fabrication de la nouvelle arme demande des sommes énormes qui ne peuvent être trouvées dans les limites du budget ordinaire. Ces sommes là sont demandées par les Gouvernements de tous les pays en dehors du budget ordinaire ; c'est le budget extraordinaire qui ne peut être ni prévu ni fixé. La haute assemblée ayant sanctionné le changement des armements, a sanctionné d'avance aussi le budget extraordinaire. »

Le Président demande si d'autres membres ont à développer quelque proposition concernant le premier thème de la circulaire du Comte MOURAVIEFF.

le nombre d'années que le soldat reste sous les drapeaux car vous savez bien, messieurs, que le changement de ce terme influe sur le total de l'armée territoriale.

« Voilà de quoi il s'agit dans le second paragraphe de la proposition russe.

« Dans les deux propositions il s'agit des troupes entretenues dans le pays ; les troupes coloniales sont exclues car les colonies se trouvant toujours en danger ou même en état de guerre, il ne paraît donc pas possible d'interdire l'augmentation des troupes coloniales. La Russie n'a pas de colonies proprement dites, des possessions absolument séparées par la mer. Mais nous avons des territoires qui, sous le point de vue de leur défense se trouvent dans les mêmes conditions que les colonies car ils sont séparés du pays sinon par la mer mais du moins par des distances énormes et la difficulté des communications : c'est l'Asie Centrale et la circonscription militaire de l'Amour. Les deux sont extrêmement éloignées du centre de l'empire ; dans les deux les troupes sont peu nombreuses et se trouvent en face d'armées très considérables qui sont plus près de nos troupes que les renforts que nous pouvons envoyer de Russie. Il n'y a donc pas moyen de mettre

Personne ne demandant la parole, il ouvre la discussion sur les propositions russes et demande si tous les délégués ont reçu de leurs Gouvernements respectifs des instructions qui leur permettraient de se prononcer.

Les délégués de Siam, du Danemark et de Serbie déclarent que les instructions qu'ils avaient demandées ne leur sont pas encore parvenues.

M. Uvehara, délégué du Japon, dit qu'il ne s'est pas encore adressé à son Gouvernement afin de recevoir des instructions.

Le Président consulte la Commission sur la question de savoir s'il y a lieu d'aborder immédiatement la discussion du fond, ou s'il y aurait lieu de charger les deux Sous-Commissions techniques ou d'autres délégués d'un examen préalable.

Le Colonel de Gross juge préférable d'entamer immédiatement la discussion générale, on pourra décider après s'il y a lieu oui ou non de renvoyer l'examen aux deux Sous-Commissions.

Cette manière de procéder est adoptée.

La discussion générale est ouverte.

M. le Colonel de Schwarzhoff, dit : M. le Colonel GILINSKY nous a demandé non pas de voter, mais de

discuter les propositions, qu'il nous a soumises. Je suis prêt à me rendre à cet appel et je le ferai en toute franchise et sans aucune arrière-pensée. Mais tout d'abord je veux répondre quelques mots au Général DEN BEER POORTUGAEL.

Tout en reconnaissant sa haute éloquence, je ne saurais m'associer aux idées qu'il a exprimées et je ne voudrais pas que mon silence fût pris pour un assentiment.

Le peuple allemand n'est pas écrasé sous le poids des charges et des impôts, il n'est pas entraîné sur la pente de l'abîme, il ne court pas à l'épuisement et à la ruine. Bien au contraire; la richesse publique et privée augmente, le bien-être commun, le standard of life, s'élève d'une année à l'autre.

Quant au service obligatoire qui est intimement lié à ces questions, l'Allemand ne le regarde pas comme un fardeau pesant, mais comme un devoir sacré et patriotique à l'accomplissement duquel il doit son existence, sa prospérité, son avenir.

Je reviens aux propositions du Colonel GILINSKY et aux arguments mis en avant qui à mon avis ne concordent pas tous entre eux.

Les effectifs des unités de troupes, le nombre et la durée des rappels sous les drapeaux, c'est-à-dire les obligations militaires des anciens soldats, l'emplacement des corps de troupes, le réseau des chemins de fer, le nombre et la situation des places fortes.

Dans une armée moderne tout cela se tient et forme en son ensemble la défense nationale que chaque peuple a organisée d'après son caractère, son histoire, ses traditions, tout en tenant compte de ses ressources économiques, de sa situation géographique et des devoirs qui lui incombent.

Je crois qu'il serait très difficile d'opposer à cette oeuvre éminemment nationale une convention internationale. On ne saurait fixer l'étendue et la grandeur d'une seule partie de ce rouage compliqué.

On ne peut pas parler des effectifs sans tenir compte des autres éléments, que j'ai énumérés d'une façon très incomplète.

Du reste, on parle seulement des troupes entretenues dans les métropoles; le Colonel GILINSKY nous en a donné la raison, mais il y a des territoires qui ne font pas partie de la métropole mais en sont si rapprochés que les troupes y stationnées participeront certainement

D'une part on craint que les armements excessifs puissent amener la guerre, de l'autre que l'épuisement des moyens économiques ne rende la guerre impossible.

Moi, j'ai trop de confiance en la sagesse des souverains et des nations pour partager des craintes semblables.

D'un côté on prétend de ne demander que des choses qui se partiquent depuis longtemps dans quelques pays et que dans ce cas il ne se présenterait pas de difficultés techniques.

D'autre part on a dit que c'était justement la question la plus difficile à résoudre pour laquelle il faudrait un effort suprême.

Je suis tout à fait de ce dernier avis. Nous rencontrerons en effet des obstacles insurmontables, des difficultés qu'on peut appeler techniques dans un sens un peu élargi du terme.

Je pense que la question des effectifs ne peut pas être envisagée toute seule, à part, dégagée d'une foule d'autres questions auxquelles elle est presque subordonnée.

Tels sont par exemple le degré d'instruction publique, la durée du service actif, le nombre des cadres établis,

à une guerre continentale. Et les pays d'outre-mer? Comment pourraient-ils admettre une limitation de leurs troupes si les armées coloniales qui seules les menacent restent en dehors de la Convention?

Je me suis borné à indiquer d'un point de vue général quelques unes des raisons qui d'après moi s'opposent à la réalisation du désir, certes unanime, d'aboutir à une entente générale.

J'ajouterai quelques mots sur la situation spéciale de l'Allemagne.

En Allemagne le chiffre des effectifs résulte d'une entente entre les Gouvernements et le Reichstag.

Pour ne pas répéter chaque année les mêmes débats on est convenu de fixer ce chiffre d'abord pour sept, puis pour cinq ans.

C'est un des arguments dont M. le Colonel GILINSKY s'est servi. Certainement à première vue cet arrangement pourrait paraître nous faciliter l'adhésion, mais abstraction faite de la grande différence entre une loi interne et une convention internationale, c'est précisément ce quinquennat qui nous empêcherait en réalité de prendre l'engagement voulu.

Deux raisons s'y opposent. D'abord le délai interna-

tional de 5 ans ne concorderait pas avec le terme national de 5 ans, ce qui constituerait un grave inconvénient.

Ensuite la loi militaire actuellement en vigueur ne donne pas un chiffre fixe et immuable des effectifs, mais en prévoit au contraire une augmentation constante jusqu'en 1902 ou 1903, date à laquelle la réorganisation commencée au cours de cette année-ci sera terminée. Jusque-là il serait donc impossible pour nous de maintenir même pour deux années consécutives le même chiffre des effectifs.

Le Colonel GILINSKY répond qu'il lui est impossible de parler contre les raisons d'ordre intérieur qu'a fait valoir le délégué d'Allemagne. S'il propose une entente, c'est qu'il croit possible pour les Etats de prendre des arrangements adéquates.

En ce qui concerne l'Allemagne l'augmentation en cours n'est pas tellement considérable qu'on ne puisse l'arrêter pour la courte période de 5 ans ou même moins.

L'armée allemande n'en souffrirait point.

Quant à la richesse du pays, le Colonel GILINSKY n'a pas dit que tous les pays, appauvrissement, il y en a qui

peut-être plus humanitaire à l'argent dépensé pour les armements, il a seulement voulu répondre à un langage, qui peut-être et d'après-lui sûrement, est un peu excessif. Le chiffre des effectifs seul ne donne pas une juste base de comparaison de la force des armées, mais il y a une foule d'autres choses qu'il faut prendre en considération. Tout en gardant le chiffre de ses effectifs une puissance quelconque peut augmenter ses forces guerrières. L'équilibre qui est sensé exister à présent, sera détruit.

Pour le rétablir, il faut bien que les autres Puissances qui, peut-être, ne seront pas à même d'employer les mêmes mesures, soient libres de choisir entre tous les moyens qui leur conviennent.

M. de Karnebeek désire prendre la parole, non seulement parce que le délégué allemand a mis le Général DEN BEER POORTUGAEL, personnellement en cause, mais parce que ces considérations touchaient également un côté de la question qui pourrait être abordé par les délégués non-techniques.

Il déclare que si Colonel DE SCHWARZHOF soutient que les propositions russes soulèvent des difficultés techniques très grandes, peut-être même insurmonta-

progressent malgré les charges militaires, mais celles-ci ne sont certainement pas un auxiliaire de la prospérité publique. Les armements successifs ne sont pas de nature à augmenter la richesse des Gouvernements bien qu'ils puissent profiter à quelques personnes. Il concède volontiers que les chemins de fer ont une grande influence sur la défense du pays. Une armée devrait être beaucoup plus nombreuse si elle n'était pas reliée à l'intérieur par de nombreuses voies ferrées.

Les chemins de fer augmentent la possibilité de porter secours sur tous les points de la frontière. C'est pourquoi justement un pays riche en chemins de fer peut diminuer son armée ou du moins ne plus l'augmenter.

En ce qui touche les pays d'outre-mer il admet des exceptions, notamment pour ceux dans lesquels l'armée est petite ou en train de se former. Il s'agit ici non pas d'adopter en bloc une règle générale, mais de trouver un formule qui donne satisfaction sinon à tous, du moins à un grand nombre.

Le Colonel de Schwarzhoff n'a que quelques mots à répondre. Il craint de ne pas avoir été compris.

Il n'a pas nié qu'on pût trouver un autre emploi

bles, ce n'est pas lui qui prétendra le contraire. Si cependant le sens des paroles du Colonel est que la question ne mérite pas l'attention la plus sérieuse de la Conférence et même du monde entier, et que les raisons qui ont décidé le Gouvernement russe à soumettre ces propositions à la Conférence ne sont pas fondées, il se permet de déclarer qu'il est d'un avis diamétralement opposé, et il ne sera pas le seul à l'être.

Certes, il se peut que dans quelques pays les charges militaires présentent moins lourdement qu'ailleurs, mais il faut bien reconnaître que les sommes consacrées aux armements pourraient, même dans ces pays, être employées plus utilement dans un but différent.

Il est d'autres pays où l'on ne se place pas au point de vue du délégué allemand et où les charges présentent d'une façon évidente sur la prospérité publique.

M. DE GROSS sera le premier à avouer que la question ne doit pas seulement être envisagée du point de vue des pays dont la prospérité en apparence n'a pas encore souffert par les armements, mais même dans ces Etats on doit se demander si ces dépenses sont vraiment nécessaires pour la défense nationale ou si elles sont plutôt la conséquence de la concurrence

internationale sur ce terrain. Or l'idée fondamentale des propositions russes est justement qu'on pourrait arriver à diminuer le fardeau des armements, si on parvenait à s'entendre pour diminuer cette concurrence internationale.

Mais en outre il y a un autre point de vue pour envisager la question.

Pour les différents Gouvernements il y a non seulement un danger extérieur à prévoir, mais ils ont aussi à tenir compte de l'opinion intérieure, qui peut devenir à la longue un péril.

Les charges militaires énormes, qui pèsent sur les nations peuvent donner des armes dangereuses contre l'ordre social établi dans les différents pays.

Et si, en raison des difficultés techniques, nous nous déclarions trop facilement incapables de faire un effort pour arriver à une solution de cette importante question, nous jouerions le jeu de ceux, qui trouvent leur avantage dans un soulèvement contre l'ordre existant.

M. le Dr. Stancioff premier Délégué de la Bulgarie, fait le discours suivant :

Monsieur le Président.

J'ai l'honneur de prendre la parole pour affirmer la une atteinte aux droits et à la liberté des nations. Mais puisque nous la discutons librement, nous l'appliquons aussi de notre bon vouloir quand elle aura puisé sa force dans l'unanimité des consentements.

Et sans avoir la prétention d'influencer qui que ce soit, je signale d'avance mon vote pour laisser deviner aux pays qui entourent le mien, l'idée qui nous inspire et le développement pratique, que nous souhaitons à notre patrie pour son bonheur moral et pour sa prospérité.

Le Général den Beer Poortngaël tient à constater qu'il s'est borné à défendre le thème premier de la circulaire MOURAVIEW et en faire ressortir en termes généraux la portée humanitaire.

En ce qui concerne cette perte inévitable vers laquelle les nations sont entraînées, il n'a pas eu en vue l'état actuel des choses, mais l'avenir, c'est pour ce motif qu'il a employé les mots : « en continuant dans cette voie. »

Il rappelle en outre qu'il est un chaud partisan du service personnel, dont il a défendu le principe depuis quarante ans, mais que, n'ayant pas parlé dans son discours du service personnel, tout ce que M. le délégué

sympathie de la Délégation bulgare en faveur d'une proposition de quelque source qu'elle vienne, qui tendrait à ne pas augmenter l'effectif actuel des forces armées, pendant une époque déterminée.

Car si chaque nation est une mère paternelle à l'égard de son enfant privilégié « le soldat » pour qu'il ne soit jamais en état d'infériorité vis à vis de ceux qui l'entourent, il n'est pas moins certain, que la possibilité d'un arrêt dans l'augmentation de l'armement serait une économie et une source de richesse pour les peuples qui y souscriraient.

La paix armée est ruineuse pour des petits pays, dont les besoins sont nombreux et qui auraient tout à gagner en plaçant leurs ressources dans le développement de l'industrie, de l'agriculture et la nécessité du progrès.

C'est à ce point de vue que je me place en désirant emporter de la Conférence l'assurance de voir grandir la Bulgarie à l'intérieur, sans souci d'une augmentation d'effectif.

Dès que la circulaire de Son Exc. le Comte MOURAVIEFF a été publiée et livrée à la discussion, j'ai entendu dire souvent que la proposition qui nous occupe serait

allemand en a dit ne peut avoir aucun rapport avec ce discours-là.

Personne ne demandant plus la parole, le Président déclare la discussion générale close.

Il fait remarquer que les objections présentées ne se rapportaient qu'aux propositions relatives aux forces des armées de terre. Les propositions du délégué russe quant à la marine n'ont même pas encore été développées.

Il demande à l'assemblée s'il lui convient de discuter les questions de détail séance tenante ou s'il ne serait pas préférable d'en confier l'examen soit aux Sous-Commissions techniques, soit à un comité spécial, où seront surtout représentées les grandes Puissances, dont seules dépend une solution.

M. Raftalovich appuie le renvoi aux deux Sous-Commissions, des deux propositions russes ayant une base différente.

Son Exc. Sir Julian Pauncefote préférerait qu'un comité spécial fût institué pour l'examen de l'une et de l'autre proposition.

M. Bourgeois ne voit pas d'inconvénient à l'institution de ce comité, mais il désirerait que les petits

États, qui sont nécessairement enclins au maintien de la paix y fussent représentés également.

Le Président met aux voix la question par division.

Il est décidé de renvoyer les propositions russes à un examen technique par 17 voix (États-Unis, Belgique, Espagne, France, Grande-Bretagne, Italie, Japon, Pays-Bas, Perse, Portugal, Roumanie, Russie, Serbie, Siam, Suède et Norvège, Turquie et Bulgarie); contre deux (Allemagne et Autriche-Hongrie); et trois abstentions (Danemark, Grèce, Suisse).

M. Rafalovich suggère de charger chaque Sous-Commission de constituer et de former un comité spécial. Cette motion est adoptée.

Le Président propose à la première Sous-Commission de se réunir immédiatement (adopté).

La séance est levée à 11 heures et trois quarts.



一三九 明治三十二年七月四日 阪本海軍大佐ヨリ
山本海軍大臣宛

軍備縮少軍器制限ニ関スル討議ノ件 (三)

号外第三号

トモ提按者ノ趣旨ハ其第一項ニ於テ原則トシテ各国ノ協
諾ヲ得ハ更ニ第二ノ制限ニ移ランコトヲ期スルモノナリ
ト説明ス
Limitation

海軍 按

in principle 縮盟各国ハ原則トシテ左ノ事ヲ承諾ス
to fix beforehand

三ヶ月間ニ渉ル海軍ノ豫算ヲ前定シ且其年期間ニ於テ其総
額ヨリ以上ニ増加セサルヘキコトヲ約束シ且同年期間即チ
三ヶ年間ニ於ケル左記ノ事項 (三点) ヲ前以テ告知スルノ
義務ヲ有ス

第一 艦艇ノ如何ヲ問ハス新ニ製造セントスル処ノ総噸
数

第二 士官並ニ下士卒ノ総数

第三 港湾ノ建築ニ要スル費用即チ砲台、船渠、造船
(兵) 廠ノ類

右海陸按共ニ六月二十三日ノ第一部委員総会ニ於テ露国海
陸軍委員ヨリ提起セラレ委員會議長 (Bernaert) 氏先ツ
本問題ノ由来並ニ其重要ナル所以ヲ述ヘ次テ平和會議議長
露国政府ノ全権「スタール」氏起テ本問題ヲ提起スルノ理
由ヲ述ヘ更ニ語ヲ次テ曰ク今日諸君ニ望ム処ノモノハ決シ
テ其ノ多キヲ求ムルニ非スシテ真ニ刻下急務ノ負担ヲ軽減
スルニ於テ其極少ニ在リトテ怨ムカ如ク訴フルカ如ク暗々
Minimum

平和會議ニ関スル報告

明治三十二年七月四日

海牙府 海軍大佐 阪本俊篤

海軍大臣 山本権兵衛殿

本會議議題中最難題ヲ以テ目セラレ然モ本會議ノ骨髄トシ
テ世界各国瞻望ノ中心タル露国政府回章ノ第一議題ハ海陸
軍各々異様ナル題容ヲ以テ露国海陸軍委員ヨリ提出セラ
ル

陸軍 按

第一、縮盟各国ハ将来五ヶ年間で期シテ各其本国ニ駐在ス
ル処ノ平時兵数ヲ現在ノ兵数以上ニ増加セサルコトヲ約
ス
Metropole

第二、第一項ノ協諾ニシテ成立スルコトヲ得ハ更ニ進ンテ
縮盟各国ハ其ノ平時ニ於ケル兵数ヲ一定スルコトヲ試ム
ル事
Colonial Army

但シ植民地ノ兵数ハ此限ニ非ス

第三、同上五ヶ年間ハ陸軍豫算ヲ現在ノ高ヨリ以上ニ増加
セサル事

以上ハ軍備縮少ノ議論ノ基礎トシテ提起セラル、モノニ
シテ其第一項ト第二項ハ一見同様ノ事ニ屬スル如シト雖

裡ニ今日迄委員會カ其他ノ兵器問題ニ向テ否決ヲ与ヘタル
ノ無情ニ嫌味ヲ述ヘ且其第一議題ノ末文タル更ニ進テ将来
ニ向テ軍備縮少ヲ講スル云々ノ如キハ今日ノ形勢到底行フ
能ハサレハ暫ク現在ノ停止ヲ以テ満足セサル可ラス議按ノ
細微ニ至テハ海陸委員ヨリ説明スル処アルヘシト云フニ
在リ
Halt

瑞西国委員 (Colonel Arnold Kunzli) ノ發議ニテ本問題
ハ重要ナルヲ以テ各委員ノ熟考ノ為メ討議ハ之ヲ他日ニ延
期セラレンコトヲ望ム旨ヲ述フ即チ之ニ決シ来月曜日 (二
十六日) ヲ期シテ散会ス

六月二十六日午前十時 第一部委員総会開会前回ニ統キ
露国回章第一議題ノ討議ニ入ル

議長 (Bernaert) 先ツ露国海陸軍委員ニ發言ヲ与ヘテ前
回ニ統イテ議按ノ説明ヲ為サシム

露国陸軍委員 (Colonel Glinzky) 更ニ前回ニ於ケル議按
ノ説明ヲ補フ其要ニ曰ク其第一項ト第二項トヲ區別セルモ
ノハ他ナシ先ツ第一項ノ原則ニシテ各国ノ容ル、処トナレ
ハ更ニ第二項ニ移ランカ為ナリ又陸軍豫算トハ単ニ經常費
ヲ意味スルノ謂ニシテ一時ニ多額ノ費用ヲ要スル總体兵器
ノ改造ニ要スルカ如キ並ニ一時ニ要塞ヲ改築スルカ如キ

多分ノ費用ヲ要スルモノハ經常外タルヘキモノトナス又植民地ノ定義ニ関シテハ露國ノ如キハ特ニ植民地ノ名義ニ適合スルモノナシト雖トモ本國ノ中心ヲ距ツル遼遠ナル中央亜細亞ノ如キ「シベリ」黒龍江軍管区地方ノ如キハ危機ノ際本國ノ応援ヲ待ツ能ハスシテ今尙兵備ノ薄弱ナル地方ハ植民地ノ名義ノ下ニ在テ本按ノ制限ヲ免ルヘキモノニ屬ス此義ハ一応御断リニ及ヒ置クモノナリトテ手前勝手ナル説明ヲ為シテ坐ニ復ス

議長ハ一坐ヲ見廻シテ他ニ發言ヲ求ムルモノナキヤト暗ニ發言ヲ催促スレト各委員共ニ各自ラ決スル処アレトモ誰トテ發言ヲ求ムルモノナシ爰ニ於テ

議長ハ更ニ委員会ニ向テ本問題ハ直チニ討議ニ入ルヘキヤ或ハ之ヲ海陸軍ノ委員分科会ニ附シテ審査セシムヘキヤ否ヲ諮ル

独国陸軍委員 (Colonel de Gross de Shwarzhoff) ハ起テ直ニ議題總体ノ討議ニ入り然ル後分科会ニ附スヘキヤ否ヲ決スヘント發言シ直ニ之ニ決ス即チ議題總体ノ討議ニ移ル独国陸軍委員 (Schwarzhoff) ハ起テ軍備制限按ヲ其精神ノ根本ヨリ破砕シ去リ按ラシテ顔色ナキニ至ラシメタリ其要ニ曰ク世人動モスレハ軍備過重ノ故ヲ以テ人民ノ疾苦ヲ説クモノ多シト雖トモ我独國ノ如キハ大ニ之ニ異ナリ人民

堂々数千言最モ莊重痛快ノ弁ヲ以テ軍備制限按ノ牙管ヲ其根本ヨリ破壊シ去ラント試ミタリ

彼ノ演説ハ大担ニシテ善ク他人ノ敢テセサル処ノモノヲ敢テセリ爾來独国委員ノ有名ナル反对演説トシテ世間毀譽ノ間ニ噴々タルモノニシテ氏ノ演説ノ如キハ必ス將來ニ涉リテ独國ノ外政並ニ内政ニ向テ影響ヲ見ルヘキ重要ノモノタルニ至ラン

和蘭國全權 (Karnabeek) ハ問題ノ複雑ニシテ容易ニ之ヲ解説スルノ難キ点ニ於テハ独國委員ノ意ヲ諒スト雖モ軍備ノ過重ヲ以テ其理由トハ為サ、ルノ点ニ於テハ異議ナキ能ハストシテ之ヲ駁ス「ブルガリア」國全權 (Sancioff) ハ起テ露按ヲ贊スルノ意ヲ述ヘ且曰該國ノ如キ弱少國ニ取リテハ若シ軍備ノ負担ヲ免ル、事ヲ得テ之ヲ以テ人民ノ資産ヲ増進スルノ資ニ転向スルコトヲ得ハ人民ノ其慶ニ依ルモノ果シク幾何クトテ絶對ニ露按ニ向テ感謝的ノ贊成演説ヲ為セリ可隣弱小ノ「ブルガリア」國曩キニハ土國ノ無礼ヲ忍ンテ (報告第一号参照) 尙且議席ノ末班ニ連ナルコトヲ得タルモノ今又獨立國ノ体面ヲ以テ議席ノ一隅ヨリ一國政府ヲ代表シテ贊成演説ヲナシ一面平和會議ノ議事録ニ一國代表官ノ發言トシテ長ヘニ其證左ヲ留メ一面露國政府ノ友國トシテ同情ヲ發表セルモノハ將來一國ノ政略上必ス反響ス

ノ資産ハ却テ之カ為メニ日ニ富ミ月ニ栄ヘ徵兵義務ノ如キハ人民喜ンテ愛國ノ義務トシテ之ニ赴キ決シテ負担ノ累ヲ為サス (以上ハ前回ニ於テ和蘭國陸軍委員 (General Portugael) カ露按ヲ頗リニ賞揚セルモノニ向テ嘲笑的ノ駁撃ヲ与フルモノナリ) 更ニ進シテ露按ノ駁撃ニ入り曰露按ハ其制限トシテ単ニ兵數ノ上ニ於テノミ之ヲ称スレトモ軍隊ノ問題ハ豈ニ兵數ノ事ノミナランヤ教育諸般ノ問題皆其干係ヲラサルハ莫ケン且植民地ナルモノニ向テノ定義ノ如キハ一概ニ之ヲ称スル能ハス植民地ト称スルモノ、内ニハ本國ニ近接スルモノ抄ナシトナサス一朝兵端ノ開クルアラハ此種ノ植民地兵ハ直ニ其ノ本國ノ戰爭ニ干与スルニ至ルヘシ (是暗ニ仏國ヲシテ亞非利加領地ニ在ルモノヲシテ植民兵ト名ツケテ勝手ニ其兵ヲ増シタル場合ニハ獨ノ不利タル論ヲ俟タサルヲ意味ス) 是各國カスノ如キ不均一ナル問題ニ協諾ヲ与フルハ到底望ムヘクモ非ス獨國ノ兵數ハ政府ト議會ノ協贊ニ成ルモノニシテ五ヶ年ヲ一期トシテ協贊ヲ与フルモノナリ露國委員ハ之ヲ目シテ我政府ノ彼ノ案ニ贊同シ易キ理由ト見做サル、如シト雖モ是内國法ト萬國法ヲ混視セラレタルノ説ニシテ如何セン彼ノ萬國法ノ期限ハ我内國法ノ期限ト合致セス是彼ノ按ニ贊同スル能ハサル所以ノ其一クリト

ル処アルヘク此演説ハ尋常一様ノ發言ニ非スシテ永ク「バルカン」半島ニ「ブルガリア」國ノ前途ニ向テ一種ノ意義ヲ為サシムルモノタラサルヲ知ランヤ

(審査委員会附托)

是ニテ議題一般ノ討論ヲ終ヘ他ニ發言ヲ求ムル者ナキヲ以テ議長ハ議場ニ向テ直チニ議題ノ細目ニ移リテ討議スヘキヤ或ハ之ヲ通常ノ海陸軍分科会ニ委托スヘキヤ或ハ特別ニ審査委員ニ附托シテ審査セシムヘキヤ否ヲ諮ル露國委員 (Rafalovich) ハ之ヲ通常ノ海陸軍分科会ニ附托センコトヲ主張ス英國ノ全權「パンスホート」 (Pancforte) 氏ハ之ヲ強大國ノ委員ヲ以テ特別ニ組織セル審査ノ委員ニ附托センコトヲ以テス仏國全權「ブルヂョアー」 (Bourgeois) ハ之ニ異議ヲ挾ンテ曰特別審査委員ニ附托スルニ於テ不可ナルヲ見スト雖モ特ニ小國ヲ之ニ参与セシメサルハ同意スル処ニ非スト

議長ハ先ツ之ヲ委員ニ附托シテ審査セシムヘキヤ否ヤヲ區別点呼ニ依テ票決セシム

審査ニ附記スルヲ可トスル者

日、米、白耳義、西、仏、英、伊、和、波、葡、露、ロ
 ーマニア、セルビア、暹、瑞典、土、ブルガリア、

之ヲ不可トスルモノ

独、埃

中立棄権スルモノ

噠、希、瑞西、

即チ委員ノ附托ニ決ス

露国委員ハ各海陸分科会ニ於テ各自ニ審査ヲ附托スヘキ委員ヲ撰定スヘキヲ建議シ即チ之ニ決ス

爰ニ於テ此迄ノ通り海陸各分科ニ別レ分科会ヲ始ム

陸軍第一分科会ニ於テハ左ノ特別委員ニ審査ヲ附托ス

英 General Ardagh 仏 General Mounier 露 Colonel

Gilinsky 独 Colonel Schwarzhoff 澳 Colonel Khnebach

伊 General Zuccari 瑞典 Colonel Brandstrom 米 Ca-

ptain Crozier ローマニア Colonel Coanda 海軍第二部

分科会ニ於テハ仏国委員ノ發議ニテ陸軍分科ニ比シテ人数モ

少数ナレハ特ニ審査ヲ附托スヘキ委員ヲ設クルコトナク此

儘委員全部ニテ問題ヲ審査シテハ如何ト各委員異議ナク之

ニ決ス

(海軍案討議)

議長ハ露国海軍委員ヲシテ提案ノ趣旨ヲ説明セシメ次テ各委員ノ質問並ニ意見ノ發表ニ移ル

ト
ハ最モ困難ナル位置ニ在ルコトヲ諒セラレンコトヲ望ム

明カニ自国ノ位置ヨリ問題ニ解釈ヲ下シ其賛同ヲ表スル

ノ困難ヲ明言セルモノハ独国委員ノミナリキ彼ノ独国陸

軍委員カ絶体的反対ヲ試ミタルト其論旨ニ於テハ元ヨリ

同シカラスト雖モ其自国ノ位置ヨリ解釈ヲ下シテ当初ヨ

リ明ニ賛同ヲ否ミタルニ至テハ独国カ如何ニ軍備制限ニ

対シ各邦ニ超越シテ明晰ナル態度ヲ取リシヲ想フヘシ

(3) 提按ノ趣旨ニ依レハ各国ハ自己ノ海軍予算ヲ定ムルニ

於テ全然自由ヲ有ス可キハ之ヲ聞クヲ得タリ然レトモ其

高ヲ定ムルニ方テ他ノ国ノ予算高ヲ顧ミスシテ之ヲ決定

シ得ヘキヤ是レ何国ト雖モ他ノ数字ヲ見スシテ之ヲ定ム

ルコトヲ敢テセサルヘシ其結果遂ニ如何必スヤ列国間ニ

数字増加ノ競争トナリテ或ハ今日ヨリモ更ニ各国予算ノ

増加ヲ誘引スルノ源因ヲ為ス莫ランカ果シテ然ラハ是レ

角ヲ撓メテ殺スモノナリト

此論ハ一般委員ノ首肯スル処トナレリ

右ノ如ク各委員共ニ自己ノ賛否説ハ暫ク之ヲ明言スルコト

ヲ避ケテ単ニ議按ノ弱点ニ向テ一般ノ批評ヲ試ミ明示乃至

黙示ノ間ニ其協同ノ難ヲ以テス

各委員共ニ可成自己ノ意見ヲ發表スルヲ避ケテ其發言ハ概

ネ提按ニ対スル質疑並ニ全般ニ渉ル処ノ批評ヲ試ムルニ過

キスシテ誰人トモ明晰ナル賛成若クハ反対ヲ試ムルモノナ

シ然レトモ一種決然タル意向ハ多数委員ノ眉宇言端ニ見え

又掩フ可カラサルモノアリ其批評質問ノ重要ナルモノ左ノ

如シ

(1) 提按ニ向テ最困難トスル処ハ萬国法ト内国法ト相容レ

サルノ点ニアリ我等議會ヲ有スル国ニ在テハ内国法上予算

ノ問題ニ至テハ又如何トモスル能ハサルモノ之有ラン右

ハ英国委員先ツ之ヲ發言シ仏委員之ニ和シ議會ヲ有スル

国ノ委員ハ皆之ニ明示若クハ黙示ノ同情ヲ表ス

是レ提按ニ対スル最モ故障ヲ為スモノタリ

(2) 独国ノ委員ハ曰弊国ノ海軍ハ諸君モ御承知ノ通り已ニ

七ヶ年期ノ予算確定施行中ニ在レハ露国委員ノ如キハ或

ハ弊国ノ如キハ最モ露国按ニ賛成シ易キヤニ察セラルヘ

シト雖モ事ノ真相ハ却テ然ラス如何トナレハ既ニ内国法

ニ由テ法律ヲ布キタルモノ今又夕之ヲ萬国法ト合致セシ

メントスル如キハ最モ為シ能ハサルノコトニ屬スルヲ以

テ弊国ノ如キハ斯ノ如キ事情アルヲ以テ露按ニ協同スル

爰ニ於テ議長ハ本問題ハ真ニ各国政府ニ於テ慎重ナル考料

ニ待ツニ非レハ輕々決シ能フヘキ問題ニ非レハ宜シク砲煩

ノ問題ノ如ク之ヲ他日ノ會議ニ此儘延期シテハ如何トテ即

チ之ヲ国別点呼ニ依テ票決ニ附ス

延期ヲ可トスルモノ 五

延期ヲ否トスルモノ 五

中立棄権スルモノ 五

我邦ハ延期ヲ可トスル者ノ一人ナリ

次テ露国委員ノ主張スル処即チ延期スルコトヲ為サス本期

ノ會議ニ於テ議定セントスル事ヲ国別点呼ノ票決ニ附ス

可トスルモノ 七

否トスルモノ 一

中立棄権スルモノ 七

我邦ハ中立棄権ノ一人ナリ

斯テ露委員ノ主張セル本期ノ會議ニ於テ議定セントスルモ

ノ委員多数ノ希望トシテ認定セラレ

爰ニ於テ議長ハ四名ノ報告委員ヲ指名シ報告委員ヨリ委員

会ノ意見ヲ纏メ之ヲ委員總會ニ報告スルコト、ナシ散会

ス

報告委員

馳馬国全権 Bille 暹羅委員 Corraeoni dorelli 露国海軍委員 Schiene 埃国海軍委員 Soltyk

軍備制限按ニ対スル委員總會ノ決議

軍備制限按ニ対スル西委員会ニ於ケル各国委員ノ態度ニ察シテ委員總會ニ於ケル結果モ亦炳乎トシテ火ヲ階ルヨリ明カナリシニ依リ英国新聞「タイムズ」ノ如キハ奇警ナル句調ヲ以テ豫メ結果ヲ報シテ日露ノ軍備制限按ハ委員會ニ於テ自然ノ運命ノ結果トシテ死ヲ遂ケタリ依テ明日ハ「深林宮」ノ會議場委員總會ニ於テハ莊嚴ナル葬式ヲ以テ彼ノ有名ナル軍備制限按ヲ葬リ去ルニ至ルヘント果然六月三十日午前十時軍備制限按ニ対シテ第一部委員總會ハ開始セララル議長 (Beernaert) ハ先ツ陸軍部審査委員ノ決定意見書ノ報告ヲ披露セシム

「ムラビエウ」伯回章第一議題ニ係ル露国委員「ゲリンスキー」大佐ノ提按ノ審査委員ハ兩回ノ会同ヲ遂ケタリ

「ゲリンスキー」大佐ヲ除クノ外審査委員ハ全会一致ヲ以テ左ノ如ク認定ス

第一、縱令五ヶ年間ト雖モ同時ニ他ノ国防要件ヲ regulate 制定スルコトナクシテ単ニ兵數ヲ制限セントスルハ最

モ困難ノ事タルベシ

第二、各邦異同ノ所見ニ基キ編制セル処ノ国防要件ヲシテ

固持セシメテ息ム

爰ニ於テ瑞典ノ全権「ビルト」(Baron de Bildt)ハ起テ莊重ノ弁ヲ以テ先ツ議長ノ意見ヲ贊成シ次テ露国ノ提議ニ贊成ヲ表スル能ハサル所以ヲ悲ムノ辞ヲ述テ曰ク今回露帝ノ宏願ニ基ク軍備負担ノ軽減ノ大旨ニ至テハ元ヨリ感銘禁スル能ハサルモノタルハ誰人ト雖モ異論アルコトナケン然レトモ独リ露政府ノ提起セル按ノ如キハ如何セン複雑ナル解釈ニ入ラサル可カラザル故ヲ以テ實際ニ之ニ協諾ヲ与ヘ得サルハ真ニ遺憾ノ極ト云ハサル可ラス然レトモ前途ハ尙遠シ吾人ハ宜シク将来ニ向テ露帝ノ志ヲ成スコトヲ晨メサル可ケンヤ

一句ハ一句ヨリモ巧妙ニ外交的演説トシテハ今日此場合ニ於テ最モ態度ヲ得タルモノトシテ賞揚セララル

聞処ニ依レハ瑞典国ハ審査委員會ニ於テハ最モ強硬ナル態度ヲ取りタリト而シテ今ハ公會ニ於テ巧ニ言訳の演説ヲ弄ス真ニ演劇的タルヲ免レス

次テ噀国ノ全権 (Bille)モ露国ト皇室上ノ關係一言ナカルヘカラスト思惟セシカ亦起テ瑞典国全権ノ趣旨ニ贊同ヲ表ス

此時此場合其役目ニ相応セル仏国ノ全権「ブルジョワー」(Bourgeois) 円転滑脱ナル快弁ヲ以テ瑞典全権ノ趣旨ヲ敷

國際條約ニ依テ之ヲ制定セントスルハ是亦困難ノ事タルヲ免レス

右ノ次第ナルヲ以テ審査委員ハ露国政府ノ名ヲ以テ提起セラレタル按ヲ容認シ能ハサルコトヲ遺憾トス 委員ノ多數ハ尙各国ニ於テ各自ニ本問題ヲ鄭重ニ審査セラルヘノ要アルコトヲ認ム

是各国委員カ露国提按ニ対シテ与ヘタル鉄按ニシテ即チ露按成仏引導ノ喝タリ議長ハ其大勢ヲ見テ取り議場ニ向テ曰ク審査委員會ノ報告ハ斯ノ如ク露国委員ヲ除クノ外全会一致ヲ以テ露ノ提議ヲ否決セリ而シテ今又議場ニ於テ此審査報告ニ対シテ抗議スル処ナキニ視テ多數委員ノ意向ヘ既ニ明瞭(否決)ナレハ更ニ票決ヲ問フノ要アルヲ見ス即チ本委員總會ハ審査委員ノ報告ヲ是認セルモノト見做シテ然ルベシト思考ストシテ特ニ票決ニ附シテ大多數ヲ以テ明々地ニ露按ヲ否決セシムルコトヲ避ケタルハ一ハ露国ノ面目ニ顧ミ一ハ各国委員ヲシテ露国ニ対シテ愛嬌ヲ持クシメタルハ頗ル議長ノ技倆トシテ巧妙ナリ而シテ更ニ露国委員ノ意見ヲ問フ露国委員 (Colonel Giinsky) ハ大勢既ニ定マリ又如何トモスル能ハサルヲ見テ起テ各邦委員諸君ノ御意見ニシテ斯ノ如クナランニハ又何ヲカ言ハントテ強テ提按ヲ

衍シ終リニ左ノ決議按ヲ為サンコトヲ諮ル

委員會ハ現今世界到ル処国民ノ負担ニ重ヲ感セシムル処ノ軍備費ハ国民ノ有形無形上ノ幸福ヲ増進スルカ為メニ大ニ之ヲ制限スルコトヲ可トスル事ヲ認ム

今日此場合ニ於ケル決議按トシテハ最モ巧妙滑脱ノ体ヲ得タルモノニシテ流石ニ軍備ヲ以テ国民ノ負担タラサルコトヲ明言セル独国委員ト雖モ之ニ一言ヲ挿ムコトナカリシ是一面露帝ニ向テ友国ノ態度ヲ示シ一面独国ニ向テ暗ニ宣言ニ打撃ヲ加ヘタルニ齊ント云ハサル可ラス

仏国全権ノ決議按ハ異議ナク全会一致ヲ以テ容認スル処トナレリ

(海軍按ニ対スル決議)

次テ海軍委員分科会ノ報告ニ移ル第二分科会ハ六月二十六日ヲ以テ委員總會ヨリ引キ統キ開会シ露国海軍委員「シエイン」氏ノ提出ニ係ル按ノ審議ニ從事セリ即チ同氏ハ六月二十三日第一部委員會ノ議事録ニ附録セル(G)号ナル露国委員ノ提按ニ向テ其趣旨並ニ範圍ニ関シテ更ニ詳細ナル説明ヲ与フル処アリ「シエイン」中佐ハ先ツ按ニ所謂豫算ナルモノハ經常費臨時費ノ兩種ヲ包括セルコトヲ明ニシ且各国豫算ノ高ヲ定ムルハ全然其自由タルヘク而シテ各国政府ハ

其三ヶ年間ハ其総額ノ高ヨリ以上ニ増加セサルコトヲ約束ルニ在リトノ重要ナル説明ヲ与ヘタリ露国ハ先ツ差当リ第一ニ已レハ現在ノ海軍豫算ニ其百分ノ十ヲ増シタルモノヲ以テスルノ例ヲ示スヘシ而シテ他ノ政府ニ在テハ其約束スヘキ豫算ノ基礎トシテハ他ノ政府ノ択ヒタル処ノ最大増加ノ程度迄ニ之ヲ増加シ得ルハ其撰択ノ随意タルヘキ処トナス

海軍部委員会ニ於ケル意見ノ交換ハ概ネ左ノ要領ニ約スルコトヲ得ヘシ

第一、或委員ノ如キハ多少露ノ提議ハ原則トシテ容認シ得ルヤノ望ナキニシモ非スト雖モ本国政府ノ訓令ヲ待ツニ非レハ決答ヲ為ス能ハスト云ヘリ

第二、多数ノ委員ハ之ニ異ナリテ先ツ第一ニ国法上ノ困難ニ遭遇スヘキヲ説キ議會ヲ有スル国ニ在テハ議會ノ協賛ヲ經サルニ先チテ前以テ約束ヲ行フコトノ難キニ在リトス

斯テ議論ノ久シキニ涉リテ遂ニ協同ニ達スルノ方法ヲ見出ス能ハスシテ議長 (Karnabeck) ハ各委員ヨリシテ各自ノ政府ニ向テ露国提議ハ將來ノ會議ノ決議ニ讓ランコトヲ建言スルコトニセハ如何ト發議セリ然ルニ投票ノ結果ハ議長

何ト諮リタルニ満場異議ナク露ノ海軍委員モ亦強テ抗弁スル所ナク即チ

仏国全權ノ決議按ハ海陸軍備共ニ之ヲ適用セラルヘキコトヲ決議シ議長ノ發議ニ依リ和蘭国全權 (Karnabeck) ヲ本會議ノ第一部委員会ノ報告委員タルヘキコトヲ指定シテ散會ヲ告ケリ斯テ露国提議ノ精神タリ骨髓タル軍備制限按ハ半日ノ儀式的會議ヲ以テ名譽的ノ否決ニ終了セリ

此日討議中「セルビヤ」ノ全權 (Migatovich) ハ露国ノ提議ニ絶対的賛成演説ヲ為シ且ツ曰ク小国ノ故ヲ以テ今日迄發言ヲ控ヘ居タリシカ前回ニ於テ隣邦「ブルガリア」国全權ノ發言アリシヲ以テ茲ニ弊国ト雖トモ露国ノ按ヲ賛成スルニ於テハ決シテ彼国ノ後ニ落チサルヘキヲ以テ敢テ此意ヲ諒セラレンコトヲ望ムト外交政略的ノ演説ヲ為セリ可憐「バルカン」半島上ノ弱小国其齊楚ノ間ニ在ルノ故ヲ以テ斯ル瑣末ノ事ニ至ル迄強國ノ機嫌ヲ伺ヒ敢テ此言ニ出テサル可ラストセハ彼弱小国ノ志ヤ真ニ憐ムヘシ (此言一面ハ「ブルガリヤ」国ノ宣言ニ當テ附ケタルモノト知ルヘシ)

又希臘國ノ全權 (Dalyanis) 希土戰爭ノ余孽ヲ受ケタル彼ノ国ニ在テハ特更ニ軍備ヲ回復セサル可ラサル特別ノ国

ノ發議ニ認可ヲ与ヘスシテ (可トスルモノ五、否トスルモノ五、中立棄権スルモノ五)

露国委員「シエイン」中佐ノ發議ニ係ル即チ各委員ハ可成速ニ本国政府ノ訓令ヲ受ケテ露国ノ提議ニ係ル案ニ向テ議決ヲ与ヘントスル件ハ其票決ノ結果可トスルモノ七、否トスルモノ一、中立棄権セルモノ七即チ「シエイン」中佐ノ動議ハ可決セルモノト見認ラレタリ爰ニ於テ分科委員会ハ委員中ノ四名ニ第一部委員会ニ於ケル決議ノ結果ヲ報告スル為メニ起草委員タルコトヲ依托セリ即チ起草委員ハ今左ノ断按ヲ為スノ榮譽ヲ荷フモノナリ即チ委員会ニ於ケル多数委員ノ意見ハ敢テ露国政府ノ提議ヲ容認スルト言ハサルモ亦敢テ海軍ノ豫算ヲ増加セサルノ方法ヲ見出スニ於テ未タ全ク其望ナシト云フコトヲ得ス故ニ此上ハ「シエイン」中佐ノ提出ノ按ハ第一部委員会ノ票決ヲ待テ其取捨ノ運命ヲ決スヘキモノト思考ス

海軍ニ係ル報告ハ陸軍ノモノニ比シテ露按ヲ排斥スルノ点ニ於テハ決然タルモノ尠ナシト雖トモ委員会ノ大勢既ニ定マリ又如何トモスル能ハサルヲ見テ取りタル議長ハ自己ノ意見トシテ海軍按モ陸軍按ト同様ノ位置ニ之ヲ見做スハ如

情ニ在ルヲ以テ軍備制限ノ上ニ於テ他ノ諒察ヲ請フ旨ヲ以テス彼ハ前ノ希國ノ首相ニシテ希土戰爭ノ結果ノ責ニ任スヘキモノニシテ敢テ此言ヲ為セルナラン彼ノ衷情亦察スヘキモノアリ

(軍備制限按ノ議決ニ係ル概評)

露国政府回章第一議題ハ本會議ノ精神ニシテ又各國ノ協同ヲ見ルニ於テ其難題中ノ難題タルハ誰人ト雖トモ異論無カルヘキハ勿論ナリシカ今回露国政府カ右第一議題ニ對シテ提議セル処ノ海陸軍備制限按換言スレハ豫算制限按ノ斯ク迄ニ反対ノ氣焰ヲ多ク而モ一雄國ノ起テ之ニ同情ヲ表スルコトナク為ニ見苦敷失敗ニ終了セルモノ応サニ吾人ノ慎重ナル討究ヲ待ツヘキモノナルヘシ蓋シ露政府カ其設題ノ趣旨ノ撰択ニ於テ慎重ナル考究ヲ誤マリタルモノ其失敗ノ一原因タル莫カラシヤ如何トナレハ斯ル各國ノ協同一致ニ待ツニ非レハ効果ヲ見ルコト能ハサルハ論ナキノ議題タルニ係ハラズ彼ハ其他ノ國ノ思惑ニ顧ミル処ナク其自國ニ益アリ若クハ其二雄國ノ利益ニ衝突ナキノ点ノミヲ見テ其他ヲ料ラス之ヲ以テ漫然萬國ノ會議ニ附シテ各國ノ協同ヲ望マントスルカ如キハ全ク思慮ナキ無知無識ノ徒ノ所為ニ非レハ則チ問題協諾ノ成否ヲ度外視シタル不真面ノ舉動ニ

出テタルモノニシテ二者ノ一ニ居ラサル可ラサルヲ疑ハシム

(植民地兵力問題)

彼ノ陸軍ヲ備制限按ノ如キハ真ニ人ヲシテ此疑問ヲ為サシムルニ値スルモノニシテ独員委員ノ激烈ナル反駁ヲ待タスシテ問題自身既ニ崩解スヘキ不健全ナル題容ヲ以テ顯ハル、モノナリ

彼ノ現在ノ兵力ヲ以テ停マルヘシトハ尙可ナリ又現在ノ豫算以上ニ増加セサルヘシト云フ或ハ其意ヲ諒ス然レトモ其植民地ノ兵數ハ此限ニ非スト云フニ至テハ其無稽ノ最モ甚シキニ驚カサルヲ得ス

彼ハ果シテ此事ノ各国ノ利害ノ衝突ノ因タルコトヲ料ラサリシカ彼ハ斯ノ如クシテ英國ノ植民地兵力問題ト相容ル、コトヲ得ヘシト思考シタルナランカ又今ヤ新ニ植民地兵力ノ編制ノ計画アラントスル処ノ仏國ノ利益ト矛盾スル所ナシト思考セシナランカ其他米國ニ伊國ニ皆此問題ト相容レ敢テ異議ナカルベシト思考セルハ可ナリ然レトモ獨國ノ歐洲附近ニ植民地ヲ有スルコトナクシテ(駐兵セシムル程ノ)而モ仏國ヲシテ亜非利加ニ植民地兵力ノ自由ヲ許容シ一朝緩急アラハ一葦帶水ヲ隔ツルノ彼岸ヨリ互ニ相救フコト

謂フモノニシテ細カニ之ヲ解剖シテ各国ノ真情ヲ穿索セハ各国濃淡厚薄各解釈ヲ異ニシ或國ニ在テハ之ヲ以テ國民生存ノ死活問題ト為シ或國ニ在テハ痛痒相関セサルノ冷淡問題ヲ以テ之ヲ視ルモノアラン蓋シ歐洲ニ於ケル弱小國ハ概ネ前者ノ解釈ヲ執ルカ如ク而シテ英米ノ如キハ却テ後者ニ屬ス(植民地兵力問題ヲ外ニシテハ兩國ノ如キハ本問題外ノ地位ニアレハナリ)仏國ノ如キハ其財政ノ論ヲ別ニシテ其本國ニ於テハ人口上現在以上ノ壯丁ヲ得ルハ頗ル困難ニ屬セルヲ以テ其植民地兵力ノ自由ニ抵触スル処ナキ限リハ彼ニ於テハ頗ル冷淡ノ問題ナラン獨リ獨國ニ至テハ之ニ異ナリ抑モ武備ナルモノハ祖宗立國ノ精神タリ歐洲中原ニ覇タル所以タリ彼以テラ一度露國按ニ向テ讓歩スル処アランカ覇氣墜々タル獨帝ハ全露國皇帝ノ前ニ跪クニ齊シク且露帝ヲシテ全世界ヲ蓋フ処ノ平和會議ノ盟主ノ榮譽ヲ恣ニセシムルニ同シ是レ雄心勃勃々タル獨國皇帝ノ最モ忍フ能ハサル処ニシテ曩ニハ尙武論ヲ以テ名聲全歐洲ニ喧シキ「ステンケル」博士ヲ全權副使トシテ會議ニ列席セシメ為メニ歐洲ノ物議ヲ讓シ今又軍備制限問題ニ向テハ「シワールホフ」大佐ニシテ一蹴シテ露按ヲ蹂躪セシメテ顧ミサルモノ故ナシト為サス

ヲ得セシムルコトヲ肯ニスルヤ否ニ想ヒ到ラサリシヤ否ヤ又我邦ノ如キ自ラ本國ノ増兵ニ関シテ其拘束ヲ甘諾シツ、彼ノ對岸滿洲ノ野ニ露國ノ植民地兵力ノ跳梁ノ自由ヲ容認スヘシト誤認セシヤ否ヤ苟クモ陸軍ノ事ニ関シテ歐洲大陸ニ在テハ獨國ノ意向ヲ外ニシテ又事ヲ謀ルコト能ハス又歐洲以外ニ於テハ先ツ我國ノ利害如何ニ着目セサル可ラサルハ論ナキコトニ屬ス然ルニ提議者ハ此ノ初步的ノ考料ヲ蕘視シテ而シテ敢テ各国ノ協同ヲ得ントスルニ擬スルモノハ殆ント木ニ縁テ魚ヲ覓ムルニ齊シキモノナリ

(内政問題)

然レトモ彼ハ其說明中ニモ在ルカ如ク必スシモ提議通りノ事ヲ固持シテ相下ラサルノ意ニハ非ラサリシナルヘシ必スヤ各國討議ノ末修正互ニ讓リ以テ一ノ協同地ニ到着スヘシト思惟セシナルヘシ然レトモ多數委員ノ真意ハ之ニ異リテ其提議ニ賛否スルノ理由ハ之ヲ別ニシテ單純ニ斯ル軍備制限按ト云ハルカ如キ將來ノ自由行動ニ拘束ヲ受クルカ如キハ其好マサル処ナリト云フモノ蓋シ其重ナル原因ニシテ其議題露ノ無稽ナルカ為メニ大ニ其反對ノ氣焰ヲ高メタルモノハ會々其原因ノ副タルニ過キサルヘシ而シテ其多數政府力軍備制限ヲ好マスト謂ヘルモノハ只其概念ニ就テ之ヲ

(獨逸伊ノ態度)

蓋シ歐洲各国到ル所此平和會議問題ト共ニ一層汽焰ヲ熾ナラシムルニ至ルヘキハ彼ノ社会党問題ナルヘキヲ以テ獨國ノ如キ一步ニテモ此武備問題ニ向テ弱点ヲ示サハ國內到ル処社会党ノ跳梁挑発スルヲ虞ル、モノナリ是レ獨國ノ軍備制限ニ反対スルハ外ニ對シテ國威ヲ揚クル所以内ニ向テ治國ヲ為ス所以獨帝ヲシテ露帝ノ前ニ威嚴ヲ失墜セシメサル所以タリ曩キニ五月十八日平和會議開會ノ夕露帝ノ誕辰ヲ祝スルカ為メ「ワイスパテン」ニ於テ獨逸皇帝ハ杯ヲ舉テ露帝ヲ壽シ平和會議ノ成効ニ向テ同情ヲ寄スルノ演說アルヤ此時迄ハ沈睡ニ在リシ平和會議ハ遽カニ活氣ヲ帯ヒ来リテ前途尤モ多望ナリト稱セラル、ニ至レリ曩ニハ之ヲ贊シ今ハ直チニ之ヲ打破ス獨帝ノ擒縱活殺ハ真ニ測ラレサルモノナリ

獨國ハ軍備制限問題ニ向テ獨國ト同一ノ態度ヲ以テ最モ露按ノ敵対タリ即チ委員總會ニ於テ他ノ全委員ニ反対シテ(獨)ト共ニ問題ヲ委員分科會ニ附托セシテ直ニ討議ニ附スヘシトテ議按ヲ即席否決所謂門前払ニセンコトヲ欲セルモノニシテ(伊)國ノ如キ内心議按ニ反対ナリシト雖モ其表面ハ(獨)(獨)ノ如ク著シカラサリシハ蓋シ其内治

ノ政策ニ顧ミテ軍備制限ニ明々地ノ反対ヲ表白スル能ハサ
リシ事情ノ存セルナルベシ

要スルニ陸軍々備制限按ハ三国同盟ヲ以テ二国同盟ニ当リ
内一方ニハ(伊)國ト一方ニ仏國ノ旗幟ノ稍鮮明ナラザリ
シ觀アラシメタリト云フコトヲ得ヘシ

(軍備制限案否決ノ理由)

即チ軍備制限案ニ反対セル理由ハ左ノ如ク約言スルコトヲ
得ヘシ

其一、各国々情ニヨリテ其理由ヲ異ニスヘシト雖モ其制限
按ノ為メニ自由ノ行動ヲ拘束セラル、コトヲ厭フノ故ヲ
以テ按ノ成立センコトヲ欲セサルカ為メナリ

其二、設題ノ趣旨露骨無稽ニシテ各国ヲシテ協同ノ地ヲ覓
ムルニ於テ困難ナル性質ニ屬セルカ為メナリ

其三、齊シク軍備ノ負担ヲ軽減スルコトヲ目的トナシナカ
ラ海陸其方法ヲ異ニスルノ点ニ於テ其提議ノ総テ利己主
義ニ依テ解釈セラレタルノ形跡ノ察セラルヘキモノアル
ニ依ル

(海軍案批評)

次ニ海軍ニ関スルノ按ヲ見ルニ其協同ノ地ヲ求ムルニ容易
ナラシムルノ点ニ於テハ陸軍按ノ比ニ非スト雖モ然レトモ
其之ヲ求ムルニ汲々タルノ結果遂ニ提按ヲシテ軍備制限ノ

竊ニ語テ曰ク貴國ノ計画ハ今ヨリ尙三年ノ後ニ繼續シ獨國
ハ今尙七カ年計画ノ期ニ在リ弊國モ亦此ニ類ス此等孰レノ
國モ斯ル制限按ノ出レハトテ別ニ迷惑ヲ感スル処ナカルヘ
シトテ暗ニ我邦モ斯ル按ニハ御不同意アルマシトノ意ヲ洩
シタリ小官ハ此時之ニ答テ曰ク弊國政府ハ原則トシテ斯
ル制限按ニ賛成スヘキヤ否ハ今予ノ知ル処ニ非レハソハ別
論トシテ貴按ノ如キハ三カ年間ノ豫算ヲ定メテ其数字ヲ
會議ニ知ラシムヘシト云フカ如キハ到底人力ノ善ク為シ能
フ処ニ非ルヘシ試ミニ思料セラレヨ一國政府ノ一カ年ノ豫
算ヲ調査スルニサヘ半カ年余ヲ費シテ始メテ成ルニ非サヤ
況ンヤ三カ年ニ渉ル豫算ヲヤ之ヲ此ノ短時日ノ平和會議期
中ニ調査シテ報導スヘシト云フカ如キハ思ヒ寄ラサルコト
ナラスヤト露委員ハ之ニ對ヘテ否トヨ当會議ニテハ只其
原則トシテ斯ル方法ニ依ルコトヲ各国政府ニ於テ協諾スル
ヤ否ノコトヲ議決スルノミニテ其豫算ノ報導ノ如キハ別ニ
外交文書ヲ以テ交換スルノ方ニ依ル積ナリ云々此間答ハ後
ニ至リテ委員会ノ議事ト照應ヲ要スル節アレハ茲ニ掲記
ス

又本按ヲ見ルモノヲシテ陸軍按ノ秋霜烈日ノ如キ制限按タ
ルニ反シテ天空闊影ノ捉フヘキモノヲナキ如ク其制限タ

趣旨ニ於テ其意思ノ存スル処ヲ捕捉スル能ハス換言スレハ
軍備制限ノ趣旨ニ於テハ全ク意味モナク三文ノ価値モナキ
愚按タルニ外ナラス是レ真ニ軍備制限ヲ賛成スル國ニ取
リテハ其効力ナキノ故ヲ以テ賛同ヲ表セサルヘク又軍備制
限ニ反対ナル國ニ取りテハ國法上ノ問題ヲ籍リテ直ニ門前
払ヲナスノ好個ノ口実ヲ容スニ易々タルヘキモノトス是レ
本按ノ軍備制限ニ賛成者タルト反対者タルトニ論ナク一唾
棄ニ排斥シ去ラレタル所以トナス

且提議者ハ按ヲ設クルニ方テ各国ノ國法上ノ解決ニ思フ致
サス直ニ豫算問題ニ立入りシハ其思ハサルノ最モ甚シキモ
ノニシテ其問題ニ賛成ナルト反対者ナルトニ論セス苟クモ
議會ヲ有スル國ニ在テハ直ニ議會ト云ヘル門障ニ衝突シテ
遂ニ之ヲ踰越スヘカラサルハ識者ヲ待タスシテ明瞭ノ事ニ
屬ス然レモ此初等的ノ思料ニ欠如タルノ結果其ノ賛成ト
反対トニ論ナク問題ハ齊シク議會ノ門前払ト為リ了セリ
露國海軍委員ハ真実ニ斯クノ如クシテ各国協同シ能フ可シ
ト思考セシナラン如何トナレハ本問題ノ會議ニ提出セラレ
サル遙以前ニ於テ一日露國委員ハ小官ニ向ヒ海軍ニ向テハ
斯々ノ按ヲ提出スルノ考ヘナリト其當時聞ク処ノモノト今
回提出ノモノト少シモ相違アルコトナシ此時彼ハ微笑シテ

ルノ趣旨ノ何辺ニ在ルコトヲ知ル能ハサル感アラシムルナ
ラン是レ他ナシ一方ニ彼ニ於テ制限スル処アルモ可ナレト
モ他方ニ在テハ彼今ヤ擴張中ニアルヲ以テ其制限ヲ厭フカ
為メニ殊更ニ此海陸制限按ニ於テ其制限ノ趣旨ニ異同ヲ設
ケシメタル所以ニシテ人ヲシテ坐ロニ其肺肝ヲ視ルカ如キ
想アラシムルモノ其失敗ノ原因ノ一タラスンハアラス
故ニ海軍按ニ於テハ制限上ノ意味ハ尤モ稀薄ナルヲ以テ各
國政府ニ於テモ制限上ノ解釈ニ於テハ陸軍按ノ如キ利害ノ
問題ヲ喚起セルモノニ非レハ此点ニ於テ反対ヲ招ケルモノ
ハ甚タ稀少ナリシナルヘシ然レトモ一雄國ノ起テ露按ノ精
神ヲ弁護センカ為メニ其解題ノ地ヲ見出スニ易キ処ノ修正
按ヲ提起シテ其同意ヲ求ムルモノナキニ視テ其大勢ノ向フ
処別ニ察スヘキモノアリ即チ海軍按ノ成立ニ困難ヲ与ヘタ
ルノ原因トシテ見ルヘキモノ

其一、露國提議ノ注意周到ナラス(豫算上各国々法ノ解釈
ニ入ラサル可ラサルコトヲ顧慮セス)シテ賛成者ト反対
者トニ論ナク提議ヲ認容スル能ハサリシ為ナリ

其二、僅少ナリト雖モ其將來ノ行動ニ於テ自由ヲ拘束セラ
ル、コトヲ厭フノ点ニ於テ反対者アルヲ以テナリ

右ハ全會一致ノ意向ト視テ大過ナケン如何トナレハ露國ト

雖モ彼ノ真意ヲ討タレハ此点ニ於テハ我等ト其意見ヲ同フ
スルモノト視テ可ナレハナリ
斯テ海軍按ハ全会一致ノ満足ノ下ニ黙々黙々ノ裡ニ否決セ
ラレ陸軍制限按ト共ニ金色燦爛トシテ人目ヲ眩惑スルニ足
ル処ノ仏国人種ノ決議按ノ外被ニ包マレテ「深林宮」ノ総
委員会ニ於テ莊嚴ナル萬國葬式ヲ以テ葬リ去リス
各国委員共ニ本問題ノ終焉ハ其体裁ニ於テ最モ体ヲ得タル
モノトシテ皆満足ヲ表セラレヌ

(雜記)

各国委員間ノ交情ハ最モ磊落融和ヲ旨トシ此間決シテ反目
嫉視ノ態度アルコトナシ一度委員室ヲ出レハ互ニ襟ヲ披キ
談笑シ君ノ先刻ノ議論ハ甚タ手痛カリシトカ或ハ君ハ余リ
酷キコトヲ云フモノ哉ナト特ニ無慮ニ包蔵スル処ナキヲ
妙トスルニ似タリ過日彼ノ難題中ノ難物ニ屬スル露国回章
ノ第一議題ノ海軍委員会ニ上ルヤ種々議論ノ末ニ二様ノ決
ヲ取ル場合ニ立至レリ即チ一ハ和蘭國ノ全權(議長)ノ発
意ニ係ル本問題(前ニ出ツ)ノ如キ重要ナル問題ハ各国政
府ニ於テ充分ナル調査ヲ遂クルニ非レハ容易ニ決定シ得ヘ
キモノニ非ルノ性質ニ屬スルヲ以テ彼ノ曩ニ決議セル砲彈
問題ノ如ク之ヲ他日ノ會議ニ延期スルヲ可トスルノ按ナリ

物ナレハ按モ自然ニ其趣キヲ異ニセサル可ラス迨モ初メヨ
リ多キヲ求ムレハトテ為シ得ヘキニ非レハ此位ノ処ヨリ次
第ニ始メタシト希フニ過キス云々然レトモ小官ノ初メニ起
セル疑問ハ慥カニ彼ノ利己主義ノ機心ニ触レタルモノト見
ヘ頻リニ露国提議ノ利己主義ニ基キタルモノニ非ルコトヲ
弁シテ息マス小官モ別ニ追究スルコトヲ避ケ談笑ノ間ニ話
ヲ了セリ

露国ノ海軍委員ハ(Scheine, Capitaine de Frégate) 近頃
迄東洋艦隊ノ「ルリツク」号ノ副長ナリシカ目下ハ巴里ノ
露国公使館附武官ニシテ野元中佐トハ年来ノ親交アル者ノ
由同氏ヨリ聞ク処ニ由ルモ彼ハ温厚篤実ノ人物ニシテ陸軍
部委員(Colonel Jilinsky)ノ如ク機鋒縦横ノ才氣ニ乏シ
ク然レモ陸軍部委員ノ之カ為メニ他ノ委員ノ議論ヲ挑發シ
テ抵抗ヲ増シ議事ヲシテ困難ナラシメタルニ比スレハ却テ
氏カ温厚ニシテ誠実ニ会々其ノ程度ヲ越ヘテ本音ノ機微ヲ
洩シ時ニ一坐ノ委員ヲシテ微笑ヲ含マシタル場合アレトモ
却テ愛嬌トナリテ他ノ委員ノ同情ヲ得ルニ至レリ其委員会
ニ於ケル成効ハ談論風発ノ「ジリンスキー」大佐ヨリモ真
摯樸訥ノ「ジエイン」中佐ニ於テ之ヲ見ルモノ、多キニ似
タリ

小官ハ直ニ之ニ賛成ヲ与ヘ(仏国委員モ亦之ニ賛ス然ルニ
露ノ委員ハ之ヲ不可トナシテ本會議中ニ之ヲ議定センコト
ヲ主張シ決ヲ取ルニ方テ小官ハ中立棄權ノ側ニ立テ露ノ延
期ヲ不可トスルノ按ニ賛成ヲ与ヘサリケレハ後委員会ヲ了
ヘ一堂卓ヲ囲ンテ午餐ヲ共ニスルノ際露ノ委員(海軍中佐
Scheine)破顔一笑小官ニ向テ曰ク君ハ酷キ人ナル哉我按
ニ向テ中立棄權トハト云ヒケレハ小官ハ之ニ答ヘテ否トヨ
予ノ君ノ按ニ向テ中立棄權スルハ他ナシ和蘭全權按ノ真面
目ニ且ツ慎重ニ問題ヲ調査セントスル処ノ按ヲ賛成セルヲ
以テナリ之ニテ予カ如何ニ本問題ニ向テ真面目ニ且ツ熱心
ナルコトヲ諒セラレヨ且ツ語ヲ次テ曰ク君ノ提出ニ係ル海
軍ノ軍備縮少按ハ制限ノ点ニ於テ寛大ニ驚カサルヲ得ス之
ヲ君ノ同僚タル「ジリンスキー」大佐ノ陸軍部委員会ニ提出
セル秋霜烈日ノ如キ嚴シキ按トハ之ヲ比スヘクモ非ス齊
シク軍備縮少ヲ精神トスル提按ニシテ斯ク迄ニ海陸其所見
ヲ異ニスル予輩ノ少シク疑訝ナキ能ハサル所以トナス願ク
ハ高説ヲ聞クコトヲ得シカト(蓋シ彼ノ手前勝手ナル勘定
ヨリシテ斯ノ如キ海陸不權衡ナル按ヲ提出セル事情ヲ察知
シ得タルヲ以テ暗々裡ニ彼ノ利己主義ヲ詰ルノ意ニ出タル
ナリ) 彼少シク困却ノ色アリ弁シテ曰イヤ海陸ハ自ラ別

會議ニ於テハ可成多ク言ハス可成人ノ言ニ逆ラハス而シテ
最モ終票決ノ場合ニハ自己ノ最モ便利トスル処ノ解決ニ適
從スルヲ以テ最モ巧妙トナス各委員多クハ皆此ノ態度ヲ取
ルコトヲ努ム故ニ海軍部委員会ノ會議中會テ委員間ニ熱心
ナル反問難詰ノ討論アルコトナク平々坦々大道ヲ行ク如ク
白湯ヲ呑ムカ如シ之ニ反シテ陸軍部委員会ニ於テハ時ニ議
論ニ波瀾ヲ生スルモノ之レアリ夫ノ英國ノ各国ノ否認ニ係
ラス頑然トシテ「ダムダム」丸(Dunn Dunn bullet)ヲ小銃
ニ使用セントスルノ議論ヲ維持セル際ノ如キ近クハ露国回
章第一議題軍備制限按ニ對シテ独国委員「シュワルホフ」
大佐(Schwarzhof)ノ絶對的反对演説ノ如キハ平和會議
ノ精神ヲ其根本ヨリ破壊シ去リタルモノニシテ開會以來
如此痛快ナル激語ハ他ノ委員ノ敢テセサル処ノモノヲ為シ
タリト云フヘシ然レトモ大佐ノ演説ハ軍備制限反对者ノ急
先鋒トシテハ皆其人ヲ得タルヲ相慶スヘシト雖モ大佐其人
ニ取リテ若クハ代表スル処ノ独国政府ノ態度トシテハ將來
必ラス世上ノ物議タルヲ免レサルモノニ屬ス如何トナレハ
大佐ノ演説ハ独国皇帝ノ平和會議ニ賛成ノ勅語ト矛盾シ
(曩ニ「ワイズバーデン」ニ於テ露国皇帝祝誕ノ宴席ニ於テ
露国ノ大使ニ向テ述ヘラレタル独国皇帝ノ平和會議ニ同情

ヲ寄セラレタル勅語（演説）ハ此当時稍々沈睡ニ傾キタル
平和會議ニ局面ノ一変ヲ来シ人ヲシテ會議ノ前途洋々トシ
テ多望ナリト語ラシメタリ且ハ当初独国政府カ平和會議ニ
賛同ヲ表シタルノ精神ヲ破壊シ去リタルモノニ値ヒスレハ
ナリ

独国政府ハ既ニ萬国仲裁法ニ異議アリ議事扞格ノ衝ヲ以テ
目セラル今又大佐ノ軍備制限問題ニ向テ絶対ノ反対演説ヲ
聞ク蓋シ独国ノ態度ハ測ル可ラサルモノアリ

京童謡テ曰ク平和會議ニ兩個ノ不思議アリ曰ク露国海軍委
員ノ露国政府ヲ代表シテ海底水雷艇ト衝角ノ問題ニ向テ賛
成ヲ与ヘサル事曰ク独国陸軍委員ノ皇帝ト政府ノ言明ニ矛
盾シテ軍備縮少ニ絶対的の反対ヲ為セル事ト小官ハ更ニ之ニ

一不思議ヲ加ヘントス即チ露国海軍制限按（制限ノ意義ニ
於テハ殆ント無意義ニ屬スヘキモノナリ）ト陸軍制限按ト
制限ノ意義ニ於テ非常ノ軒輊アルコト是ナリ而モ世人怪ム
ヲ休メヨ是レ決シテ不思議ニ非スシテ凡テ會議ノ真相ハ此
ノ不思議ニ由テ解釈説明セラル即チ此ノ不思議コソ會議真
相ノ鍵鑰ナレ
右謹テ報告仕候也

一四一 明治三二年七月十四日

在蘭林公使ヨリ
青木外務大臣宛

軍縮ニ関スル委員会ノ討議状況報告ノ件

萬国平和會議報道七月十四日第七回

第一委員ノ事業ハ政略及軍機ニ関スル所多キヲ以テ初メハ
嚴重ナル秘密ノ裏ニ包マレツヽアリシガ六月中旬ヨリ形勢
一変シ日々ノ議事ハ其ノ日ノ中ニ当地ノ夕摺新聞ニ要領ヲ
掲ケ例ノスチート氏ノ刊行スルダグ、ブラット別摺ニハ
議事録ヲ殆ント其儘掲載スルコトモ少ナカラス又「倫敦タ
イムス」及「マンチェスターガルドヤン」ノ通信モ甚ク綿
密ナレハ今ト成リテハ局外者ト雖モ其顛末ヲ知ルコト容易
ナリ茲ニ面白キ節ノミヲ裁シテ報道セム

第一委員ノ任務ハ「ムラウイエフ」回章中左ノ四点ヲ調査
報告スルニ在リ

(一) 時期ヲ限リテ陸海軍ノ常備額及之ニ対スル豫算ヲ増
加セサル約束ヲ為シ並ニ将来ニ於テ尙ホ之ヲ減少スル法
ヲ講究スル事

(二) 陸海軍ニ於テ総ヘテ新種ノ銃砲、及新種ノ爆發物ヲ
使用スルコト並ニ現ニ実用スル爆發彈丸ヲ今後小銃及ヒ
大砲ニ使用スルヲ禁スル事

一四〇 明治三二年七月十四日

在蘭林公使ヨリ
青木外務大臣宛（電報）

平和會議軍縮事項ニ関シ請訓ノ件

七月十四日發
十六日着

青木外務大臣

在海牙府 林全權公使

第六十六号

露国回章中第二、第三、及第四ノ議題ニ関シ制限期間ヲ五
箇年トシ第一委員會（不明）決議ノ結果左ノ如シ

第一、五箇年間爆發彈ヲ輕氣球ヨリ投下スルヲ禁スルコト
ハ全会一致ヲ以テ可決セラル

第二、単ニ窒息セシムルノ目的ヲ以テ瓦斯ヲ撒布センカ為
メ爆發彈ヲ使用スルヲ禁スルコトハ一箇國（米國）ヲ除
キ他列國ノ同意ヲ以テ可決セラル

第三、人体ニ入りテ容易ニ膨張スル彈丸ヲ禁スルコトハ二
箇國（英國及米國）之ニ反対シ又一箇國（葡萄牙）ハ決
議ノ數ニ加ラス其他列國ノ同意ヲ以テ可決セラル

第四、前二項ノ提議ハ反対者アルニ拘ハラズ協定ニ至ルヘ
キコト

本官ハ前記規定ニ同意シ然ルベシト思考ス、次週月曜日迄
ニ回訓ヲ請フ

(三) 陸戰ニ於テ現ニ存在スル怖ルヘク猛烈ナル爆發物ノ
使用ヲ制限シ並ニ彈丸又ハ爆發物ヲ輕氣球ヨリ投シ又ハ
類似ノ方法ニ於テ使用スルヲ禁スル事

(四) 海戰ニ於テ潛行水雷艇又ハ之ニ類スル破壊機械ノ使
用ヲ禁シ並ニ今後撞角ヲ具ヘタル軍艦ヲ製造セサルヲ義
務トスル事

各國第一全權ノ協議ニ依リ独逸全權ムンスタル伯及米國全
權ホワイト氏ヲ第一委員ノ名譽議長トシ永久中立國タル白
耳義ノ全權ベルナル氏ヲ正議長トシ和蘭ノカルネベーク
氏ヲ副議長トスル事ニ内定シ五月廿三日ノ本會議ニ於テ之
レヲ可決シ同日直チニ第二委員會ヲ開キテ之ヲ第一部第二
部ニ再分スルニ決定シタリ

五月廿六日更ニ第一委員ノ總會ヲ開キ議長ベルナル氏先
ツ委員ノ事業及露帝提議ノ由来ヲ演説シテ曰ク平和會議ノ
各事業中ニテ此ノ委員ノ担当スル所ハ最モ重要ニシテ且ツ
困難ナルモノナリ蓋シ露國朝廷ノ之ヲ提議スル取テ今日ニ
始マルニ非ス千八百十六年維也納會議ニ於テ始メテ今日ノ
如ク欧州ノ兵備ヲ緩メ各國ノ常備兵額ヲ限定スルノ議アリ
シ時アレキサンドル第一世ハ熱心賛成シ此ノ事ノ為メニ英
國ノカステラレイ卿ニ贈ラレン書簡ハ歴史ニ存セリ降テ千

八百六十八年ニ至リアレキサンドル第二世ハ各国全權ヲ聖比得堡ニ集メテ無要不洽ノ傷害ヲ被ラス其器ノ使用ヲ制限シ千八百七十四年更ニブルセルニ萬国会議ヲ開キテ戦争ノ慘害ヲ輕減スル目的ニ出ツル陸戦例規宣言案ヲ議定シタリ露國ノ仁愛ニ於ケル此ノ如ク其ノ差アリト雖モ之ニ比スレハニコラス第二世ノ提議ハ其範圍遙カニ広ク隨テ其困難モ又遙ニ大ナリ然レドモ退テ今日ノ會議ヲ顧ミレハ殆ソド世界各国ノ代表者カ一切利己ノ目的ヲ離レ相互ノ間ニ現存スル紛議及ヒ故障ハ總テ之ヲ度外ニ措キ全ク公平無私ノ地位ニ就キテ戦争ノ害毒ヲ輕減シ平和ノ基礎ヲ堅クスルノ方法ヲ講究セントスルニ至リタルハ天地開闢以來未タ曾テ有ラサル所ナリ唯々此ノ一事ハ既ニ以テ大ニ世界ニ影響スルノ功ナクンハ非ス諸君今日ノ事ハ是レ數百年ニ涉リテ世界ノ思想家及政治家ヲ苦心セシメタル神聖偉大ノ事業ナリ余ノ諸君ト俱ニ微力ヲ此ノ事業ニ致ス事ヲ得ルハ一生ノ名譽トスル所ナリ云々

ムラウイエフ回章ノ第一項即チ軍備制限ハ難事中之難事タルヲ以テ他ノ各問題ヲ議シ了リタル後議題ニ登ボス事ニ内定セリ

是レヨリ各国陸軍派遣ノ委員ハ第一部会ニ入り海軍派遣ノ

ケナシ唯々全然新式ノモノ（例ヘハ自動連發銃）ヲ採用ス

ル事ヲ止メンノミトノ議ヲ提出シタリ然ルニ現在使用スルモノト云フハ漠然ナリトノ論起リ又未タ軍隊ニ給与セザルモ既ニ發明シテ試験中ニ在ルモノハ如何トノ問題出テ其末議長ノ注文ニテ口径、神速、彈重、一分時間ノ發射數等ヲ精密ニ指定シテ提案スル事ト成レリ、而シテ若シ露國ニシテ真ニ熱心ニ此ノ案ヲ通過セシムルノ意アリシナランニハ議長ノ注問ヲ受クルマテモナク初メヨリ明細ノ案ヲ準備スヘキニ實際ハ然ラスシテ五月二十六日此ノ注文ヲ受ケタル後始メテ電報ヲ以テ本国政府ニ經伺シテ案ヲ立テタルハ迂濶ト云フノ外無シ五月三十一日ニ露國ノ明細案ト和蘭ノ別ノ案ト同時ニ提出セラレタリ先ツ露國ノ明細案ニ付討議シタルニ急造未熟ニシテ不明ノ点多キ為メ却テ紛雜ノ議論ヲ生シ寧ろ露國最初ノ簡略案ヲ以テ議決スルニ如カストノ議起リ採決シタルニ成立セス次ニ和蘭ノ別案ト露國ノ明細案トヲ合シテ採決シタルニ各強大国ハ或ハ不明ヲ理由トシ或ハ改良ヲ加ヘントスル都度ニ締盟各国ニ協リテ其ノ同意ヲ求ムルヲ不便トシ或ハ誠實ニ條約ヲ守ルヤ否ヲ監督スルノ法無キヲ口実トシテ同意ヲ拒ミタリ此ノ後數日ヲ經テ和蘭委員デン、ベン、ポルチュゲール將軍ヨリ更ニ一案ヲ提

委員ハ第二部分ニ加ハリテ各其専門事業ニ付キ露國回章ノ第二、第三、第四ヲ討議シタリ而シテ六月二十二日ニ至ル迄ノ間ニ孰レモ五度會議シ同日ヲ以テ第二及第三項ニ關スル報告案ヲ議定シ廿三日ノ西部分会ニ於テ第四項ヲ議了シ和蘭委員デンベン・ポルチュゲール將軍第一部会ノ報告委員ニ選マレ澳太利委員海軍大佐ストリック伯第二部会ノ報告委員ニ選マル茲ニ其ノ報告ノ要領ヲ挙クレハ左ノ如シ

○新種銃砲ニ關スル制限

大砲ニ關シテハ露國委員ヨリ年限ヲ定メテ現ニ各國ニ於テ使用スル所ノモノヲ際限トシ此ノ以上ニ改良ヲ加ヘタルモノヲ使用セサルノ議ヲ提出シタリ然ルニ紛々ノ議論アリ更ニ問題ノ体裁ヲ改メテ平和會議ニ參列ノ各國ハ就中經濟上ノ理由ヨリシテ一定ノ年限間ハ全ク新奇ノ發明ニ係ル砲種ヲ採用セサル事ヲ約束スルヤ否ヤニ付決ヲ取りタルニ反對者多クシテ終ニ消滅セリ

小銃ニ關シテハ第一部会ニ於テ最モ紛雜ナル議論アリ之カ為メニ四回ノ會議ヲ費シタリ初メ露國委員ハ原案提出ノ地位ニ立チテ各國ニ於テ現在使用スル小銃ハ大抵一樣ナレバ之ヲ以テ標準トシ一定ノ年限間ハ新種ヲ採用セザル事ヲ約束スヘシ但シ現在使用スル種類ニ多少ノ改良ヲ加フルハ妨

出シタリ是レ實ハ露國ヨリ内囑セラレタルモノナリトノ評判ナリ其案ハ總テ詳細ノ点ニ立入ルコトヲ避ケ五年ノ限リトシテ各國ニ現在使用スル所ト異ナル新式ヲ採用セザルヲ約束シ現在使用ノ分ニハ如何ナル改良ヲ加フルモ全ク自由トシ今尙ホ旧式銃（即チ口径八ミリ以上ノモノ）ヲ使用スル國々ハ他ノ國々ニ於テ現在使用スル所ヲ採用スル權利アリト云フニ在リ然ルニ果シテ現在使用ノモノニ加フル改良ヲ全ク自由ニスル以上ハ費用ノ点ニ於テ國民ノ負擔ヲ輕クスルニ功ナシトノ反對論起リ又監督論モ再發シ結局表決ニ附シタルニ反對ノ數前回ノ如ク多カラサルモ可否ノ表決ニ加ラスシテ別立スルモノ多ク且某々國ハ断然反對シタル為メ成立セザリキ仍テ少ナクモ陸軍ノ關係ニ於テハ新種銃砲使用ノ制限ハ全ク廢案ニ歸セリ

○爆發物及爆發彈丸ニ關スル制限

火薬ノ制限ニ關シテハ左ノ如キ反對論出テタリ曰、露國提案ニ於テ新種爆發物ヲ使用スル事ヲ制限スル目的ハ主トシテ經濟ノ点ニ在リ然レトモ是レ其實ハ却テ不經濟ヲ來スモノナリ其故ハ火薬ハ發射ノ際成ル可ク多量ノ瓦斯ヲ生スルト同時ニ成ル可ク底度ノ温熱ヲ發スルヲ善シトス其ノ理由ハ發射力ヲ強クスルト同時ニ熱度ノ為メ銃器ノ早く破損ス

ルコトヲ防クニ在リサレハ此ノ目的ヲ以テ益々改良シタル
火薬ヲ用ヒルハ却テ益々経済ニ着クモノナレハナリト結局
新種ノ火薬ニ就キテハ如何ナル制限ヲモ附セサルニ全会一
致セリ

現ニ実用スル或ル爆発弾丸ヲ砲兵ニ於テ使用スルコトヲ禁
スル件及未ダ実用セサル新種ノ爆発弾丸ノ使用ヲ禁スル件
ハ孰レモ十一、二カ国ノ反対アリテ消滅シタリ

○爆発銃丸ニ関スル制限

小銃ヨリ量目四百グラム以下ノ爆発弾丸ヲ発射スルコトハ
既ニ千八百六十八年聖比得堡宣言ノ禁スル所ナレハ真ノ爆
発銃丸ナルモノニ関シテハ更ニ議論ノ起ル可キ管ナシト雖
トモ玆ニ一種類似ノ銃丸アリ「ダムダム」ト称シ英國陸軍
ノ印度及埃及ニ於テ使用スル所是レナリ、即チ彈核ハ鉛ニ
シテ彈套ハ硬金屬ナリ而シテ唯タ尖頭ノミ一小部ニ被包ヲ
施サス、故ニ肉中ニ入テ膨脹シ慘酷ナル傷害ヲ齎スモノナ
リ、此ノ如キハ之ヲ爆発彈ト称スルニ当ラスト雖トモ精神
ニ於テ千八百六十八年宣言ノ禁スル所ト同一ナルカ故ニ既
ニ昨年来學者間ニ是非ノ論アリ（詳細ハ本年二月頃刊行ニ
係ル一般國際公法雜誌參看）第一部会ニ於テ銃丸ノ事議
題ト成ルヤ否瑞西委員クンツリ大佐ヨリ右「ダムダム」
ノ使用ヲ禁スルノ動議出テ、多ク賛成者アリ、英國委員

ルニ非ス文明國間ノ戰爭ニモ必要ナリト論シタル可笑シ、
露國委員ヂリンスキー大佐ハ之ヲ駁シテ曰、敵ノ人馬ヲ止
ムルコト能ハサルハ普通銃丸ノ罪ニ非スシテ競テ銃ノ口径
ヲ極小ニスルノ結果ナリ、故ニ之ニ對スル救済策ハ「ダム
ダム」ヲ使用スルニ非スシテ口径ヲ大ニスルニ在リト。

此ノ如ク英國ノ「ダムダム」ハ頗ル不評判ニテ露國ノ之ヲ
禁セムトスル提案ヲ以テ要決ニ附シタルニ独リ合衆國ノ僅
カニ英國ヲ援クルアルノミ他ハ皆禁制ニ同意シタリ。

其後英國ノ新聞ヲ見ルニ同國ノ輿論ハ萬國會議ニ於テ世界
ノ非難スル所ト為リタル兵器ヲ使用スルコトヲ快トセサル
モノ、如ク、七月十日ノ下院議場ニ於テドウツト代議士ヨ
リ此事ニ関シ陸軍省財務部長ニ向テ質問スル所アリ、財務
部長ウインダム氏ハ陸軍省カウリツチニ於テ「ダムダム」
ヲ製造セシメ南部亞非利加ニ送りタルハ事實ナルモ果シテ
平和會議ニ於テ如何ナル決議ヲ為シタルヤハ未タ報告ニ接
セサルヲ以テ言明スルヲ得スト答弁シタリ。

○彈丸ヲ輕氣球ヨリ投スル事

此ノ一点ハ差シタル異議ナク通過シタル由ナリ

○海軍ニ関スル議決ノ要領

第二部会ニ於テモ多クハ第一部会ニ於ケルト同一ノ問題ヲ

アルダク將軍ハ頻リニ弁解シタリ、惜ム可シ其弁解ノ旨
趣、区々ニシテ首尾一貫セサル為メ大ニ世間ノ批評ヲ免レ
サリキ、初メ彼レハ世間ニ所謂「ダムダム」ハ独逸ニ於テ
製シタル模造品ナリ、真ノ「ダムダム」ニ非ス、英軍ノ使
用スル「ダムダム」ハ少シモ普通ノ銃丸ト異ナルモノニ非
スト弁シナカラ又忽チニシテ説ヲ變ヘ普通ノ銃丸ニテハ野
蠻人ノ突進ヲ止ムルニ足ラス、傷害輕微ナルカ故ニ丸ヲ被
リナカラモ進ミ來レリ故ニ「ダムダム」ヲ用ヒル必要アリ
ト論シタリ之ニ對シ露國委員ラファロウイツハ今日第十九
世紀ノ將ニ終ラムトスルニ當リ此ノ如キ非仁愛的ノ語ヲ聞
ク、平和會議ノ理想ニ戻ルモ甚シケレバ寧ロ之ヲ問題外ニ
措カムト難シタリ、此論ノ未ダ決セサルニ當リ六月九日ノ
「倫敦タイムズ」ニ書ヲ寄セタルモノアリ、其論旨ニ曰、
英國カ「ダムダム」ノ使用ヲ廢スル能ハサル所以ノモノハ
独リ野蠻人ト戰爭スル為メノミニ非ス、文明國間ノ戰爭ニ
於テモ其必要アリ、即チ騎兵ノ突進ニ對シテ普通ノ彈丸ハ
以テ敵ノ人馬ヲ止ムルニ足ラス、敵ノ人馬止マラサレハ我
歩兵危シ、英國ハ其最愛スル所ノ兵士ヲ危キニ置クノ案
ニ同意スルヲ得スト此論ノ「タイムズ」ニ出テタルト同シ
頃ヨリ第一委員ニ於ケルアリダク將軍ノ論旨モ亦一變シテ
「ダムダム」ハ決シテ野蠻人ニ對スル戰爭ノミヲ目的トス

討議シタルコトアルカ、海軍ノ關係ニ於テハ大砲ノ事最モ
大切ナルニ因リ、先ツ回章第二項ニ「新種ノ銃砲ヲ使用ス
ルコトヲ禁ス」ト云ヘル意味ニ付議論起リ、其末矢張り露
國委員ヲシテ詳細明確ノ提案ヲ為サシムルニ決シタリ、然
ルニ此点ニ於テモ露國海軍省ハ豫メ一定ノ成案アラサルモ
ノト見エテ倉皇研究シ數日ノ後ニ於テ始メテ一案ヲ提出セ
リ、其ノ案ハ大砲製造ノ各要點ニ涉リテ最大限ト最小限ヲ
示シ之ヲ超越スルコトヲ許サザル工夫ニ出タルモノニシ
テ綿密ナリト雖トモ専門上非難スヘキ点少ナカラスト伝聞
ス、是ニ於テ議論百出シテ殆ント底止スル所ヲ知ラス、
是ニ於テ佻國委員ハ左ノ如キ滑稽的動議ヲナセリ、曰ク專
門的ニ詳細ヲ定メムトスルトキハ議論百出スルニ因リ寧ロ
漠然ト「先込メ砲ヲ以テ元込メ砲ニ改メタルカ如キ根底的
改良ヲ加ヘス」トノ決議ヲ為スヘシト、此説ニ賛成者アリ
テ議題トナラムトセシニ彼ノ土耳其格ハ尙ホ元込メ砲ヲ使用
シ居ル事故之ニ反對ヲ唱ヘタルハ可笑、結局新奇ノ銃砲ヲ
禁制スル件ニ付テハ如何ナル動議モ成立セサリキ、

現ニ実用タル爆発彈丸ニ関シテハ露國委員ヨリ人ヲ塞塞セ
シムル瓦斯ヲ以テ充テタル砲彈ノ使用ヲ禁スルノ案出テ、
他ニ甚シキ異論モナカリシカ、独リマハン大佐ハ一大議論
ヲ唱ヘテ反對セリ、曰ク、水ニ溺ル、者モ塞塞ノ為メニ死

亡スルナラスヤ、サレハ敵艦ヲ撃破シテ悉ク其船員ヲ水中ニ窒塞セシムルコトヲ目的トスル海戦ニ於テ僅々数人ヲ窒塞セシムル砲弾ノ使用ヲ禁スヘキ理由ヲ見スト、此為メ此提議モ消滅シタリ。

潜水水雷艇ニ関シテハ各海軍国委員ノ間ニ意見ノ交換シタルニ執レノ政府モ到底当分ノ中其使用ヲ禁スルコトニ同意スヘキ形勢アラサルニ付、別ニ決議ニ附セスシテ止ミタリ、但シ此事ニ関シ新聞紙ノ輿論ニ於テ露國ヲ非難スルハ無理ナラス即チ露國ハ潜水水雷艇使用禁止ノ發議者タリナカラ自ラ之ニ反対シタルハ何タル自家撞着ソヤ、此ノ如キハ露國內閣ニ統一ノ缺ケタルヲ證スルニ余リアルコト也
次ニ将来撞角ヲ具ヘタル軍艦ヲ製造セサルコトニ関シテモ露國委員ハ明言シテ曰ク、本國政府ノ望ム所ハ唯々各國ノ意見ヲ聞クニ在リ、故ニ一定ノ提議ヲナスヘキ訓令ヲ齎ラサスト露國既ニ斯クノ如クナルヲ以テ独逸以下七國ハ反対シ他ノ七國ハ全会一致ヲ條件トシテ同意ノ旨ヲ表シ、露國以下四國ハ姑ク可否ノ決ニ加ラス別立シタリ。
此ノ如クムラウイエフ回章ノ第二、第三項ハ海軍ノ關係ニ於テモ全ク廢案ト成リ、第四項ノ撞角一件モ到底全会一致ノ望ナキニ帰シヌ。

年間ニ涉リ下ノ三項ヲ五ニ通知スル事、(イ)新ニ製造セムトスル軍艦ノ総噸數、(ロ)士官及船員ノ総員數、(ハ)「ドック」砲台等軍港關係ノ工事等ニ支出スル費用。

此日ノ議題ハ關係スル所実ニ重大ナレハ各國委員ハ最大慎重ヲ以テ言動シタルニ独リ波斯委員ハ自ラ露帝ニ売ルノ意ヲ以テ卑陋ナル演説ヲ為シ、全世界ニ恥ヲ晒セリ、即チ曰、露國皇帝陛下ノ此ノ發議ニ於ケル世間或ハ其深意ノ存スル所ヲ云々スル者アレド是レ陛下ノ誠心誠意ニ出テタルハ予ノ保證スル所ナリ、余ノ始メ公使トシテ聖比得堡ニ赴任スルヤ一日觀兵式アリテ陪觀シタルニ病ノ為メ疲労甚クシクシテ落馬シタリ、然ルニ陛下ハ萬乗ノ尊キヲ以テ故サラ其行列ヲ止メテ余ヲ痛ハリ賜ヒ觀兵中モ屢々侍從ヲシテ余ノ容態ヲ訪問セシメ賜ヘリ、此ノ一事ヲ以テスルモ陛下ノ仁慈慈惠ハ明ナリト、聽ク者皆嘔吐セリ。

六月廿六日ノ會議ニ於テ或ル國々ノ委員ハ未ダ本國訓令至ラサルヲ理由トシテ可否ノ討論ニ取掛ルコトヲ躊躇セシガ独逸陸軍委員ハ直チニ討論ヲ開カムコトヲ求メ、茲ニ始メテ独逸政府ノ本心ヲ發表シテ大々的反対演説ヲナセリ。此ノ演説ニ限り數日間ハ秘密ニ附シアリテ執レノ新聞紙ニモ見エサリシニ是レ亦七月一日ノ「ダーグ、ブラット」及同三日ノ「倫敦タイムズ」ニ殆ンド其全文ヲ掲ケタリ、独逸

○軍備擴張休止問題

會議モ既ニ一月以上継続シ皆々帰國ヲ急クノ形勢ト成リタルヲ以テ仲裁裁判事件ハ未ク第一読会ヲモ卒ヘサルニ拘ハラス急ニ夫ノ最モ困難ナル軍備制限問題ヲ會議ニ附スルコト、成リ、六月廿三日第一委員ノ總會ヲ開キテ之ヲ議事ニ登シタリ、劈頭第一ニ委員長ベルナル氏ノ嚴肅ナル沿革演説アリ、次ニスタール男露國ノ第一全權トシテ述ヘテ曰、元ト今日ノ會議ヲ開クニ至リタルハ各國政府カ十二月三十日ノ回章ニ列示シタル事項ヲ論究スルコトニ同意ヲ表シタルカ故ナレハ善意ト交親相讓ノ精神トヲ以テ速ニ此ノ至重ノ問題ヲ討議シ願クハ協同以テ好結果ヲ致スヲ得ムト述ヘ、和蘭全權デン、ペールボルチュガル將軍モ老後ノ思ヒ出ニ仏語ノ底ヲ拏テ悲壯ナル贊成演説ヲ成セリ。

右了テ露國陸軍及海軍委員ヨリ軍備擴張制限案ヲ提出セリ、左ノ如シ

(甲)陸軍ニ関スルモノ(一)五ヶ年ヲ限リトシテ本國兵(即チ殖民地軍隊ヲ除ク)ノ常備現數ヲ増加セサル事(二)右ノ約束成立スル以上ハ各國ニ於テ各々其常備兵數ヲ一定スル事(三)現行陸軍豫算ノ金額ヲ五ヶ年間其儘維持スル事(乙)海軍ニ関スルモノ(一)三年間ニ涉リテ海軍豫算ノ總額ヲ定メ之レヲ増加セサルノ約束ヲ為ス事(二)同シ三

陸軍委員ノ名ハダロス、ド、シュワルツホーフト云ヒ、官ハ大佐ニシテ千八百七十年戦争以來ノ經歷アリ、仏語ヲ善クシ現ニワイマルノ隊附士官ナリ、大佐今日ノ演説ハ露帝平和會議ニ於ケル急処ヲ刺シ又復活ノ望ミナキマテニ至ラシメタルモノナレバ左ニ之ヲ撮訳シ、以テ読者ヲシテ軍備擴張休止問題ノ成行ヲトセシメントス。乃チ大佐ハ先ツデン、ペン、ボルチュケール將軍ノ演説ニ歐洲各國ノ人民ハ二十五年以來ノ軍備累進擴張ノ為メ其重荷ニ堪ヘス、既ニ滅亡ニ瀕シツ、アリト云ヘルニ反対シテ曰ク。

「本員ハ將軍ノ雄弁ニ感服スルト同時ニ其論旨ヲ肯承スル事ヲ得ス、本員ノ緘黙ハ或ハ同意ト誤ラル、ノ虞アルヲ以テ敢テ一言ス。

独逸國民ハ將軍ノ言ノ如ク負担ニ苦シミ、峻涯ニ瀕シテ將ニ墜落セムトスルコト間髪ヲ入レサルノ窮地ニ迫リツ、アラス之ニ反シテ官民ノ富資公共ノ慶服、生活ノ標準

八年一年ヨリモ上進シツ、アリ。
義務兵役四年ニ至リテモ独逸ハ之ヲ目シテ重荷ト為サス却テ之ニ服スルヲ以テ独逸ノ存立、独逸ノ隆盛、独逸ノ将来ノ根源タル所ノモノニ対スル神聖愛國ノ義務ナリトナセリ。

余ハ次ニ露國委員ノ提案ト之ヲ支持スル前後ノ議論トニ

付一言スベシ、余ヲ以テ見レハ此ノ提案ト此ノ議論トハ追々一致セサルモノアリ。

一方ニ於テ過度ノ軍備ノ為メ動モスレハ戦争ノ起ラムトスルヲ恐ル、カト見レハ他ノ一方ニ於テハ財源費尽ノ為メニ遂ニ戦争ヲ為ス能ハサルニ至ランコトヲ恐ル、モノ、如シ、余ハ各国君主及国民ノ明智ヲ信スル故ニ此ノ如キ恐レヲ懐ク事ヲ得ス。

又常備兵額ニ関シテ一方ニ於テ各国ノ従来慣行スル所ヲ以テ約束スルニ過キサレハ甚ク容易ナリト云フト見レハ他ノ一方ニ於テ是レ最大難件ナレハ極度ノ奮発ヲナスニ非ザレハ一致ニ至リ難カルヘシト云ヘリ、余ハ寧ロ其極メテ困難ナルニ同意スルモノナリ、何トナレハ常備兵額ノ問題ハ之レヲ他ノ各種ノ問題ト分離シテ単一ニ講究シ得ヘキモノニ非ス例ヘバ一般教育問題、服役年数ノ問題、士官及下士官員数ノ問題、団隊(中隊大隊聯隊等)編成ノ問題、後備年限及兵数ノ問題、軍隊配置、鉄道連絡、要塞地箇敷及位置ノ問題等ハ皆是レ常備兵数ト密接連係スルモノニシテ而モ更ニ緊要ナルモノアレハナリ。

近時ノ軍隊ニ於テハ総テ此等ノ事項ヲ合シテ所謂国防ノ全系ヲ為シ、各国民ノ性質、歴史、因襲ヲ考ヘ又其ノ経

抑々独逸ニ於テハ常備兵額ハ聯邦政府ト帝國議會トノ協諾ヲ以テ之ヲ定ムルナク、而シテ毎年討議ヲ反復スルノ煩ヲ避クル為メ初メハ七年継続ノ規約トシ、中頃ヨリ之ヲ五年継続トセリ、露國委員ハ此ノ事ヲ指シテ是レ従来慣行スル所ナレハ以テ列國ニ約スル容易ナリト言ヘリ。

然ルニ一国内部ノ法律ト國際條約トノ間ニ大懸隔アルコトハ姑ク措テ論セサルモ独逸ハ此ノ五年継続法アルカ為メニ却テ目下ノ提議ニ同意スルコト能ハサルモノアリ。

二ノ道理アリテ同意ヲ困難ニセリ。第一ニ國際條約上ノ五年期限ハ内國歲計上ノ五年ト符合セス、是ニ於テ非常ノ不便アリ。第二ニ現行ノ陸軍法ハ一定不動ノ常備兵額ヲ定メス、年々増進シテ千八百九十二年ノ間ニ至リ漸ク其ノ計画ヲ完成スルノ仕組ト成リ居レリ、故ニ此ノ時ニ至ルマテハ「二年間ト雖トモ引統キ同一兵額ヲ常備スルコトヲ得ズ、右ニ對シ露國委員ジリンスキ大佐、デンペン、ボルチュゲール將軍等ハ反駁ヲ試ミタレトモ大勢ハ既ニ定マリヌ。世間ノ新聞紙力之ヲ評シテ独逸政府カ始メヨリ此ノ意志ヲ公言シタラムニハ平和會議ハ開カスシテ止ムヘカリシト言ヘルハ酷評ナラズ。但シ独逸ノ地

濟上ノ資源、地理上ノ位置、及内外ニ對シ負フ所ノ義務ヲ付度シテ適宜ニ之ヲ計画セリ。此ノ如キハ高度ナル國民の性質ヲ負フルノ事業ナレハ國際條約ヲ以テ其ノ間ニ挾マムトスルハ到底為シ得ヘキ所ニ非サルヘシ。

所謂国防ハ以上頗ル不完全ニ列示シタル諸元素ノ合シテ一体ヲナセルモノナレハ今此ニ其ノ數元素中ノ一ニ過キサル常備兵額ノミヲ挙ケテ約束ヲ定メ以テ各国ノ間ニ公平ナル關係ヲ作ラムトスルハ到底為シ得ヘカラサル所ナリ。

且又提案ニ於テハ本國兵ノミヲ挙ケテ殖民地軍隊ヲ除キタリ、然レトモ本國ニ近キ屬領地ニ兵ヲ置ク者ハ本國ニ專アル日ニ於テ直チニ之ヲ徵召スルコトヲ得ルニ非スヤ暗ニ西伯利及中央亞細亞、海外諸國ハ果シテ如何、彼等ニ取リテ危險ナルモノハ殖民地兵ナリ、然ルニ之ヲ度外ニ措クノ制限論ニ對シ彼等ハ果シテ同意スルコトヲ得ヘキカ。

以上ハ余カ此ノ提案ヲ以テ各国ガ疑モ無ク贊同スル所ノ希望ヲ達スルニ適當ナラサルヘシトスル一般ノ理由ナリ。次ニ独逸ノ特別ノ地位ニ付一言セム。

位ハ露帝提議ノ目的ニ反對スルニ非ス此ノ目的ヲ達スル方便トシテ委員ニ提出セシメタル條約案ニ反對スト云フニ在ルヤ明ナリ然レトモ其実ハ如何ナル條約案ヲ提出スルモ必ス何トカ理由ヲ附シテ反對セシムル積ニテ其ノ為メステンゲル博士ヲ陸軍委員ニ附キ添ハシメタルモノナリトハ当ラスト雖トモ遠カラサルノ想像ナリ。

是ニ於テ各部会ニ調査委員ヲ置キテ露國提案ヲ調査セシムルコト、ナリ、六月三十日更ニ開會シテ第一部会調査委員ヨリ左ノ如キ報告ヲ提出セリ。

(一) 五年ヲ限リトスルモ尙ホ国防ノ多クノ諸元素ヲ規定スルニ非スシテ常備兵額ヲ一定スルコト難シ

(二) 国防ノ諸元素ハ各国甚シク相違セル見解ヲ以テ編成シタルニ因リ一ノ國際條約ヲ以テ之ヲ規定スルコト難シ

是ヲ以テ調査委員ハ露國提案ヲ可認スルコトヲ得サルヲ遺憾トス即チ各国政府ニ於テ更ニ深遠ナル講究ヲ遂ケラレンコトヲ希望スルモノナリ

又第二部会ノ調査委員ヨリ提出シタル報告ノ要旨ハ議院制度ノ國々ニ於テ議會ノ職權ニ屬スル豫算事項ヲ豫メ拘束スル條約ヲ締結スルコト難シト云フニ在リ

委員長ベルナル氏ハ露帝ニ対スル敬意上ヨリ此ノ報告案ヲ決議ニ附セサル方針ヲ取り瑞典委員ビルド男及仏國全権ブルセヨア氏ハ立派ナル葬式演説ヲ為シ遂ニブルセヨア氏ノ動議ニテ票決ニ附セス左ノ三項ヲ委員報告トシテ總會ニ提出スルニ一致セリ

(一)ト(二)ハ第一部会ノ調査委員報告ニ均シ

(三)現ニ世界ヲ重圧スル軍事上ノ負担ヲ制限スルコトハ人生ノ物質上及無形上ノ慶福ノ為メ願フヘキ事ナリ

一四二 明治三二年七月二日

在蘭林公使ヨリ
青木外務大臣宛

兵器制限ニ関スル決議ニ関シ報告ノ件

附屬書一 七月十七日第一委員会提議軍器

制限案

二 七月廿日同前修正案

三 同前再修正案

和第一〇号

九月五日接受

軍器制限ニ関スル討議ノ概況並ニ其成案ニ関スル件

本年一月十一日露国外相ノ回文ニ掲ケタル本会議ノ調査事

項第二、第三、第四、則チ軍器制限ノ事項ハ本会議第一委員会ノ調査権限ニ屬シ同委員会ハ之ヲ陸海軍両部委員ニ分担調査致居候処陸軍部ニ於テハ第一、現用ノ火薬ヨリモ一層強力ノモノヲ使用セサル件第二、新式大砲ノ使用ヲ禁止スル件第三、現用ノ小銃以外ノ小銃ヲ使用セサル件等悉ク廢案ニ屬シ第一、人体中ニ而容易ニ膨脹シ且附着スル種類ノ彈丸ヲ禁止スル件第二、輕氣球其他類似ノ器械ヲ以テ爆裂彈ヲ投下スル事ヲ向フ五ヶ年間禁止スル件ハ全員一致若クハ一二ノ不賛成ヲ以テ成立ニ至リ候將又海軍部ニ於テハ諸種ノ提案概ネ廢棄セラレ單ニ人ヲ窒息セシメ若クハ苦惱セシムル瓦斯ヲ生ス可キ投射物ヲ禁止スル件ニ関シ纏マリタル成案ヲ得ルニ至リ候

是ニ於テ第一委員会總會ハ六月廿二日ヲ以テ而両部会調査ノ結果ニ對シ討議ヲ始メ候処大体部会ノ決議ヲ採用スル事ニ相成委員會ハ更ニ報告委員ヲ撰ミテ委員會討議ノ大意ヲ取纏メ本會議ニ報告スル事ト相成候

七月十七日ニ至リ報告委員ハ別紙甲号ノ報告案ヲ委員會ニ提出致候処該報告中第一、輕氣球上ヨリ投射物其他ノ爆裂彈ヲ投下スル事ヲ禁スル件第二、窒息ス可キ瓦斯ヲ發生スル投射物ヲ禁止スル件第三、容易ニ人体中ニ而膨脹スル彈丸ヲ禁止スル件ヲ總括シ而五ヶ年間ノ協定トスル事並ニ本協定ニ加盟スルトキハ同時ニ千八百六十八年十二月ノ聖比得堡宣言ニ加盟シタル効力ヲ生セシムル事其他該報告ノ殘部ノ諸点ハ委員會ノ決議以外ノ事ヲ記述シ若クハ其決議ヲ不十分ニ記述シタルモノナルガ故ニ反駁論難甚タ多ク該報告ハ終ニ之ヲ撤回シ更ニ修正ノ上提出ス可キ事ト相成候

本月二十日ニ至リ報告委員ハ別紙乙号修正報告案ヲ第一委員会ニ提出致候処又々多少ノ異議アリ結局丙号案ノ通修正ノ上本會議總會ニ提出スル事ト相成候又丙号案第一節ニ掲ケ居候三箇ノ禁止案中第一項則輕氣球若クハ類似ノ方便ヲ以テ而投射物及爆裂彈ヲ投下スル事ヲ五ヶ年間禁止スル協定ハ滿場一致ニテ之ヲ採用シ第二項則人ヲ窒息セシムル瓦斯ヲ發生スル目的ノミニ使用セラル、投射物使用禁止ノ協定ハ英米兩國ヲ除キ他ハ滿場一致ヲ以テ之ヲ採用シ又第三項則容易ニ人体中ニテ膨脹ス可キ彈丸ノ使用ヲ禁止スル件ハ英、米兩國ヲ除ク外滿場一致ヲ以テ採用セラレ候查スルニ前掲第二項ハ素ト部会ニ於テ採決スルニ當リテハ米國ヲ除ク外他ハ滿場一致ヲ以テ而之ヲ可決シタリシガ今回ノ票決ニ際シテハ英國モ亦禁止案反對ニ立ツニ至リ候而シテ英國委員ノ理由トスル処ハ米國既ニ禁止案反對ナルニ於テハ

本案ハ列國一致ノ協定ニアラズ而シテ英國ハ斯ル禁止ハ列國一致ノ必要ヲ認ムルガ故ニ茲ニ反對ヲ表スト云フニ有之候

前頭委員會決議ノ結果ハ翌二十一日ノ本會議總會ニ提出セラレ茲ニ最後ノ票決ヲ与フル事ニ相成候先ツ第一節ノ三個ノ禁止事項中第一項ハ列國一致ヲ以テ五ヶ年間之ヲ禁止スル事ニ票決シ第二項ハ英米兩國ヲ除ク外他ハ列國一致ニテ之ヲ可決致候次ニ第三項ニ關シテハ米國海軍委員ハ本項ヲ修正シテ總テ無用ニ人体ヲ傷害スル種類ノ彈丸ヲ禁止スルコトニ改正セントノ動議ヲ提出致候抑モ本案ハ或種ノ彈丸ヲ明記シテ英國軍隊ガ現ニ印度亞非利加等ノ野蠻民ニ對シテ使用スル *Dum-Dum* 彈ヲ指摘スルモノナリトノ趣意ヲ以テ英國委員ハ曩ニ部会並ニ委員會ニ於テ而極力反對ヲ唱ヘ米國委員モ亦現ニ或一國ガ利便ヲ享有スル特種ノ彈丸ヲ禁止スルヨリハ寧ロ總テ不必用ニ殘忍ノ性質ヲ有スル彈丸ヲ禁止スルニ若カストノ趣意ヲ以テ修正案ヲ提出シタルモ多数ヲ得ルニ至ラザリシガ今又本會議ニ於テ米國委員ハ同様ノ修正案ヲ提出スルニ至リ候然ルニ該修正案ノ票決ニ附セラル、ニ至ルヤ多数ノ反對ニ抛リテ廢案ニ屬シ嗣テ本案ニ對シ票決致候結果ハ英、米兩國ノ反對アリ且ポルチュガル

國ノ可否ニ加ハラサル外他ハ列國一致ヲ以テ本案ヲ可決スル事ト相成候

右及報告候敬具

明治三十二年七月廿一日附

在海牙府列國平和會議

帝國全權委員明諭 林 董(印)

外務大臣子爵 青木周藏殿

(附屬書 1)

甲号 七月十七日第一委員會提議軍縮案

Première Commission

Projet de Rapport à la Conférence.

La première Commission a eu pour tâche d'examiner les quatre premières propositions de la circulaire de Son Exc. le Comte MOURAVIEFF. Ainsi qu'il était prévu elle s'est subdivisée pour étudier les questions posées concernant les engins de guerre en deux Sous-Commissions, l'une pour les armées, l'autre pour les flottes, tandis que la première proposition du Comte MOURAVIEFF, visant la limitation des armements, a été réservée à la Commission entière.

《 que les Puissances signataires renouvelant la Déclaration de St. Pétersbourg du 29/11 novembre 1868 ou y accédant,

《 l'étendent pour la durée de cinq ans à :

《 1°. l'emploi de projectiles ou explosifs lancés d'en haut par des ballons ou par d'autres modes nouveaux ;

《 2°. l'emploi de projectiles qui ont pour but unique de répandre des gaz asphyxiants ou délétères.

《 3°. l'emploi de balles qui s'aplatissent ou s'aplatissent facilement dans le corps humain, telles que les balles à enveloppe dure dont l'enveloppe ne couvrirait pas entièrement le noyau ou serait pourvue d'incisions.》

Parmi les Puissances représentées à la Conférence il y en a un certain nombre qui n'ont point participé à la Déclaration de St. Pétersbourg.

La formule proposée ci-dessus aurait l'avantage que leur signature comporterait leur adhésion à celle de 1868. En appliquant la limitation de cinq ans de durée à tous les trois points, elle irait aussi dans une certaine mesure au devant des considérations qui ont empêché les représentants de deux Gouvernements à cette Conférence de se rallier au vote concernant les balles expansives. Une extension de la Déclaration de St. Pétersbourg ne serait au reste, ainsi que cette Déclara-

I. L'étude des deux Sous-Commissions n'a fait ressortir que trois points sur lesquels un engagement a pu être voté par la Commission :

1°. Celui de s'abstenir de lancer des projectiles et des explosifs du haut de ballons ou par d'autres modes nouveaux.

Cet engagement ne serait pris que pour une durée de cinq ans et a été voté à l'unanimité.

2°. Celui de s'abstenir de l'emploi de projectiles qui ont pour but unique de répandre des gaz asphyxiants ou délétères.

Il a été voté à l'unanimité moins une voix.

3°. Celui de s'abstenir de l'emploi de balles qui s'aplatissent ou s'aplatissent facilement dans le corps humain, telles que les balles à enveloppe dure dont l'enveloppe ne couvrirait pas entièrement le noyau ou serait pourvue d'incisions.

Il a été voté à l'unanimité moins deux voix contre et une abstention.

Quoique les deux premiers points ne paraissent pas avoir une très grande importance et que l'unanimité ait manqué aux votes sur les deux derniers, la Commission croit ne pas devoir négliger ces résultats et propose à la Conférence une Déclaration, portant :

tion elle-même, obligatoire qu'entre les parties contractantes.

L'espoir qu'en fin de compte la formule proposée ci-dessus puisse être signée par toutes les Puissances qui prennent part à la Conférence, ne semble pas exclu et la réalisation de cet espoir est d'autant plus désirable que le but de pareilles restrictions des moyens de destruction est purement humanitaire.

II. Vu l'importance de ces questions pour les budgets, les deux Sous-Commissions se sont longuement occupées de rechercher, s'il n'y aurait pas moyen de se mettre d'accord pour prévenir, ne fut-ce que pendant un certain temps, la mise en usage de nouveaux types et calibres de fusils et de canons ; mais les propositions plus ou moins détaillées qui ont été discutées ont toutes rencontré des objections, en premier lieu par cause de l'impossibilité d'obtenir pendant la Conférence des instructions suffisamment précises pour pouvoir prendre des décisions qui auraient une valeur pratique. L'examen des propositions mises en avant de différents côtés a chaque fois démontré, que pour pouvoir résoudre ces questions il faudrait dans la plupart des pays une étude préalable technique, minutieusement faite et appuyée par des épreuves.

En présence de cette difficulté la Commission a dû se borner à proposer à la Conférence d'émettre le voeu que les Gouvernements représentés veulent chacun de son côté mettre à l'étude le problème, spécialement en ce qui touche aux fusils et à l'artillerie de marine, afin de parvenir, si c'est possible, à une solution unanimement reconnue comme désirable qui pourrait être déterminée dans une Conférence ultérieure. Peut-être que l'échange de vues relaté dans les procès-verbaux des deux Sous-Commissions pourrait servir à ces études.

La proposition a été votée à l'unanimité par la Commission.

III. Un examen non moins consciencieux a été voué à la possibilité de fixer les effectifs des forces armées de terre et de mer ainsi que des budgets de guerre y afférents.

Des propositions ont été faites à cet effet par la Russie. La première de ces propositions tendait à fixer pour un terme de cinq ans les effectifs actuels des troupes entretenues dans les métropoles, c'est-à-dire sans comprendre les troupes coloniales, et à limiter pour le même terme les budgets militaires à leurs montants actuellement en vigueur.

Renvoyée à la première Sous-Commission cette proposition par le thème premier de la circulaire du comte MOU-RAVIEFF.

La pensée cependant qu'au point de vue général il importe d'arrêter les armements militaires et de recommander la solution de cette question à la plus sérieuse attention, s'est montrée vivante dans la Commission. Elle a adopté pour traduire cette pensée la résolution qui à cet effet lui a été proposée par le premier délégué de France en ces termes :

« La Commission estime que la limitation des charges militaires qui pèsent actuellement sur le monde est grandement désirable pour l'accroissement du bien-être matériel et moral de l'humanité. »

La Commission propose en conséquence à la Conférence d'adopter de son côté cette résolution.

IV. L'autre proposition russe se rapportait à la marine et tendait à faire accepter le principe de fixer pour un terme de 3 ans le montant des budgets de la marine, tout en laissant à chaque Gouvernement la liberté d'établir ce montant selon ses propres vues, mais avec l'engagement de ne pas augmenter pendant la période triennale la somme indiquée par lui-même.

Cette proposition s'est heurtée, comme l'autre, dans la Sous-Commission chargée de l'examiner, à des diffi-

position a été examinée et discutée d'abord par un Comité technique spécial qui, après un échange de vues approfondi, est arrivé, sans compter l'auteur de la proposition, unanimement aux conclusions suivantes :

1°. qu'il serait très difficile de fixer, même pour une période de cinq ans, le chiffre des effectifs sans régler en même temps d'autres éléments de la défense nationale.

2°. qu'il serait non moins difficile de régler par une convention internationale les éléments de cette défense, organisée dans chaque pays d'après des vues très différentes.

En conséquence le Comité regrette de ne pouvoir conseiller l'acceptation de la proposition ; mais la majorité de ses membres a estimé qu'une étude plus approfondie de la question par les Gouvernements eux-mêmes serait à désirer.

En présence de ce résultat la Commission n'a pu, à son regret, que se rendre compte de l'impossibilité d'arriver dans cette Conférence à une entente positive et immédiate sur la question des effectifs et des budgets militaires, mais avec le désir de voir les Gouvernements eux-mêmes reprendre l'étude des questions soulevées.

En outre de celles qui éventuellement se présenteraient lorsqu'il s'agirait de régler le mode d'exécution, une objection grave a été constatée pour les pays parlementaires par rapport au droit de vote budgétaire des assemblées législatives.

La Commission, quel que fut son désir de s'engager dans la voie ouverte par la proposition de la Russie, n'a pu que reconnaître qu'elle se trouvait en présence d'une question qu'elle ne pouvait résoudre et qui exigerait de la part des Gouvernements, appelés à se prononcer par des instructions, une enquête approfondie pour laquelle le temps nécessaire manquerait pendant cette Conférence.

La Commission s'est donc ralliée à l'idée de référer cette question ainsi que celle concernant les forces armées de terre aux Gouvernements, afin que ceux-ci, s'ils le jugent utile, puissent les mettre à l'étude en tenant compte des propositions qui ont été faites.

La Commission soumet cette idée à l'approbation de la Conférence.

(附錄書11)

一九〇四年十一月廿五日第一委員會第四會議紀錄

Première Commission

Projet de Rapport à la Conférence.

La première Commission a eu pour tâche d'examiner les quatre premières propositions de la circulaire de Son Exc. le Comte MOURAVIEFF. Ainsi qu'il était prévu elle s'est subdivisée pour étudier les questions posées concernant les engins de guerre en deux Sous-Commissions, l'une pour les armées, l'autre pour les flottes, tandis que la première proposition du Comte MOURAVIEFF, visant la limitation des armements, a été réservée à la Commission entière.

I. L'étude des deux Sous-Commissions n'a fait ressortir que trois points sur lesquels un engagement a pu être voté par la Commission :

1°. Celui de s'interdire de lancer des projectiles et des explosifs du haut de ballons ou par d'autres modes analogues nouveaux.

Cet engagement ne serait pris que pour une durée de cinq ans et a été voté à l'unanimité.

2°. Celui de s'interdire de l'emploi de projectiles qui ont pour but unique de répandre des gaz asphyxiants ou délétères.

des décisions qui auraient une valeur pratique. L'examen des propositions mises en avant de différents côtés a chaque fois démontré, que pour pouvoir résoudre ces questions il faudrait dans la plupart des pays une étude préalable technique, minutieusement faite et appuyée par des épreuves.

En présence de cette difficulté la Commission a dû se borner à proposer à la Conférence d'émettre le vœu que les Gouvernements représentés veuillent chacun de son côté mettre à l'étude le problème, spécialement en ce qui touche aux fusils et à l'artillerie de marine, afin de parvenir, si c'est possible, à une solution unanimement reconnue comme désirable qui pourrait être déterminée dans une Conférence ultérieure. Peut-être que l'échange de vues relaté dans les procès-verbaux des deux Sous-Commissions pourrait servir à ces études.

La proposition a été votée à l'unanimité par la Commission.

III. Un examen non moins consciencieux a été voué à la possibilité de fixer les effectifs des forces armées de terre et de mer ainsi que des budgets de guerre y afférents.

Des propositions ont été faites à cet effet par la Russie. La première de ces propositions tendait à fixer

Il a été à l'unanimité moins une voix.

3°. Celui de s'interdire de l'emploi de balles qui s'épanouissent ou s'aplatissent facilement dans le corps humain, telles que les balles à enveloppe dure dont l'enveloppe ne couvrirait pas entièrement le noyau ou serait pourvue d'incisions.

Il a été voté à l'unanimité moins deux voix contre et une abstention.

Quoique les deux premiers points ne paraissent pas avoir une très grande importance et que l'unanimité ait manqué aux voix sur les deux derniers, la Commission croit ne pas devoir négliger ces résultats et propose à la Conférence une Déclaration ou une Convention, portant un engagement sur ces trois points.

II. Vu l'importance de ces questions pour les budgets, les deux Sous-Commissions se sont longuement occupées de rechercher, s'il n'y aurait pas moyen de se mettre d'accord pour prévenir, ne fût-ce que pendant un certain temps, la mise en usage de nouveaux types et calibres de fusils et de canons; mais les propositions plus ou moins détaillées qui ont été discutées ont toutes rencontré des objections, en premier lieu par cause de l'impossibilité d'obtenir pendant la Conférence des instructions suffisamment précises pour pouvoir prendre

pour un terme de cinq ans les effectifs actuels des troupes entretenues dans les métropoles, c'est-à-dire sans comprendre les troupes coloniales, et à limiter pour le même terme les budgets militaires à leurs montants actuellement en vigueur.

Renvoyée à la première Sous-Commission cette proposition a été examinée et discutée d'abord par un Comité technique spécial composé de M. M. le Colonel DE GROSS DE SCHWARZHOFF, le Capitaine CROZIER, le Lieutenant-Colonel DE KHUEPACH, le Général MOUNIER, le Général Sir JOHN ARDAGH, le Général ZUCCARI, le Colonel COANDA, le Colonel GILINSKY et le Colonel BRÄNDSTRÖM, qui, après un échange de vues approfondi, est arrivé, sans compter M. le Colonel GILINSKY l'auteur de la proposition, unanimement aux conclusions suivantes :

1°. qu'il serait très difficile de fixer, même pour une période de cinq ans, le chiffre des effectifs sans régler en même temps d'autres éléments de la défense nationale.

2°. qu'il serait non moins difficile de régler par une convention internationale les éléments de cette défense, organisée dans chaque pays d'après des vues très différentes.

En conséquence le Comité regrette de ne pouvoir

conseiller l'acceptation de la proposition; mais la majorité de ses membres a estimé qu'une étude plus approfondie de la question par les Gouvernements eux-mêmes serait à désirer.

En présence de ce résultat la Commission n'a pu, à son regret, que se rendre compte de l'impossibilité d'arriver dans cette Conférence à une entente positive et immédiate sur la question des effectifs et des budgets militaires, mais avec le désir de voir les Gouvernements eux-mêmes reprendre l'étude des questions soulevées par le thème premier de la circulaire du comte MOURAVIEFF.

La pensée cependant qu'au point de vue général il importe d'arrêter les armements militaires et de recommander la solution de cette question à la plus sérieuse attention, s'est montrée vivante dans la Commission. En conséquence après avoir adopté à l'unanimité les propositions du Comité technique, la Commission a adopté également à l'unanimité, pour traduire cette pensée la résolution qui à cet effet lui a été proposée par le premier délégué de France en ces termes :

« La Commission estime que la limitation des charges militaires qui pèsent actuellement sur le monde est grandement désirable pour l'accroissement du bien-être matériel et moral de l'humanité »

cette question ainsi que celle concernant les forces armées de terre aux Gouvernements, afin que ceux-ci, s'ils le jugent utile, puissent les mettre à l'étude en tenant compte des propositions qui ont été faites.

La Commission soumet cette idée à l'approbation de la Conférence.

(空軍輔川)

國際法雜誌編輯部謹啟

Conférence Internationale

DE

LA PAIX.

Première Commission.

Rapport à la Conférence.

La première Commission a eu pour tâche d'examiner les quatre premières propositions de la circulaire de Son Exc. le Comte MOURAVIEFF. Ainsi qu'il était prévu elle s'est subdivisée pour étudier les questions posées concernant les engins de guerre en deux Sous-Commissions, l'une pour les armées, l'autre pour les flottes, tandis que la première proposition du Comte

La Commission propose en conséquence à la Conférence d'adopter de son côté cette résolution.

IV. L'autre proposition russe se rapportait à la marine et tendait à faire accepter le principe de fixer pour un terme de 3 ans le montant des budgets de la marine, tout en laissant à chaque Gouvernement la liberté d'établir ce montant selon ses progrès vus, mais avec l'engagement de ne pas augmenter pendant la période triennale la somme indiquée par lui-même.

Cette proposition s'est heurtée, comme l'autre, dans la Sous-Commission chargée de l'examiner, à des difficultés. En outre de celles qui éventuellement se présenteraient lorsqu'il s'agirait de régler le mode d'exécution, une objection grave a été constatée pour les pays parlementaires par rapport au droit de vote budgétaire des assemblées législatives.

La Commission, quel que fut son désir de s'engager dans la voie ouverte par la proposition de la Russie, n'a pu que reconnaître qu'elle se trouvait en présence d'une question qu'elle ne pouvait résoudre et qui exigerait de la part des Gouvernements, appelés à se prononcer par des instructions, une enquête approfondie pour laquelle le temps nécessaire manquerait pendant cette Conférence.

La Commission s'est donc ralliée à l'idée de référer MOURAVIEFF, visant la limitation des armements, à été réservée à la Commission entière.

I. L'étude des deux Sous-Commissions n'a fait ressortir que trois points sur lesquels un engagement a pu être voté par la Commission :

1°. Celui de s'interdire de lancer des projectiles et des explosifs du haut de ballons ou par d'autres modes analogues nouveaux.

Cet engagement ne serait pris que pour une durée de cinq ans et a été voté à l'unanimité.

2°. Celui de s'interdire de l'emploi de projectiles qui ont pour but unique de répandre des gaz asphyxiants ou délétères.

Il a été voté à l'unanimité moins une voix; mais de la majorité six voix ne se sont prononcées affirmativement que sous la réserve de l'unanimité.

3°. Celui de s'interdire de l'emploi de balles qui s'épanouissent ou s'aplatissent facilement dans le corps humain, telles que les balles à enveloppe dure dont l'enveloppe ne couvrirait pas entièrement le noyau ou serait pourvue d'incisions.

Il a été voté à l'unanimité moins deux voix contre et une abstention.

La Commission propose en conséquence à la Confé-

rence une Déclaration ou une Convention portant un engagement :

Sur le premier point, à l'unanimité ;

Sur le second point, par 17 voix (Allemagne, Autriche-Hongrie, Danemark, Espagne, France, Italie, Japon (sous condition d'unanimité), Monténégro, Pays-Bas, Portugal, Roumanie, Russie, Serbie, Siam, Suisse, Turquie, Bulgarie) contre deux (Etats-Unis d'Amérique et Grande-Bretagne) ;

Sur le troisième point, par 16 voix (Allemagne, Autriche-Hongrie, Danemark, Espagne, France, Italie, Japon, Monténégro, Pays-Bas, Roumanie, Russie, Serbie, Siam, Suisse, Turquie, Bulgarie) contre deux (Etats-Unis d'Amérique et Grande-Bretagne) et une abstention (Portugal).

II. Vu l'importance de ces questions pour les budgets, les deux Sous-Commissions se sont longuement occupées de rechercher, s'il n'y aurait pas moyen de se mettre d'accord pour prévenir, ne fut-ce que pendant un certain temps, la mise en usage de nouveaux types et calibres de fusils et de canons ; mais les propositions plus ou moins détaillées qui ont été discutées ont toutes rencontré des objections, en premier lieu par cause de

de terre et de mer ainsi que des budgets de guerre y afférents.

Des propositions ont été faites à cet effet par la Russie. La première de ces propositions tendait à fixer pour un terme de cinq ans les effectifs actuels des troupes entretenues dans les métropoles, c'est-à-dire sans comprendre les troupes coloniales, et à limiter pour le même terme les budgets militaires à leurs montants actuellement en vigueur.

Renvoyée à la première Sous-Commission cette proposition a été examinée et discutée d'abord par un Comité technique spécial composé de M. M. le Colonel DE GROSS DE SCHWARZHOFF, le Capitaine CROZIER, le Lieutenant-Colonel DE KHUEPACH, le Général Sir JOHN ARDAGH, le Général ZUCCARI, le Colonel COANDA, le Colonel GILINSKY et le Colonel BRÄNDSTRÖM, qui, après un échange de vues approfondi, est arrivée, à l'exception de M. le Colonel GILINSKY, unanimement aux conclusions suivantes :

1°. qu'il serait très difficile de fixer, même pour une période de cinq ans, le chiffre des effectifs sans régler en même temps d'autres éléments de la défense nationale.

l'impossibilité d'obtenir pendant la Conférence des instructions suffisamment précises pour pouvoir prendre des décisions qui auraient une valeur pratique. L'examen des propositions mises en avant de différents côtés a chaque fois démontré, que pour pouvoir résoudre ces questions il faudrait dans la plupart des pays une étude préalable technique, minutieusement faite et appuyée par des preuves.

En présence de cette difficulté la Commission a dû se borner à proposer à la Conférence d'émettre le vœu que les Gouvernements représentés veuillent chacun de son côté mettre à l'étude le problème, spécialement en ce qui touche aux fusils et à l'artillerie de marine, afin de parvenir, si c'est possible, à une solution unanimement reconnue désirable qui pourrait être déterminée dans une Conférence ultérieure. Peut-être que l'échange de vues relaté dans les procès-verbaux des deux Sous-Commissions pourrait servir à ces études.

La proposition a été votée à l'unanimité par la Commission.

III. Un examen non moins consciencieux a été voué à la possibilité de fixer les effectifs des forces armées

2°. qu'il serait non moins difficile de régler par une convention internationale les éléments de cette défense, organisée dans chaque pays d'après des vues très différentes.

En conséquence la Comité regrette de ne pouvoir conseiller l'acceptation de la proposition ; mais la majorité de ses membres a estimé qu'une étude plus approfondie de la question par les Gouvernements eux-mêmes serait à désirer.

En présence de ce résultat la Commission n'a pu, à son regret, que se rendre compte de l'impossibilité d'arriver dans cette Conférence à une entente positive et immédiate sur la question des effectifs et des budgets militaires, mais avec le désir de voir les Gouvernements eux-mêmes reprendre l'étude des questions soulevées par le thème premier de la circulaire du comte MOURAVIEFF.

La pensée cependant qu'au point de vue général il importe d'arrêter les armements militaires et de recommander la solution de cette question à la plus sérieuse attention, s'est montrée vivante dans la Commission. En conséquence après avoir adopté à l'unanimité les propositions du Comité technique, la Commission a

adopté également à l'unanimité, pour traduire cette pensée la résolution qui à cet effet lui a été proposée par le premier délégué de France en ces termes :

《 La Commission estime que la limitation des charges militaires qui pèsent actuellement sur le monde est grandement désirable pour l'accroissement du bien-être matériel et moral de l'humanité. 》

La Commission propose en conséquence à la Conférence d'adopter de son côté cette résolution.

VI. L'autre proposition russe se rapportait à la marine et tendait à faire accepter le principe de fixer pour un terme de 3 ans le montant des budgets de la marine, tout en laissant à chaque Gouvernement la liberté d'établir ce montant selon ses propres vues, mais avec l'engagement de ne pas augmenter pendant la période triennale la somme indiquée par lui-même.

Cette proposition s'est heurtée, comme l'autre, dans la Sous-Commission chargée de l'examiner, à des difficultés. En outre de celles qui éventuellement se présenteraient lorsqu'il s'agirait de régler le mode d'exécution, une objection grave a été constatée pour les pays parlementaires par rapport au droit de voie budgétaire des assemblées législatives.

La Commission, quel que fut son désir de s'engager dans la voie ouverte par la proposition de la Russie, n'a pu que reconnaître qu'elle se trouvait en présence d'une question qu'elle ne pouvait résoudre et qui exigerait de la part des Gouvernements, appelée à se prononcer par des instructions, une enquête approfondie pour laquelle le temps nécessaire manquerait pendant cette Conférence.

La Commission s'est donc ralliée à l'idée de référer cette question ainsi que celle concernant les forces armées de terre aux Gouvernements, afin que ceux-ci, s'ils le jugent utile, puissent les mettre à l'étude en tenant compte des propositions qui ont été faites.

La Commission soumet cette idée à l'approbation de la Conférence.



一四三 明治三十二年七月廿日

坂本海軍大佐ヨリ
山本海軍大臣宛

總會ニ提出スヘキ第一部委員会ノ報告書ニ関スル件
平和會議ニ関スル報告号外第五号

明治三十二年七月三十日

海牙府 海軍大佐 坂本俊篤

海軍大臣 山本権兵衛殿

總會ニ提出スヘキ第一部委員会ノ報告書

第一部委員会(自第一議題至第四議題)ハ六月三十日ヲ以テ委員總會ヲ終了シ而シテ本會議ニ提出スヘキ報告ハ平和會議ノ副長タル和蘭國全權「カルナベック」氏之ヲ担任スヘキ旨ヲ決議シタルノ結果本月十七日ヲ以テ該報告ヲ委員總會ヲ以テ議定スルノ手續ニ進メリ

該報告書ハ単ニ從來ノ委員會經過並ニ其議決ノ要領ヲ約括スルニ止マリ別ニ議論ヲ惹起スヘキノ性質ニ屬セスト雖モ報告委員ハ委員會ニ諮ラスシテ少シク專断ニ出テタルノ所為アルヲ以テ該報告書ニ於テ端ナク委員中ニ議論ヲ沸騰セシメテ遂ニ之ヲ再ヒ訂正シテ報告スルコトニ至レリ今其次第ヲ概記セントス

既ニ是レ迄提出シタル報告ノ通り第一部委員會ニ於テ兵器爆裂藥ニ関スルノ箇條ハ或ハ否決セラレ或ハ延期セラレ其僅ニ完膚ヲ以テ剩ス処ノモノハ

第一 将来五ヶ年間ヲ期シテ輕氣球若クハ之ニ類似スルノ方法ヲ以テ爆裂彈ヲ投下セサルコトヲ約ス

ノ一條タルニ過キス而シテ尙他ニハ一二ノ反対國アルニ係ラス大多數ヲ以テ是認セル問題ハ

第二 敵ヲ窒息セシムルヲ以テ唯一ノ目的トスル処ノ毒煙彈ノ使用ヲ禁止スル事

右米國ヲ除クノ外各國皆賛成(其内九ヶ國ハ明ニ全會一致ヲ條件トシテ賛成スルモノニシテ即チ我邦モ亦其一ニ屬ス)

第三 人体ニ中リテ容易ニ其形体ヲ変シ敵ノ傷痕ヲ慘酷ニシ無用ノ苦痛ヲ与フル処ノ小銃丸ノ使用ヲ禁スル事

英國米國ノ反対ト葡國ノ中立棄權ヲ除クノ外各國皆賛成ス(後ニ至リテハ葡國モ亦賛成ス)

報告委員ハ第二第三ヶ條ハ僅々少數ノ反対アルニ過キサレハ尙之ヲ全ク廢棄スルニ忍ヒスト為シ且ツ盟約ノ体裁如何ニ依テハ或ハ一二反対國ト雖モ交讓的ノ精神ヲ以テ或ハ前説ヲ翻シテ多數國ノ意見ニ同意シ易カラシムルニ効アルヘシト思惟シ之ヲ委員會ニ諮ラスシテ專断ス右三ヶ條ヲ國際間ニ於テ將來ハ彼ノ千八百六十八年聖彼得堡ノ宣言ノ体裁ニ依リテ三ヶ條共ニ將來五ヶ年ヲ期シテ

其使用ヲ禁止スルコトヲ約スルノ体裁ニ原按ヲ作り之カ
賛同ヲ委員總會ニ求メタルモノナリ

癸ニ林全權ヨリ右三ヶ條ノ件ニ対シテ本邦政府ノ訓令ヲ
請ハレタルモノハ全ク本按ノ提起セラレタルカ為メナリ
而シテ其原按ニ依レハ此ノ三ヶ條ノ宣言ニ加盟スル国ハ之
レト同時ニ自然ニ千八百六十八年聖彼得堡ノ宣言ニ加盟ス
ルノ効力アル可キヲ意味スルモノナリ

委員總會(七月十七日)ニ於テ多数ノ委員ハ先ツ報告委員
カ專断ヲ以テ斯ル原按ヲ發意スルニ於テ快カラス随テ数多
ノ難詰ノ声ハ処々ニ湧起セリ

曰 本三ヶ條ノ宣言ニ加盟スルト同時ニ千八百六十八年聖
彼得堡ノ宣言ニ加盟ノ効ヲ生スヘシトハ甚タ謂レナキコ
トニシテ吾人ノ此処ニ在ル所以ノモノハ本問題ヲ議スル
ノ権限ニ止マルヘキモノニシテ聖彼得堡ノ宣言如何ノ如
キニ至テハ全ク権限外ノ事ニ屬ス(マハン大佐)

我國並ニ米國ノ如ク未ク該宣言ニ加盟セサルモノハ右ノ
場合ニ屬スルモノトス

曰 聖彼得堡ノ宣言ノ如キハ皆年期ヲ有セサル処ノ禁止ノ
條項ニ屬セリ然ルヲ今此年期ヲ有スル(五ヶ年)三ヶ條
ヲ以テ之ヲ混同スヘカラス(露國委員)

トニ対シテ貴下ヲ除クノ外ハ凡テ各国賛成ナレハ貴國一國
ノ為メ全会一致ヲ欠クノ件ハ甚タ遺憾ニ堪ヘス更ニ貴下ノ
再思ヲ促スコトヲ得ヘキカト大佐昂然トシテ起テ答テ曰ク
予ノ主張スル処ノモノハ原則問題ニ屬セリ自己ノ所信ハ多
数ノ前ニ屈撓ヲ容ルサス米國全權ノ資格ヲ以テ其同意シ能
ハサルコトヲ断言スト固ク前説ヲ執テ動カズ

其他報告ノ文体ノ枝葉ニ就テ討論議決スル処アリテ教會
ス

斯テ第一委員会ノ報告ハ二回ノ訂正ヲ經テ僅カニ完成セル
ヲ以テ七月二十一日ヲ以テ右報告ニ対シ本會議ヲ開始スル
ニ至レリ

平和會議以來二ヶ月余議場ニ新聞紙上ニ到ル処舊々トシテ
他ノ注意ヲ喚起セル処ノ英國ノ「ダムダム」丸ハ議會掉尾
ノ偉觀トシテ英米連合對露ノ議論ハ端ナク此ノ最終ノ本會
議々場ニ火花ヲ散スニ至レリ

由來「ダムダム」丸ハ此會議ノ花ニシテ平々坦々無味淡白
ノ議場ヲシテ時ニ活氣ヲ帶ハシムルモノハ「ダムダム」丸
問題ナリシカ癡ニハ世界各邦大多數ノ排斥ノ下ニ獨リ米國
ト両々手ヲ携ヘテ屈辱セル英國ノ「ダムダム」丸ハ今日一
期ノ思出ニ捲土重來ノ勇氣ヲ鼓シテ狂瀾ヲ既倒ニ支ヘント

曰 第三條ノ如キ禁止事件ニ年期ヲ設クル不都合ナリ(仏
國全權)

曰 委員会ノ報告ナルモノハ宜シク其有体ヲ報告スルニ止
マルヘキナリ報告委員ニ於テ委員会ニ於テ認識セラレサ
ルノ件ヲ猥リニ改竄シ若クハ創意ノ原按ヲ提起スルハ大
ニ不可ナリ

其最後ノ批准ハ多数委員ノ認ムル処トナリテ更ニ從來委員
會ニ於テ有体ノ儘ヲ報告スルコトニ改訂スヘキコトヲ議決
ス

其他大砲小銃ノ件ハ將來各国政府ニ於テ熟考ヲ遂ケ可キ件
及ヒ露國ノ提出セル海陸軍備制限按ニ関スル委員会ノ経過
並ニ軍備軽減ニ関スル將來ノ希望タル決議案ノ件ノ如キハ
凡テ從來ノ委員会ニ於ケル経過ヲ概括セルモノニ過キサレ
ハ特別ノ議論モナク凡テ原按ヲ可決シ議長「スタイル」氏
ノ報告委員ニ對スルノ謝辞アリテ散會ヲ告ケタリ

七月二十日ニ至リテ再ヒ訂正第一委員報告會ヲ開ク

議長「カルナベック」(氏ハ報告委員ナリシカ第一委員
長「ベルナード」不在ノ故ヲ以テ代テ議長ヲ務ム故ニ一人
ニシテ議長ト報告委員ノ資格ヲ兼帶スルモノナレハ頗ル異
觀ヲ呈セリ)先ツ米國委員「マハン」大佐ニ向テ毒煙彈ノコ

試ミタル英米連合ノ態度ハ最モ奇觀ヲ呈セリ

蓋シ禁制條文ノ發按者タル露國モ亦之ヲ反撥セントスル処
ノ英國モ各々齊シク其僻スル処アリテ兩ナカラ議長ニ問然
ナキ能ハス如何トナレハ露ノ目指ス処ノモノハ英ノ「ダム
ダム」丸ニ在ルヲ以テ其禁止ノ條文ハ之カ禁制ヲ宣言スル
ニ効アルヲ求ムルノ外ハ他ニ視ル処ナク又英ハ其條文ノ禁
制ノ拘束ヲ免レテ「ダムダム」丸ノ使用ノ自由ヲ得ルノ外
又他ニ異議アルコトナシ是兩國共ニ其見識鄙醜ニシテ未タ
仁愛ノ高義ヲ論スルニ足ラス獨リ此間ニ立テ昂々然トシテ
露國委員ノ起草ニ係ル原按ノ無稽ナル所以ヲ罵リ暗ニ多数
委員力之ニ附和雷同セル不見識ヲ嘲笑セントスルノ概アリ
(其本心ハ之ヲ以テ英國ノ「ダムダム」丸ヲ曲庇セントシ
タルヤ否ハ之ヲ問ハス)彼ノ議論ハ正々堂々確カニ他ノ説
ニ一頭地ヲ抽クノ価値アリシハ之ヲ否ム能ハサルモノ之レ
有り其概ニ曰ク

吾人ノ眼前ニハ「ダムダム」丸ノ有ルコト無シ仁愛ア
ル耳試ミニ露按ヲ把テ視ルニ曰ク

人体中ニ在テ容易ニ膨張シ若クハ平扁スルノ銃丸即チ硬
質ナル外被ヲ以テ其軸質ヲ全ク包藏セサルモノ若クハ其
表面ニ欠陥ヲ設ケタルモノヲ使用スルコトヲ禁スト

如斯條文ハ果シテ吾人ニ満足ヲ与ヘ得ヘキモ(ノ)ト云フヲ得ヘキカ是レ吾人ノ目的トスル所ノ敵ヲシテ必要以上ノ苦痛ヲ蒙ラシメスト云ヘル仁愛主義ニ於テ幾許ノ意義ヲ有スヘキヤ吾人ハ遂ニ其之レ有ル所以ヲ認ムルニ苦シムモノトス如何トナレハ本條文ノ如キハ単ニ其形容ニ於テノミ之ヲ顧ミ(所謂英國ノ「ダムダム」ヲ禁制スルニ適スルコトノミヲ顧ミテ)其精神ヲ問ハサルモノト云フヘケレハナリ知ラス吾人ノ前途ニハ本條文ニ適合スル銃丸ニシテ却テ敵ニ苦痛ヲ与ヘサル処ノ銃丸ヲ製出シ得ルナキコトヲ保セス或ハ本條文ノ拘束ヲ離レテ却テ之レヨリ惨害甚シキ銃丸ヲ製出スルモノ有ルコトナキヲ保セサルニ非スヤ是レ條文ノ精神ニ於テ吾人ノ具備セシメント欲スル処ノモノニ於テ欠如タル所以ニ非スヤト即チ原按ノ皮肉ニ入テ一々其肺肝ヲ刺スニ似タリ而シテ其終リニ一ノ禁制條文修正按ヲ提出シテ曰ク

破裂質ニシテ無益ノ惨苦ヲ与ヘ並ニ一般ニ敵ヲシテ直ニ戦闘作用ヲ失ハシムルノ程度ヲ越ユル処ノ銃丸ノ使用ヲ禁ス

英國ノ全権ハ直ニ之ニ向テ賛成ヲ与ヘタリ是レ他ナシ此條文ヲ以テスルトキハ英國ノ「ダムダム」丸ハ直ニ其禁制ノ宣告ヲ免ルヘキヲ以テナリ是多数委員ノ最モ忍ブ能ハサル論拠アルヲ以テ之ヲ防禦セントスルハ露國ニ執リテ最モ苦戰タルヘキハ明カナルヲ以テナリ

露ノ駁論ノ要点ニ曰ク原按ノ防禦セントスル処ノモノハ將來ノモノニ對スルニ非スシテ現在ノモノニアリ(現在ノ「ダムダム」丸ヲ指スナリ)

仁愛主義ニ依テ慘酷ノ武器ノ使用ヲ禁止セント欲セハ現在ノミナラス將來ニ向テ其効ヲ及ホサシムヘキハ勿論ノコトニ屬ス聖彼得堡ノ宣言ノ如キ皆此精神ニ依ラサルハナシ然ルニ本按ノミ独リ其効力ノ範圍ヲ現在ノモノニ限りテ將來ヲ慮ラスト云フハ無稽ノ甚シキモノト謂サル可ラス

又曰ク米國ノ提議ノ如キ之ヲ委員會ノ当初ニ提起セラレテハ委員ノ考究ニ上ルヘキハ勿論ナレトモ既ニ原按ナルモノハ此二ヶ月以來幾回ノ委員会及ヒ特別委員会ノ考究鍛鍊ノ余ニ成ル処ノモノニシテ今ヤ此本會議ノ案上ニ横ハルモノアルニ係ラス今又新タニ提起セラル、モノアリト雖モ時期既ニ去リタルモノト云フヘシ故ニ本會議ハ宜シク今日迄推敵シ鍛鍊シ来リタル処ノ原按ニ信ヲ置キ直ニ之ヲ是認セラレンコトヲ希望ス

露國委員ノ抗弁ニ拠ル処ノモノハ単ニ時期既ニ去レリト

モノニシテ米國委員ノ提議ノ如何ニ露國提議ノ原按ニ比スレハ其形容ニ於テ其精神ニ於テ優ニ一頭地ヲ抽キンスルモノタルニ係ラス却テ多数委員ノ賛成ヲ得ル能ハサリシハ真ニ惜ムヘキモノニシテ若シ米國ニシテ真ニ英國ヲ庇蔭スルノ態度ヲ避ケ彼ノ修正案ニ加フルニ尙且ツ英國ノ「ダムダム」丸ヲ制禁スルニ効アル処ノ一句ヲ之ニ挿入セシメナハ即チ單ニ破裂ノ文字ニ容易ニ人体中ニ入ツテ膨脹若クハ平扁シ且ツ其表面ニ円滑ヲ欠ク云々ノ一句ヲ挿入セハ是ソ完全無缺ナル名按ナリシナランニ惜哉彼ノ底心ニハ正々堂々露ノ提案ヲ排斥スルト同時ニ英國ノ「ダムダム」丸ヲ庇蔭セントセルノ態度亦掩フ能ハサルモノアリシナリ

故ニ多数ノ委員ハ米國按ノ露國按ニ優ルコトヲ知ルモノト雖トモ苟モ之ヲ許容スルトキハ英國「ダムダム」丸ノ使用ヲ許容スルト同一ノ効アルヘキヲ以テ皆露國ノ原按ヲ賛成セントスルハ又疑ヲ容レス此際露國委員ノ其自國ノ原按ヲ維持シテ米國ノ提按ニ反対セル抗弁ハ頗ル努メタリト雖トモ其論拠ハ未タ米國ノ提按ヲ駁撃スルニ足ラス却テ其弱點ヲ顯露シテ將來他ノ議論ヲ容レシムルノ余地ヲ剩シタルヤノ感アリ此ノ道理一偏ヨリ見ルトキハ米國ノ議論遙カニ

云ヒ今日迄推敵鍛鍊ヲ積ミタル原按ニ信ヲ置カレト云フニ過キスシテ按其物ノ是非優劣ヲ以テ論セサリシハ抗弁トシテ甚タ薄弱タルヲ免レサルモノト云フヘシ是按ノ是非優劣ヨリ論スルトキハ露ノ原按ノ米ノ修正按ニ及ハサル処ハ彼モ亦之ヲ知ルヘケレハ強テ此点ニ於テ争フコトナク單ニ其目的タル本會議ノ原按ヲ是認シテ之ヲ通過セシメンコトヲ是レ努メタルハ時ニ取りテノ便法タルニ過キサルナリ

此時多数ノ委員中ノ腦裡ニハ敢テ露米兩按ノ是非優劣ヲ穿索スルコトヲ望マス之ヲ以テ單ニ英米連合對露ノ對抗議論ト認メタルニ過キサルヘク只恐ル処ノモノハ如斯議論ノ分歧ヨリシテ再ヒ特別委員ヲ設ケテ之カ是非優劣ヲ審査セシムヘシナト云ヘル議論ヲシテ今日此最終ノ会合ナルコトヲ豫期セル処ノ議場ニ顯出センコト是ナリシナラン果然米國全権「ホワイト」氏ハ起テ如斯彼我議論ノ岐ル、モノニ對シテハ宜シク特別委員ノ審査ニ附託シテ露米兩按ノ優劣ヲ調査セシムヘシト主張セル其要ニ曰ク

予ハ技術ノ点ニ於テハ全ク門外者タルコトハ論ヲ待タスト雖モ銃丸ノ使用ニ関シテ米國政府ハ其既往現在將來共ニ他

ノ文明諸國ニ於テ使用セラル、処ノ銃丸ヨリ以上ノ慘毒ナルモノ[?]ヲ使用スルコトアルヘカラスルハ勿論ノコトニ屬ス独り恐ル露國原按ノ如キハ文句ノ形容ノ末ニ拘々然トシテ却テ其禁止スヘキ精神ヲ含蓄セシムルコトニ於テ等閑ナルコト是ナリト囊キニ米國専門委員大尉「クロヂエ」氏ノ説ヲ敷演シテ再ヒ特別審査委員ニ附托センコトヲ以テス

爰ニ於テ之ヲ滿場ノ票決ニ附シタルニ之ヲ可トスルモノハ米國、英國、希臘、葡國、セルビア國ノ五ヶ國ニシテ其他ハ皆之ヲ不可トスルモノニシテ議論ノ大勢ハ元ヨリ勳カス可クモアラサリシナリ

米國委員「マハン」大佐ハ起テ曰ク本會議ニ於テ全会一致ヲ以テ成立スル処ノモノハ既往ニ之レ無ク將來トテモ亦有り得ヘシト思ハレサル夫ノ輕氣球ヨリ投彈スルカ如キ夢想的ノ箇條ノミニ於テ之ヲ得ルニ過キスト

是暗ニ露國委員ノ現存ノ慘毒ナル兵器ニ向テ禁制ヲ施サ、ル可カラスト云ヘル議論ヲ駁スルニ似タリ兎ニ角大佐ノ言辭ハ別ニ重要ヲ認メスト雖モ之ニ對セル露國委員「ジリンスキー」大佐ノ答辭ハ將來ニ涉リテ影響アルヘキモノナレハ茲ニ掲記ス

反スルモノトナシ修正按ハ原按ヲ決スルノ前ニ於テ宜シク之ヲ票決ニ附セサル可ラスト駁論セリ

爰ニ於テ議論紛々殆ント底止スル処ナキニ至ラントス此日ハ本會議ナルヲ以テ本會議長露國全權「スタール」氏議場ノ整理ニ任セサル可ラス然ルニ氏ハ年齒既ニ古稀ヲ過キ今ヤ視聽官共ニ衰弱且ツ平常議事ニ慣習セサルヲ以テ頗ル困難ノ色アリ僅カニ左右副議長書記官ノ補佐ニ凭ツテ僅カニ其任ヲ全フスルコトヲ得タルノ趣キ之レ有り

即チ紛議ハ之ヲ票決ニ附スルコト、ナリ先ツ米國ノ按ヲ先決スヘキヤ否ヤヲ票決セシニ之ヲ可トセルモノハ

米國、英國、希臘、葡國、清國、白耳義國、暹國、セルビヤ國次ニ報告ノ原按（露國按）ニ就テ票決セシニ英國米國ノ反對ト葡國ノ中立棄權ヲ除キ外皆之ヲ可決セリ

故ニ米國ノ修正按ハ之ヲ票決ニ附スルノ要ナキヲ以テ其儘ニシテ息ミタリ

爰ニ於テ英米連合シテ全世界ノ各邦ニ對抗シ捲土重来ノ意氣アリシ「ダムダム」丸ノ問題ハ如斯シテ終了セリ

然レトモ「ダムダム」丸ノ是非問題ハ未タ之ヲ以テ決シタルニ非ス英國タルモノ宜シク世界各国ノ非認ニ向テ弁解ノ辭ナカルヘカラス（此点ニ於テハ米國ニ對シテモ亦然リ）

露國委員ハ之ニ答ヘテ曰ク否必スシモ然ラサルノ證據トシテ目下英國ニ於テハ空中投彈法ノ研究ノ目的ヲ以テ輕氣球ノ使用ヲ考究中ニ非スヤト如斯議場ニ於ケル露國委員ノ言明ニ對シテハ英露兩國政府ハ応サニ其責ニ任セサル可ラサルノ言ニシテ若シ英國ニシテ此明言ヲ默過スル時ハ國際會議ニ於テ全会一致ヲ以テ非認セル行為ヲ実行セルモノニシテ英國タルモノ世界列國ニ對シテ其信用ノ輕重ヲ問ハントスル処ノ問題ニ屬セリ

（頃日英國「アルデシヨット」ニ於テ此種ノ實驗アルコトハ既ニ新聞紙上ノ物議トナリタルモノヲ散見ス）

斯テ報告委員「カルナベック」氏並ニ露國委員「ラファルビッチ」氏ハ議場ニ向テ先ツ露國按即チ報告ノ原按ニ就テ票決センコトヲ請求ス

此事件ハ端ナク再ヒ議場ノ議論ヲ湧起セリ英國委員將官「アルダ」氏ハ起テ議事ノ通則ニ違反スルモノタルコトヲ抗議ス英國全權「パンズホート」氏モ亦之ニ和シテ如斯違反ハ本會議ノ威信ニ鼎重ノ繫ル処ナリトテ之ヲ痛論ス

米國委員「セスロー」氏（法學者）モ亦起テ議事通則ニ違反自國ノ人民幾多ノ疑惑ニ向テ亦弁明スル処ナカル可ラス

果然此日英國全權ハ會議ニ向テ明言シテ曰ク「ダムダム」丸ノ斯ノ會議ニ於テ多數委員ノ否認ニ對シテハ本國政府ヨリ弁明書ヲ提出スヘキ管ナレトモ遺憾ナカラ今日ノ會期迄落手スルコトヲ得サリシヲ以テ追テ之ヲ他ノ報告書類ト共ニ諸君ノ手許ニ送附スルコト、ナスヘシト弁明書ナルモノハ必ス言ハン英國ノ「ダムダム」丸ナルモノニ對シテハ諸君ノ視ル処ノモノ尺ク誤レリ「ダムダム」丸ナルモノハ諸君ノ言ハル、如キ慘毒ナル銃丸ニハ實際之レナシ彼ノ役ノ實驗ハ斯ノ如シ此ノ時ノ試驗ノ成績ハ斯ノ如シトテ充分ニ其證據ヲ挙げタル末ニ於テ斯ノ如キ理由ナルヲ以テ英國ノ「ダムダム」丸ハ諸君ノ想像セラル、如キモノニ非ス幸ニ諸君此意ヲ諒セラレンコトヲ請フト云ヘル如キ說明話ヲ以テ此事件ヲ終了セシメ而シテ其質問追究ヲ避ケンカ為メニ特ニ言ヲ遲到ニ藉リテ之ヲ本會議ニ披露セサルノ狡猾手段ニ出タルナランカ果シテ然ラハ英國タルモノ亦究ンタリト云フヘク是レ決シテ借ヲ与國ニ全フスルノ所以ニアラス本問題ハ將來ニ涉リテ頗ル注目スヘキ英國ノ威信問題ニ屬セリ

會議ノ終期

第二委員會ハ他ノ委員會ニ先チテ既ニ本會議ヲ終了シ第一委員會モ亦去ル二十一日ヲ以テ本會議ヲ了シタルハ剩ス処ノモノハ只第三委員會ノミナルニ至レリ是レ「バルカン」半島ノ群小国中(セルビヤ国ローマニヤ国並ニ希国)カ仲裁法ノ條款中ニ慷慨ヲラサルモノアルヲ口実トシテ種々ノ苦情ヲ提供セルノ故ヲ以テ其協諾ヲ得ルニ於テ時日ヲ費セルヲ以テナリ

彼国輩ノ苦情トナス処ノモノハ其第三章(國際審査委員)第九條ヨリ第十三條ニ渉ルモノ並ニ國際仲裁法中第二十七條ニシテ彼輩ノ口実トスル処ノモノ前掲諸條ノ見ノ如キハ会々雄国カ本條ヲ挾ンテ群小国ニ干渉ヲ与フルノ具タルモノナリトノ趣旨ヲ以テ之ニ不服ヲ唱フルモノニシテ所謂齊楚ノ間ニ挾マル処ノ彼弱小国ノ心情トシテハ諒スヘキモノナントナサス然レトモ天下ノ大義公道ヲ以テ金冠トナス処ノ本按ニ対シテハ(鍍金ニモセヨ)論鋒頗ル薄弱ニシテ三國合從中「セルビヤ」先ツ降り希国之ニ次キ孤城落日ノ「ローマニヤ」国モ僅ニ些少ノ交讓ヲ以テ敗余ノ名譽ヲ擲ヘ得テ本按ヲ承諾スルコト、ナレリ

第三委員會ノ審査委員ハ屢々前記ノ群小国ト交渉ノ余協諾

第三 千八百六十四年八月二十二日「セネブ」條約ノ原則ヲ海戰ニ適用スルノ條約

宣言ト為スヘキモノ

- 第一 輕氣球上ヨリ若クハ之ニ類スル方法ニ依テ空中ヨリ爆彈若クハ爆發物ヲ投下スルコトヲ禁スル事
- 第二 殊更ニ毒煙ヲ撒シテ人ヲ窒息セシムルコトヲ以テ害敵法ノ目的トスル処ノ彈丸ノ使用ヲ禁スル事
- 第三 人体ニ中リテ容易ニ膨張シ若クハ平扁スル処ノ銃丸ノ使用ヲ禁スル事

以上ハ今回會議ノ結果トシテ右條約並ニ宣言ニ加盟スル処ノ條約國ハ相互ノ間ニ守約ノ義務ヲ生スヘキモノトス之ニ異ナリテ左ノ決議按並ニ希望按ハ単ニ會議ノ結果トシテ其存在ノ事實ヲ見認スルニ過キス

決議

會議ハ現今坤輿到ル処負担ノ重キヲ感スル処ノ軍費ハ人生ノ有形若クハ無形上ノ幸福ヲ増進セシムルコトニ向テ大ニ制限スルノ要アルコトヲ認ム(全会一致ヲ以テ通過ス)

右ノ外會議ハ將來ニ向テ左ノ希望ヲ揚言ス

其一 會議ハ瑞西國政府カ「セネブ」條約ノ改正ニ関シテ先ツ斡旋セラル、処アルニ顧ミテ近々該條約ノ改正ヲ目

ヲ得テ七月二十日ニ至リ本會議ヲ開キ報告委員(Descamp)公法學者ニシテ年來仲裁法ニ熱心ナルモノ)ヨリ成按ノ報告アリ滿場異議ナク之ヲ是認ス

斯テ此日ヲ以テ各部委員會ノ事業ヲ終了シタルヲ以テ是ヨリ會議終末議定書調製ノ作業ニ進行ス

終末議定書ノ調製

終末議定書ノ調製事業ニ関シテハ既ニ委員ノ組織アリ伊国全權「ニグラ」伯(後「ニグラ」伯辭退シタレバ「アセ」氏之ニ代ル)之カ委員長トナリテ評議ヲ重ネタル結果七月二十五日本會議ニ於テ報告委員「ルノー」氏ヨリ議定書ノ体裁並ニ之ニ依テ生スルノ國際條約書及宣言書ノ体裁並ニ調印及ヒ効果等ニ就テ説明スル処アリ各員異議ナク之ヲ可決ス

即チ終末議定書トシテ各国全權ノ手摺ヲ待チ次テ各国政府ノ同意並ニ批准ヲ待ツテ國際條約若クハ宣言ト為ルヘキモノハ左記ノ條項ト為ス

國際條約ト為スヘキモノ

- 第一 國際的紛争ヲ平和的手段ヲ以テ始末スルノ條約
- 第二 陸上ニ於ケル戰律及慣例ニ係ル條約

的トスル処ノ特別ノ國際會議ヲ開始セラレンコトヲ希望ス(右全会一致ヲ以テ通過ス)

其二 會議ハ最近ノ國際會議ノ議題(陸戰條規ノ)ニハ中立國ノ權利並ニ義務ニ係ル件ヲ規定スル問題ヲ登スコトヲ希望ス

其三 會議ハ小銃並ニ海軍ノ砲煩問題ニ関シテハ曾テ會議ニ於テ討究ニ登リタルカ如ク各国政府ニ於テ考究ノ末其新式ノ使用若クハ口徑ニ係ル問題ヲシテ各国協定ノ域ニ至ラシメンコトヲ希望ス

其四 會議ハ各国政府ニ斯會議ニ提起セラレタル処ノ按ニ顧ミテ(露國ノ提按ヲ云フ)海陸軍備並ニ其經費ヲ制限シ得ヘキヤ否ヤヲ考究センコトヲ希望ス

其五 會議ハ海戰ノ場合ニ於テ交戰國ノ人民ノ所有ニ係ル海上ノ私有財産ヲ互ニ侵スコト莫ルヘキコトヲ宣言セントスル処ノ提議ヲ將來ノ會議ノ議題ニ登サンコトヲ希望ス

其六 會議ハ海軍ヲ以テ港灣市府村落ヲ砲撃スル問題ヲ規定セントスル処ノ提議ヲ將來ノ會議ノ議題ニ登サンコトヲ希望ス

右希望按六ヶ條ノ内其二ハ瑞西國其三、四、五、六ハ英國

各々其希望ヨリ分立スヘシトノ宣言アルノ外ハ全会一致ヲ以テ通過ス

條約按、宣言按、決議按、希望按ニ対スル
我意見

條約其一（仲裁法ノ件）

通扁任意のヲ以テ其精神トナスヲ以テ會テ強制的ノ拘束力ナク所謂無効無毒ナルヲ以テ加盟スルモ事ニ害ナカルヘキモノトナス

條約其二（陸戰條規）

多年ノ經驗ニ鑑ミテ軍事的着眼ト人道ノ博愛ト相待テ完璧ヲ為スモノナルヲ以テ加盟スルコトヲ妨ケス

條約其三（ゼネブ條約ヲ海戰ニ適用スル條項）

條約其二ニ対スルノ意ニ同シ

宣言其一（空中爆彈ノ投下）

加盟ノ條件タル五ヶ年ノ後ハイザ知ラス現今ニ在リテハ未タ小説界ノ範圍ヲ脱セサルモノニシテ加盟スルモ事ニ害ナシ

宣言其二（毒炮彈ノ使用）

宣言其一ニ比シテ更ニ空想界ナルモノ（空中爆彈ニ関シテハ英國ニテハ既ニ經驗ニ着手スル風説アリ）

書及宣言書ノ体裁ニ就テ議定スル所アリ越ヘテ七月二十九日ニハ各國全權ノ終末議定書、條約書、宣言書ノ調印ヲ見ルニ至レリ各國全權ハ其條約書若クハ宣言書ニ調印スルトセザルトニ関セス皆齊シク終末議定書ニハ署名調印スベキモノトス是レ終末議定書ナルモノハ單ニ斯會議ノ事實ヲ見認スルニ止マリテ其條約若クハ宣言書ニ署名調印スルノ件トハ独立ノコトニ屬スルヲ以テナリ而シテ其條約書、若クハ宣言書ニ調印スルハ此日直ニ之ヲ為スト或ハ来十二月末日ヲ期シテ之ヲ為ストハ一ニ各國全權ノ撰ブ処ニ適従スベキモノトス是各國全權ノ權限並ニ本國ノ訓令ニ差等アリテ直ニ調印ヲ為ス能ハサルノ事情アルモノニ対シ若クハ遼遠ノ地方ニ在ル処ノ代臣ニ至リテハ其議定書ノ全部ヲ本國政府ニ致シテ親シク其審査ヲ經テ然ル後諾否ノ反答ヲ得ルノ不便ナルモノニ対シ（我邦ノ類）テ其便宜ヲ得セシメ可及の事ヲ慎重ニ為スコトヲ得セシムルノ法ニ依ルモノトス故ニ此日條約若ハ宣言書ニ調印スルモノハ各國齊シカラス歐洲列強中露仏ヲ除クノ外ハ概ネ直ニ調印スルコトナク之ニ反シテ其第二流若クハ群小國ニ至リテハ大概調印ヲ了セルノ趣アリ

閉 会

宣言其三（容易ニ膨張スル小銃丸）

加盟國間ニ於テ其使用ヲ禁止スルニ於テハ之ニ加盟スルヲ妨ケス

以上三宣言ハ彼ノ千八百六十八年聖彼得堡ノ宣言ノ響ニ基キ人道ノ大旨ニ依リ加盟國間ニ於テ慘酷ナル野蛮の戰爭ヲ為スコトヲ避クルト云ヘル趣旨ニ外ナラス故ニ宣言ニモ明記セルカ如ク其拘束力ハ單ニ其加盟國間ニ止マルヘク其非加盟國並ニ加盟國ニ非加盟國ノ同盟アル場合ニ在リテハ我ノ之ヲ使用シ得ヘキハ勿論ナルヲ以テ苟モ我ニ於テ此等ノ場合ニ対シテ此種ノ禁制品ヲ用意スルヲ必要トスル場合ニ於テハ假令ヒ我之ニ加盟スルトモ之ヲ用意シ場合ニ依リテ之ヲ使用スルヲ妨ケス（非加盟國等ニ対シテ）

故ニ以上三宣言ハ我ノ之ニ加盟スルモ決シテ事ニ害ナキモノトス之ヲ要スルニ前掲三條約並ニ三宣言ハ我ノ之ニ加盟スルモ事ニ害ナキ尤モ第一ノ條約ノ事ニ関シテハ小官所掌以外ノ事ニ屬スルヲ以テ是非ノ意見ヲ申出ツヘキ限りニ無之ハ論ナシト雖モ事ヲ叙スルノ順序トシテ鄙見ヲ附記セルニ過キス候

終末議定書、條約書、宣言書ノ調印

七月二十五日及二十七日ノ本會議ニ於テ終末議定書、條約

同二十九日午後三時閉會式ヲ行フ議長「スタイル」ハ會議ノ經過並ニ其成績ニ就テ述フル処アリ又各委員ノ勞ヲ多トシ且曰ク平和ノ種子ハ既ニ今回ヲ以テ蒔カレタリ吾人ハ其收穫ノ日アルコトヲ待ツベキ也ト独國全權「マンスター」伯ハ委員中年長ノ資格ヲ以テ答辭ヲ述ベ其他當國全權「カルナベック」外務大臣「ボーホル」氏仏國委員「デスツール」男ノ演説アリテ閉會ヲ告ケ後各委員酒盃ヲ挙ケテ談笑嚙々和氣洋洋ノ間ニ互ニ分袂ノ辭ヲ述ベテ散會セリ

林公使以下本邦委員ハ明日ヲ以テ此地ヲ引キ揚ケ小官ハ仏國巴里ヲ經テ英國ニ渡リ来月中旬過ノ便船ニテ米國ニ航シ兼テ希望ニ有之候彼國ノ海軍大學ヲ一覽シ且教師傭聘ノ御内議ニ係ル模様ニ就テ探聞ヲ遂ケ度存候此地ニ於テ「マハン」大佐トハ常ニ往來親數致候ニ付彼ノ意向ヲ尋ネ候処連モ本邦ニ渡航ノ相談ハ見込無之尙米國ニ渡航ノ上ハ相見スベキヲ約シテ相分レ申候

来九月十一日「バンクーバー」發ノ汽船ニテ帰朝可仕見込ニ有之候

會議ノ終

會議ノ終末ニ際シテ欧米各國駐在ノ公使館附將校ニ左ノ如ク寄書仕置候

謹啓本地ニ於ケル国際会議モ昨日ヲ以テ閉会ヲ告ケ申候右
會議ニ於テハ種々御配慮ヲ勞シ奉多謝候會議ノ模様等ハ疾
ニ委細新聞紙上ニテ御承知相成且其効果如何ノ如キモ世間
既ニ定論有之候ニ付別ニ贅スルヲ要セスト存候只其終末ノ
結果ト将来ニ渉ル希望ニ関シテ左ノ概要ヲ御報道申進候
會議ノ結果今回国際條約ト相成可申モノハ左ノ三ヶ條ニ
有之候

第一 国際的紛争ヲ平和的手段ヲ以テ始末スルノ條約

第二 陸上ニ於ケル戦律及慣例ニ係ル條約

第三 千八百六十四年八月二十二日「ゼネブ」條約ノ原則
ヲ海戦ニ適用スルノ條約

国際宣言ト為スベキモノハ左ノ三ヶ條ト為ス

第一 輕気球上ヨリ若クハ之ニ類スルノ方法ニ依テ空中ヨ
リ爆弾若ハ爆発物ヲ投下スルコトヲ禁スル事

第二 特更ニ毒烟ヲ撒シテ人ヲ窒息セシムルコトヲ以テ害
敵法ノ目的トスル処ノ彈丸ノ使用ヲ禁スル事

第三 人体ニ中リテ容易ニ膨張若クハ平扁スル処ノ銃丸ノ
使用ヲ禁スル事(英国ノ「ダムダム」丸ノ類ヲ意味ス)

第一ノ宣言ハ全会一致ヲ以テ通過シ第二、第三ニ至リテハ
英米ニヶ国不同意ナリ

其三 小銃並ニ海軍煩砲ノ制限問題ニ関シテ各国政府ニ於
テ考究ノ末互ニ協定ノ域ニ達センコトヲ希望ス

其四 各国政府ハ軍備制限問題ニ就テ考究ヲ繼續スルコト
ヲ希望ス

其五 戦時交戦国人民ノ海上私有財産ヲ互ニ相侵スコトナ
キ宣言ヲ為サントスルノ問題ヲ将来ノ国際會議ノ議題ニ
上ス事

其六 海軍ヲ以テ港湾、市府、村落ヲ砲撃スルノ問題ヲ將
來ノ国際會議ノ議題ニ上ス事

右希望案六ヶ條ノ内瑞西國ハ其第二ニ英國ハ其第三、第
四、第五、第六ヨリ分離独立センコトヲ明言セルモノ、外
各国異議ナシ

右国際會議ノ諸問題ハ多少将来ニ涉リテ繼續ノ性質ヲ持チ

以上三條約並ニ三宣言ハ各国ノ全權ノ調印次テ皇帝、大統
領ノ批准ヲ待テ国際條約若クハ宣言ノ効力ヲ生スベキモノ
トス我國モ右條約並ニ宣言ニ對シテハ異議ナク加盟セラル
ベキモノト信シ候尤モ此際各国全權ニ於テ直ニ調印スルト
來ル十二月末日迄ヲ期シテ調印ヲ了スルトハ各国ノ撰択ニ
一任スルモノニ有之即チ我國ハ後者ノ態度ヲ取ルモノニ有
之候

欧州列強中仏露兩國ヲ除クノ外概シテ我國ノ態度ト同様ニ
有之候其他第二流國若ハ群小國ハ此際全權ノ調印ヲ了シ申
候

右條約及宣言ノ外ニ會議ハ左ノ決議案並ニ希望ヲ揚言致候

決議案

會議ハ現今坤輿到ル処負担ヲ感スル処ノ軍費ハ人生ノ有形
若ハ無形上ノ幸福ヲ増進セシムルコトニ向テ大ニ制限スル
ノ要アルコトヲ認ム(全会一致ヲ以テ通過ス)

希望案ノ概要

其一 近々「ゼネバ」赤十字條約(陸戦ニ関スルモノ)ヲ
改正スルノ目的ヲ以テ国際會議ヲ開ク事

其二 中立國ノ權利義務ニ係ル問題(陸戦條規ノ)ハ之ヲ
最近ニ開カル可キ国際會議ノ議題ト為ス事

候儀ニ有之候間自今左ノ要領ハ我國力将来ニ涉リテ該諸問
題ニ解釈ヲ与ヘル上ニ於テ考究ニ裨益スル処可有之ト存候
ニ付有益ナル書籍若クハ諜報有之候節ハ其筋ニ向ヒ御報告
相成候様希望仕候

論

其二、決議案ニ對スル各国政府並ニ人民ノ態度並ニ評論

其三、希望案(六ヶ條)ニ對スル各国ノ意見評論

其四、本會議ニ對スル一般ノ評論

右謹テ報告仕候也